FIRESからの恵み

“私の教会を建てなおせ”

800 年前にサンダミアーノの十字架を通してイエズス様がアシジの聖フランシスコにご自分の教会を“建て直す”ように使命を与えられました。確かに、当時の教会は崩れそうでした。そして、現在までその影響が残っているほど、フランシスコはその使命を実行なさいました。聖フランシスコの時代と同じように、現代にもキリスト様の教会のふさわしい、敬虔な人が大勢おられます。といっても、昔から、その教会の力の元になった“家族”はますます、崩れてきているようです。この何年かの間、説教、公同書簡、使徒的な回勅とまでは行かなくても、ワールド家族の日などによって、教会のマジステリオム(教導権)が絶えず、かつて聖フランシスコに伝えられたメッセージが説き続けられています。つまり、家族において、家族を通して、家族とともに、家族によって、教会を“建て直す”ということです。

この証しの束は、夫婦や家族の中にある神的なエネルギーの力をあきらかに表しています。もしそのエネルギーを放出するならば、この世が変るに違いありません。それでは、私たち一人一人が自分に問いかけてみましょう、家族を“立て直し”、それを通して、教会を“建て直す”のに、私は何をすることが出来るでしょうか。

Fr. Donnon Murray O.F.M.
Franciscan Chapel Center

FIRES から受けた恵み

カール・ユングの造語に「共時性（synchronicity)」という用語があります。「別々の出来事が、相互の因果関係は認められないが、時間的に一致してそのつながりに意味が感じられる事態を示すこと」と定義されており、ギリシア語で「共に」を意味する syn と、「時」を意味する chronos を組み合わせてできた言葉です。この用語を借りてユングが表現しようとしたのは、複数の出来事や状況が同時に起こった場合、ただの偶然と断定して言い逃れる可能性はゼロに等しく、これらの出来事の背後には明らかに外部からの力、いわば超自然的な力が働いている、という事実です。私も、数多くの国々で FIRES[1]プログラムに取り組んできた中で、何度もこれに気づいてきました。これから思いつくままに、様々な国々で私自身が目にしたり耳にしたりしてきた恵みの数々、加えて様々な国の老若男女、クリスチャンである人ない人、個人、夫婦、家族、司祭そしてシスターたちからの恵みの証しを分かち合いたいと思います。これらは超越的な力の働きとしか説明できない、と私は信じているのです。

記事はだいたい、送られてきた順になっています。

世界中の、マリッジ・エンカウンターやファイヤーズ FIRES によってすばらしい影響を受けた、という何百万という人々のことを思うと、ここに記載した証言を読まれて多少大げさだと思われるものがあるにせよ、これらのプログラムが精神の血となり肉となっているということ、そして、それが次の動作への活力となっていることに同意しないわけにはいかないでしょう。

＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊

始まりはこうです。1971 年、日本で外国人信徒を対象とする唯一の小教区、フランシスカン・チャペルセンターの主任司祭だったベーダ神父は、休暇で米国に帰省した際、マリッジ・エンカウンターに参加する機会がありました。このような体験は自分が司牧する小教区の夫婦に有益だろうと感じましたが、フランシスカン・チャペルセンターに所属する夫婦は体験どころかマリッジ・エンカウンターについて聞いたこともなかったので、始めようがありませんでした。しかしその年偶然に、3 年に一度開催される「国際キリスト者家族運動連盟」（ICCFM）の国際大会がアイルランドで開かれ、英語を話せる日本人夫婦が 2 組日本代表として参加しました。この大会でマリッジ・エンカウンターが紹介され、日本代表の夫婦も 2 組とも参加しました。彼らが帰国したことを知ってベーダ神父は彼らに、フランシスカン・チャペルセンターの信徒夫婦のために体験を再現してもらえまいかと頼みました。ベーダ神父は私にも参加するよう声をかけてきました。参加した私は、今度は群馬県で日本人夫婦を集めるから彼らのためにも同じことをしてほしいと彼らに頼みました。それは群馬の夫婦たちにとっても、まったく新しい体験で、また大変有益なものとなりました。しかし、彼らが国際大会で体験したのはあくまで概要でしたし、英語で体験したことを日本語で伝えることにも限界があるため、この 2 組の夫婦もマリッジ・エンカウンターの全メッセージを掌握できていたわけではありませんでした。まもなく、米国でマリッジ・エンカウンターに携わっていた 1 組の夫婦が来日し、東京のフランシスカン・チャペルセンターに加わりました。彼らはマリッジ・エンカウンターを開催し、私も参加しました。彼らからアウトラインを譲り受けた私は、日本語に訳し始めました。始めから恵みと聖霊のみ業が伴いました。最初の聖霊降臨を体験した使徒たちもこの同じ恵みと聖霊をみ業を感じ

[1] Families（家族）, Intercommunication（通じ合い）, Relationships（関係・関わりあい）, Experiences（体験）, Services（奉仕）の頭文字です

たに違いありません。しかし当時、これがさらに豊かに、さらに深くマリッジ・エンカウンターの全体像のすばらしさを体験することになるだろうとは誰も想像していませんでした。

翌年、アルマンドとバーバラ・カルロ夫妻が来日し、英語でマリッジ・レトルノを開催しました。これによって本来のビジョンが示す霊的局面がさらに明らかになりました。そして、彼らを通して私たちが気づいたのは、本来のビジョンにそぐわなかったマリッジ・エンカウンターのいくつかの要素はすでに改められていたことです。私は大いに興味をそそられました。しかし、それにも関わらず、回心、和解、特別な喜びなど、多くの恵みをすでに体験したことに変わりはありませんでした。

＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊

次の証言はベーダ神父によるものです。ここで、神父は日本でのマリッジ・エンカウンターの初期のころのことを回想されています。

東京の六本木フランシスカン・チャペルセンターでのマリッジ・エンカウンター

フランシスカン・チャペルセンターでの外国人カトリック信者の集まりはCursilloが日本に伝わってくれたことに心から喜びました。当初、それは男性のみを対象とした集まりで、週末を利用して行われていました。この集まりは霊的な学習的黙想となり、多くの男性参加者にとって非常に役立つものであると同時に、信仰的にも深められ教会生活を活発にさせるものとなりました。特に、信徒会議でそれが発揮され、彼ら自身の家庭そして、社会にまでも影響を与えるほどでした。おかげで、彼らは自分たちの家族を真のカトリックの信仰に根付いた家族にするために、祈りを家族の生活に取り込み、キリストの愛のうちに皆を取り込もうと努力を惜しみませんでした。職場や仕事さえも正義と平和のための道具としようとさせました。

ちょうどそのころ、私たちフランシスカン・チャペルセンターの司祭たちはスペインで始まった霊的に大きな力を持っていて、なおかつアメリカにも広まって来ているというほかのプログラム、マリッジ・エンカウンターとよばれている家族の生活を深めることに直接携わっているプログラムのことを耳にしました。

私たちはそれについて調べてみると、日本のカトリック信者で、麻布教会のミサにあずかっているJoh and Teresa中村という人たちが、アイルランドでのCFMメンバーの国際集会の期間中に、プログラムの創始者であるカルボ神父自身が開いたという週末のエンカウンターを体験しているということを突き止めました。エンカウンターについての教書を取り寄せ、中村夫妻とフィリピンでチームをしていたSito and Sony Sisonの助けを借り、東京で英語を話す人たちを対象としたエンカウンターを開く準備を始めました。ここには日本人とアメリカ人の夫婦が何組かいたので、日本語と英語の両方で話すことに決めたのですが、ミサ、話し合い、食事、レクリエーションなどのときは英語が使われていました。夫婦はみなどちらの言語にも堪能でした。

イエズス会のフォンテス神父と私、ベーダ神父(フランシスコ会)は霊的指導者となりました。日英語ともに堪能な中村夫妻とSison夫妻はチームとして話をしてくれました。こうして初めてのエンカウンターは群馬県桐生市のフランシスコ会、黙想の家で開かれました。1971年のことです。

翌年アメリカへ休暇で帰国したわたしは、シカゴで行われていたナショナル・マリッジ・エンカウンターに参加してみました。その会場で代表的チーム・カップルのAmando and

Barbara Carlo夫婦に出会いました。そこで、日本でのマリッジ・エンカウンターの特別参加カップルとして来日して、カルボ神父のマリッジ・レトルノの紹介をしてくれるように頼みました。私は桐生の黙想の家で再度霊的指導者をしました。エンカウンターは即座に受け入れられ、私は直ちに田中夫妻と今回参加した夫婦たちを次回のために引き合わせました。ほどなくして、毎年、何度か彼らにチームとなってもらいましたが、各回、10組から15組の参加がありました。

参加者すべての人にとってエンカウンターは心の目を開かせてくれるものとなりました。ほとんどの参加者が結婚して数年たつ夫婦で、子供が生まれ、互いに愛し合いながらも、互いへの愛情をうまく表現できずにいました。そうなると小さな疑いが次第に大きくなって、あの人は私のことを本当に愛してくれているのかどうか、という問題にまで発展していきますが、それは当然のことといえるでしょう。マリッジ・エンカウンターの体験によって生み出された祈りと深い対話によってこうした疑いは数を減らし、新たなる喜びが彼らの結婚生活に芽生えていきました。

じきに、新たなチーム・カップルも数組うまれ、次のエンカウンターでは彼らがいくつかある課題の中で、それぞれに与えられたものに従って自分たち自身の経験を分かち合いました。英語でのマリッジ・エンカウンターは日本でははじめからエキュメニカルな経験でした。東京にある別の教会からの夫婦たちも参加し、チームとなる人たちも出てきました。1976年まではよくキャンピョン神父が私の代わりに霊的指導者をやってくださいました。その年、私は桐生へ移動となりました。キャンピョン神父は80年代半ばまでその役割をしてくれていました。多くの家族がフランシスカン・チャペルセンターでの聖霊な賜物を通じて新たな生活を見出していきました。それは世界中の家族へと広がっていきました。カトリックの人たちの間では恵みは家族としての祈り、ロザリオの祈りへと代っていきました。

マリッジ・エンカウンターのあとで、夫婦たちは毎月集まるようになりました。それぞれがともに親しい友達となり、ほかの教会との絆も強くなるとともに、エンカウンターに参加した家族の子供たちまでもが、週末に起きた自分たちの親の変化に気づきました。家に帰ると、まだ何がどうと変化したとはっきり表現は出来なくても、口げんかが減って、徐々に愛情や優しさのほうが現れてくるのを感じ取っているようでした。それがしだいに自らの家庭に留まらず、教会にそして社会全体にまで波及していく、そんな効果をだれが想像出来たでしょう。

これらのエンカウンターに参加した多くの家族はアメリカやそれぞれの国に帰ったあとも、親交を保ち続け、自分たちの新たな地域での活動を始めています。エンカウンターは夫婦が互いの愛を強くする本当の方法としての対話を教えてくれました。それは生活全体に反映されました。レトルノによって各々がむさぼる様に聖書を読み、聖書に書かれている通りのキリストの教えを習い、確かな意味での神の使徒とならせていきました。それによって、日々交わされる夫婦の対話が霊的に深められていきました。

キャンピョン神父も私も本国への休暇の旅ではいつもエンカウンターに参加した家族のところへ立ち寄ります。そこでは東京での喜びに満ちた生活がよみがえり、分かち合いをし、そして神が彼らへ下さった賜物への感謝を捧げます。こうした特別の恵みは常に彼らとともにあります。願わくはそれがつぎの世代の子供たちにも引きつかれ、それによって教会へも、社会へもそして世界中にと伝わっていきますように。
神に感謝！

＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊

FIRES の歩みと共に

松本栄四郎・光代

日本にマリッジ・エンカウンターが紹介されたのは、1973 年になります。その当時の社会の状況といえば、経済が高度成長の中で、多くの家庭が時間的にも精神的にもゆとりが持てず、家族のかかわりの乏しさの中で、家庭の危機、家族の崩壊が世の中で、叫び声をあげ始めた時期でもありました。

当時私たちも脱サラで事業を始めたばかりでしたので、夫は、家庭をかえりみる時間もなく、仕事に生きがいを感じ、そのことに没頭していました。妻も仕事（経理）の手伝いと３人の子育てに追われる日々でしたが、それで良しとしていました。その様な折、ダナン神父様から「マリッジ・エンカウンターに参加するように」と、あまりの熱心な勧めに断りきれず、7 歳と 4 歳の 2 人の子を母に預けて、授乳中の 4 ヵ月の娘を連れて、2 泊 3 日のこの集いに参加したのが始まりです。

当時は、結婚講座も充実しておらず、クリスチャンの家庭であっても身近な親や友人知人のいわゆる世間のごく一般的な結婚のスタイルを当然なものとして、受け止めていました。しかしマリッジ・エンカウンターに参加して、結婚に於いて神様の御計画があること、婚姻の秘蹟の中で生かされている私たちであること、結婚の霊性、主に於いての家族、・・・　等知ることができたことは、本当に新しい驚きでした。又このことは、私たちばかりでなく多くの夫婦、家族が、お互いの関係を深めたり、改善したりする機会になったことと思います。

ダナン神父様は、（後でおっしゃったことですが）当初、太田教会の信徒のためにとの思いでおられたようでしたが、その後、参加された方々の呼びかけで、県内の信徒夫婦を始めとして、そのうちどちらかが、未洗者の方の参加も増え、特に 5 年目あたりから、県外から岡先生の関係の方がたの参加が目だって多くなりました。神様から愛と救いの恵に預かった人々の輪が益々大きくなる中、全国から開催地、群馬のフランシスコ修道院においでになったご夫婦は、数知れません。

その頃「愛の炎」は、北海道から南は沖縄まで拡がっていきました。私たちも、仕事や子育ての一番手のかかる時期でした。奉仕出来ない理由をあげればいろいろありましたが、ダナン神父様と他の二組の夫婦とチームを組んでよく出かけました、と言うよりもその当時何か大きな不思議な力に動かされている思いを感じておりました。沖縄、長崎、山口、北海道方面ともなりますと、終わったその日のうちに帰宅できず 4 日間に及んでしまいます。始めの頃は、度々のことでしたので、仕事と家庭という現実の生活の中で、正直心の葛藤はありましたが、他のチーム・カップルの皆さんも、呼びかけに「ハイ」と応えていました。しかし、あの時、あのエネルギーは、今想いおこしてみても、もの凄い恵を受けていたことを実感できます。

思えば、太田教会の聖堂で行われた、「家族のワークショップ」の中でカルボ神父様が「あなたの家族は、何人ですか？」と皆に尋ねられました。それぞれ御自分の家族の人数を言いましたが、納得されず首をかしげておられました。「二人、三人がわたしの名によって集まっている所には、その中にわたしがいる」(マタイ 18･20)「さあみなさん、今日からその方をお招きしましょう」と･･･そのとき気付かされたみことばとの出会いは、その後の私たち家族の一人ひとりに確かな影響を、与えていただきました。

その後、私たちの家庭にも、イエスさまをお迎えしたいという思いの意識が湧いてきて、子どもたちと話し合い、家族の祈りの時を持つことができたことは、喜びでした。長男のギターに合わせて賛美のうたを歌い、それぞれが聖書を開いてみことばを聴き、その時々

の自分を分かち合うことによって、またそれぞれの一日の重荷、心の疲れを癒やし合う体験等を通して、イエスさまがともにいて下さることがだんだんと、信じられるようになりました。そのことによって家族の絆も、より深められたことは、大きな恵でした。みことばに導かれ、支えられ、助けられた出来事や、体験は、数限りありません。私たちにとって主と共に歩む新しい生き方となりました。

現在 3 人の子ども、長男はフランシスコ会の司祭の道を、次男は 2 人の子供にめぐまれ、娘はこの5月5日男の子を出産して、今休養のため我が家で過ごしております。4ヶ月の時、私達と、共に参加した娘は、親となりました。我が家は、親から子へ、子から孫へと移り変わろうとしています。以前、カルボ神父様が言われました。「愛の革命は、三世代かかります。だから今からはじめましょう」と、その時は、遠い先のことのように思えていたことが、もう現実となってきてしまいました。そして今、これまでの私たち夫婦の生き方が良きにしろ、悪しきにしろ、問われることでしょう。

FIRES のそれぞれのプログラムの体験は、未熟な私たち夫婦、家族に、新しい生き方へと導かれ、そしてまた、主と共に生きる豊かさの恵をもたらして下さいました。その恵みは、私たち家族の宝ものです。

＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊

後姿から学んだもの

松本栄子

わたしの幼少時代は、エンカウンターと共にあったと言っても過言ではない。そのころを振り返ると毎週末のように、どこかに預けられ、連休などはことさらであった。そして、お泊りの 3 日目には、必ずミサがあり、祭壇上にある椅子に、参加者と並ぶ名札をつけた両親を預かってくれた家族と一緒に眺める。ミサが始まり、いよいよシャロームと声高らかに両手を伸ばして叫ぶと、人々がどっと前へでていく。熱気でごったがえす人々をかき分けやっと両親のところにたどり着くことができるが、両親と再会を喜ぶのもつかの間、シャロームで忙しくなる。わたしは、離れないようにしがみつく。たくさんの人々の喜びの表情、そこに流れる涙、あちらこちらで響き渡るシャロームという声。そして、音楽。わたしが思い出すエンカウンターとは、このような風景だ。いつしか、シャロームで、喜ぶ人の顔を見るのが、楽しみとなり、両親が参加しているエンカウンターでは、大丈夫だったかそれを見るまでが心配ともなった。

もちろん、エンカウンターに直接参加はしていないが、幼いながらにその意味はよく理解していたと思っている。理解していたからこそ、連休ごとにでかける両親を快く送りだせるだけでなく、むしろ、お留守番することで、自分も参加している気持ちになっていた。ご存知だと思うが、エンカウンターにかける日数は、参加している 3 日間だけではない。さらに、チームとなれば、準備のために膨大な時間を割き、そして、帰ってきてからは得た恵みを意識して、生活の中で実践していく。それが何十年と繰り返されてきた。エンカウンターが近くなるとテレビのある部屋は占領され、リビングのテーブルには聖書とたくさんの紙とえんぴつ、そして消しゴムのかすが置かれるようになり、夜遅くまで、話し声が聞こえる。祈っている声が聞こえるといきづまっているのではないかと心配になり、慌しく私たちの世話をしながら直前まで講話を準備している姿を見ると「大丈夫？」とおもわず声をかけたくなる。

奉仕する両親の姿は、私の誇りだった。どんなに急がしい大変なときでも、だからこそかもしれないが、神様を信じ、まず聖書を開き、神様の声に耳を傾ける、そして家族で祈り、

賛美するという姿勢はかわらなかった。もちろん生活における親としての努力も惜しまなかったと思う。それは、私が両親と生活していた18年間少しもぶれなかったし、エンカウンターで学んだことは確かに生活に活かし続けたと思う。だからこそ、参加せずとも、エンカウンターで得た恵は、奉仕から始まり、そのまま家庭にながれており、その恩恵は十二分に受けてきたと言いきれる。わたしが奉仕する喜びを知ったのは、たぶん両親のこの後姿からだと思う。

現在、親元を離れたわたしは、NGOをたちあげ、フィリピンの山岳民族の支援活動を行い、同時に日本の団体でも働いている。何のために働いているのかすぐに、ぶれてしまう34歳になった私に、今でも両親は、「祈りなさい」という。「そうすれば、神様が道を示してくれる」。この言葉は、幾度となく繰り返し、小さい頃から聞いてきた言葉だ。結婚して、子どもが生まれた今、家庭を創る楽しさと難しさをかみ締め始めた。私が両親から学んだもの。それは、「神は愛である」ということ、「家庭は小さな教会である」ということである。生きていくのに必要な信仰、そして聖書。私にとって一番大事なこれらのものを、愛する我が子にも、伝えていきたい。両親の足跡をたどりながら、夫と子どもと生涯をかけて、小さな教会を一緒に創っていこう。

* * * * * * * * * * * * * * * * *

Balazs and Krisztina Menesi　ーハンガリー

海の水の一滴(ひとしずく)を見せて大海を説明するのがむずかしいように、わずかな説明でFIRESの意味するところを伝えようとするのは至難の業ですが、FIRES ゆえにわたしたちの心に芽生えた喜び、感謝、誓約、主にあって生まれ変わった新しい生活をせめていくつかのVivenciaでお伝えしたいと思います。

最初のVivenciaは、それは後になってFIRESにかかわって来る事になるのですが、FIRESが存在する前にさかのぼります。1968年、Krisztinaの父親は、当時はまだ結婚間もない若いご主人でしたが、問題を抱えて困っている家族を手助けする会を運営していました。Krisztinaの父親の仲間は神父、心理学者、精神科医といったキリスト教に根付いた友達で、義父自身は弁護士でした。ところが、彼らが活動を始めてまもなく、共産党員が定期的に会合を開いている彼らに目をつけて、これは自分たちの体制に反対する者達だという名目で義父を拘束し、6ヶ月投獄してしまいました。3歳のKrisztinaには、それを理解するのは無理ですが幼稚園でそのことを口にしないように母親は娘に、お父さんは日本へ行っているんだよと、話していました。30年後、1998年にバンコクで開かれたICCFMでBalazs and Krisztinaは日本から来ていたダナン神父様に会いました。それがダナン神父様に会った初めての日です。ダナン神父様を通じて、神は1999年以来わたしたちに、ここハンガリーの何千という個人ひとり一人、夫婦、家族に働きかけていく好機を与えてくださいました。

バンコクでの集まりで、わたしたちはダナン神父様、そしてカルボ神父様によるFIRESについての話を聞きました。わたしたちは神父様たちと話をしてみたくなりました。ダナン神父様は日本でのエンカウンターについて話され、わたしたちは夢中になりました。Krisztinaは「神父様、ハンガリーでオリジナル・マリッジ・エンカウンターを紹介していただくことはできますか」と尋ねました。思っても見ないことでしたが、神父様の答えは「YES」、即答でした。翌年1999年、神父様はハンガリーにやってこられました。そして、それからの7年間、毎年訪ねて来てはFIRESのすべてのプログラムを紹介してくれました。

またある時、神父様がいらしたときにスロバキアからの夫婦が私たちのそばにそばに立っ

ていて、私たちの会話を聞いていました。おもしろいことに、後で彼らもダナン神父様に話しかけ、神父さまにスロバキアにきて下さるように頼んだそうです。その結果、ハンガリーのときと同じように、そこでもFIRESのプログラムが何千という個人、夫婦そして家族に紹介されていきました。

1999年以来、FIRESのプログラムは定期的に開かれています。婚約者のエンカウンターは年に5回、オリジナル・マリッジ・エンカウンター・マリッジ・エンカウンター、SADE[2]（サデ）、セルフ・エンカウンターはそれぞれ年2回、マリッジ・レトルノ、セルフ・レトルノは各1回、司祭のためのエンカウンターは2年に1度、そして常に20人から40人の参加者があります。5人の神父様、そしてLaszlo Biro司祭様、また司祭のためのエンカウンターも企画してくれる、家族のための司祭と一緒に5組の献身的なグループとともに大変なプログラムをこなしています。カルボ神父様の本3冊が翻訳され、そのおかげで、1万人以上の読者にFIRESのメッセージを伝えることが可能となりました。

FIRESからのVivenciaは数限りなくあります。そのうちのいくつかは、その人たち、Gyorgy and Andi、Gabor and Tunde、Kalman and Vera、Imre and Zitaなどによって投稿され、この本にも載せてあります。わたしたちは個人的に彼らの証の証人です。そして、それらはわたしたちすべてに神の栄光を力強く伝えてくれています。

Vivenciaの一例

- これからのチームメンバーとのトレーニング。これらの分かち合いはチームの人たちの謙遜、正直さ、そしてconfianza(信頼)を通して本当に神との出会いでした。
- 土曜日の晩の典礼。たびたび神の存在を感じる中で多くの癒しを得ることができ、私たちにとってはこのすばらしいときを忘れることは決してありません。特にひとつの思い出は2005年ダナン神父様主催のSADEレトルノ(SADR)でした。土曜日の晩の典礼でメンバーが互いのために祈りあう時がありました。この祈りの終わりに、あるグループが神父様に、神父様はそのとき一人で腰をかけておられましたが、彼らの輪に入って祈ってくださるように誘いました。祈りのあと、神父様が立ち上がって振り返ると、神父様の後ろで35名ほどの参加者全員一人一人が神父様に直接触れることはできなくてもせめて、祈りの中心をなしている人たちを通して神父様に触れられるようにと、自分の前に立っている人の肩に手をかけながら立って祈りを捧げていました。
- 参加者の表情が変わるのを眺めるのはいつも驚きです。金曜日に到着したときのこわばった参加者の顔は、日曜にはニコニコと輝いたものに変わっています。人々は本当に変わるのです。そして、その変化は週末だけに留まることはありません。
- また心に留めるべきは神父様たちの顔です。司祭のためのエンカウンターの終わりには、神父様たちも、各々の神父としての誓いを新たにしています。司祭としての誓いを新たにされた神父たちのほほを伝う涙を私たちは決して忘れません。「そうです、神の民のために仕えたい！」
- 困難にもたくさん出会います。こうした本とは別に、敵（悪魔）が神様のために働こうとする人たちの気持ちを邪魔するにはどうしたらよいかといったような本も書けるかもしれません。ある時、とても面倒で、いらいらすることの多いエンカウンターの後でカルボ神父にそのことを話すと、神父様は「私たちの使命は成功させることにあるのではなく忠実であることです」と述べられました。
- 私たちはいつも、ダナン神父様がエンカウンターの最後に捧げてくださる感謝のミサを思い出します。神父様は私たちの目を新たに聖なる新しいイェルサレム（ヘル・シ

[2] Sons And Daughter's Encounter(娘・息子のためのエンカウンター)

ャローム=平和の町）へと開いて下さいました。そこは私たちの愛する人々、そして私たちを愛してくださる人々がいるところ、そして、それ以上に神様が光としておられるところで、太陽も星もなくてもすむのです。その光景は生涯私たちの胸に刻まれています。

FIRES プログラムは大勢のハンガリー人に非常に役に立っていますが、特にわたしたち二人にとっては大事です。FIRES プログラムに参加したり、企画したり、そしてチームをやらせてもらうことによってわたしたちの生活は力強く神に向けられていきました。

FIRES のおかげで、わたしたちは二人そろって祈りを持つようになりました。企画者としての熱意も徐々に変わっていきました。そして何よりもまず、祈り。Retorno も重要なものです。なぜなら、父なる神はわたしたちへの計画を持っておられ、御子はわたしたちにその計画をどのようにして悟るかを教えてくれ、聖霊はそれを実行する力を与えてくださるからです。私、Balazs はそれを私の個人的祈りの基本テーマにしています。

ロザリオの祈りが身近になったのもエンカウンターのおかげです。チームをやっていない時も、できる限りエンカウンター・プログラムに顔を出すようにしています。こうした短い訪問の間にさえ、仲間の仕事のすばらしさを目にすることができ、参加者に会い主催の神父様や夫婦たちと短い会話を交わすことができます。そして一緒に祈りに加わるのが常です。あるとき婚約者のエンカウンターを訪れたとき、私たちを呼んでこういわれました。「みなさん、これは大事なことなんですよ。一緒に行ってロザリオを唱えましょう。私たちはそれに従い、そしてそれは、忘れられない祈りに満ちたときでした。そのときから、私たちはロザリオを夕べの祈りにしてきました。夜 10 時をすぎて、いつもなら 2 連以上も唱えるのはとんでもないことですが、そのときは、静かな祈りの晩で、私たちは力に満たされていました。

聖書に気づかせてくれたのも、やはり FIRES でした。初めてのエンカウンターで、神が神ご自身の言葉で一人一人に語りかけてくださっているということを教えられました。初めは、そんなことさえ気付いていませんでした。 2001 年、ローマで開かれた FIRES、25 周年記念で、私たちは聖書を毎日読むという固い約束をしました。それ以来、神が聖書を通して私たちを導いて下さるのを数限りなく体験しました。そのいち例として･･･団体として、全員とうまくやるというのは容易いことではありません。何年か前、何ともてこずり困ったとき、私たちは聖書を開きました。正確にどの箇所だったかは覚えていませんが、何か、「その同じ車両に留まって、一緒に旅を続けなさい」といったような言葉でした。それに従い、いろんな人たちの思いにもかかわらず、みんなして一致を保つということのもとに行動したことで多くの実りを得ることができました。

あるヘルパーのカップルが私たちの招きに応じて FIRES に積極的に加わってくれるようになったのも、聖書によってでした。はじめ彼らは、自分たちがホストカップルになるには若すぎるからと恐れをなしていました。そこで聖書を開いて、見つけた言葉は「自分を、若いものだというな。ただ、私が遣わすところに行き、私が命じることを、つげよ。（エレミア書 1:7）」そして彼らはうなずき、それ以来婚約者のエンカウンターのすばらしい主催者となったのです。

私たちの結婚は FIRES によって強められてきました。これは私たちにとって、共通の望み、希望、困難そして喜びを与えてくれる「合同事業」で二人の間を限りなく深めてくれるものとなりました。子供たちとの関係においても多大な恩恵にあずかりました。私たちには 3 人のティーンエイジャーの息子がいます。長男は SADE に 2 度ほど参加しました。そして、

開催される、どのSADEにも参加したいといいました。始めてSADEに参加したあとに息子の口から出た、「これからもずっとFIRESの手伝いをして行っていいよ」という言葉ほど、大きなほめ言葉はないと思っています。

表現されない愛は愛ではないということをFIRESから学びました。家族の間で出来るだけ愛を表現しようと努めています。また和解の大切さ、子供たちにも、彼らが自分たちより小さな者だということなしに、対等に大人として尊厳を持って許しを願うことの大切さ、も学びました。数年前、わたし（Krisztina）は息子の一人に非常に腹を立てました。息子は10歳でした。息子を怒鳴りつけました。息子も、怒って怒鳴り返してきました。それはなんとも見苦しいさまで、私自身すっかり傷ついてしまいました。そこで、その晩息子のベッドの脇に座って、「あなたに我慢できなくあんなに怒ってしまってごめんね。でも、あなたも怒り返してきたことも、こんなになってしまった原因ね。私たち二人は似ているのかも。同じ欠点を持っているのね。」すると、息子は誇らしげにニコニコしながら、「そうだよ、同じ欠点を持っているんだよ」といいました。すべてが治まって、二人とも似た者同士なんだということを話し合う喜びに感動しあいました。

FIRES に関わっていなかったら、わたしたちの今の結婚生活が、家族は果たしてどうなっていたことでしょう。ただFIRESのおかげで豊かにされてきたということだけは絶対なる確信を持って言うことが出来ます。カルボ神父、そしてダナン神父様に引き合わせていただけたこと、そして、私たち自身をFIRESの手伝いに加わらせていただける機会がいただけて、それを通して主に近づくことが出来るようにさせていただけることを神に深く感謝いたします。

Balazs and Krisztina Menesi

* * * * * * * * * * * * * * * *

SADE＝私が召命をうけたところ

Fr. Juan A. Puigbó – ヴェネズエラ

召命というものは、何らかの道に対する呼びかけですが、それには聖職者への道も含まれています。カルボ神父様がおっしゃいましたが、多くの場合に若者が主の声を聞くことが出来ない理由は世の中の雑音のためで、自分の心の中にある神の声に注目できないように心を散らしていることです。ところが、SADE の体験によってその心の中にある声に注意する機会をあたえられて、その環境の中で特別の方法で神様に従うように呼びかけられていることを、識別できるようになる。以下はその例の一つです。

私が14歳のとき、両親は私に1989年3月の週末に開かれるSADEに参加するよう勧めました。正直なところ、知っている人が誰もいないので、初めはいやでした。それでも、そこに留まろうと決めました。それは、最終的に思いもよらぬほどすばらしいものでした。その週末の間中、私は神が私に司祭になるように望んでおられることを強く感じました。なぜそんな気持ちになったのかわかりませんが、そうした感覚を思えたのは事実でした。突然、いろいろな町に行ってミサを捧げている自分の姿や、人々の告解を何時間も聞いている己の姿を想像し始めました。ほかの人たちに、そんな私の考えをどう思われようとも、事実それが私の心に起こったことでした。何枚も何枚もに、この自分の思いを書きつづり、そこにいる指導司祭だけに何度も、長いこと話を聞いてもらいました。ほかの人にはまだ話したくありませんでしたから。そして、ただひたすら祈りました。非常によろこびに満ちた週末でした。

エンカウンターが終わって何日かたってから、Maturín というヴェネズエラ教区にあるSADEのチームに招かれました。そこで、じきに私もSADEのチームになりました。自分

でも信じられませんでした。なんという驚き！この、こんな私が、自分の VIVENCIA を友と分かち合うことによって、このプログラムに魅せられたその感激を熱心に友に勧めているのです。彼らとは、たびたび会いました。

ところで話は変わりますが、ガールフレンドとも初めてのデートをしました。何ヶ月かしてから、彼女に、あなたのことをとてもきれいだと思うし、特別な思いであなたを愛しているのだけれど、実は私は神様が私を司祭になるように呼んでおられるのを強く感じるのだ、と打ち明けました。彼女は私の意味するところをわかってくれ、私のために祈っていると言ってくれました。そして、その彼女の祈りが通じたのです。

SADE で、私は、ほかの多くの仲間が、マスメディアが望んでいるような存在になろうとしているのに反して、そのようには絶対になりたくない、と思っている自分を知りました。そんなことはしたくない。なぜ流行のものを買わなければならないのだ、その人自身がどういう者であるかよりも、何を持っている人かというほうが重要視されるようなことを、なぜ気にしなければならないのだ。いやだ！私はそんなことは望んでいない。私は私自身でありたいし、SADE に参加して、何であってもありのままの自分で在りつづけると決意しました。

両親が常に私の味方でいてくれることを神に感謝。両親は、二人の姉妹や弟に対してと同じように、私の生涯に限りない祝福を与えてくれました。父はいつも、もし生涯かけてよいことをしたいと望むのならその代償を支払う覚悟が必要だと言っていました。例えそれがどんな形のものになろうとも、私はそれを支払う覚悟をしました！

ある日、SADE の創始者であるカルボ神父の地方大会にチームメンバーと一緒に出かけました。1000 人ほどが集まっていました。すごい！ステージの上でカルボ神父が飛び上がったりダンスをしたりするのをずっと見つめていたのを覚えています。2－3 年して、カルボ神父と管区教区の“労働者である司祭”の神学校に個人的にたずねました。そこはカルボ神父が属しているグループで、そして今、この私もそこに属しています。

しばらくして、両親に司祭になりたいという私の希望を伝えました。彼らは、霊的指導者を探すようにというすばらしいアドバイスを出してくれました。ヴェネズエラで Cursillos をはじめていた Fr. Cesareo Gil に会うようになりました。2 年かけて、ギル神父は私が神を見出せるように手助けをしてくれました。わたしの霊的生活は高められました。それに加え、聖母マリアの存在はこうした年月の私にとって特別の恵みでした。1992 年 8 月、高校を卒業後、ヴェネズエラのカラカスにある神学校に進みました。養成期の間、私は私の霊的な願いを磨いていきました。私は敬虔な道を歩みたいと思いました。イエズス様のために命を捧げたいと思いました。

2001 年 3 月 24 日、Caracas 教区の María Madre de la Iglesia で私の Diego Padrón 司教様 より叙階の秘跡を授かりました。生涯で一番幸せな日でした。いまは、Washington DC で、青年や夫婦の助けをしています。

この VIVENCIA を読んだ下さった皆さん、あなた方もためらわないで！行って神のみ旨に耳を傾けましょう！

＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊

身近に救われた人々の体験

この人は若い頃、青年会で活躍してそれ以来ずっと教会を離れていたましが定年になって

自分の人生を見つめ直し教会に来たものの、その変化に戸惑っていました。そんな時マリッジ・エンカウンターを体験した後、積極的に教会に奉仕をする様になり、翌年奥さんが洗礼を受け、今では聖堂の座席に毎週お二人の姿を見ることが出来ます。

離婚の危機にあっていたのに解消した夫婦
今年のお正月、4 人の子供たちをつれて家族揃ってミサに来ていた夫婦ですが、20 年程前に夫婦の仲がうまく行かずにいたときマリッジ・エンカウンターに参加したところ、自営でやっていた事業も何とか夫婦で協力してやって行くようになり、子供も次々に成人してうまくやっています。あの時、家族が崩壊してしまっていたらこんな喜びはなかったと感謝していました。

ファミリー・エンカウンターに与った家族
年老いて娘夫婦と一緒の生活に踏み切った夫婦、家族のエンカウンターの体験から娘と和解へ導かれて以来、今は孫の面倒を見るのが生き甲斐になって幸せな生活を感謝しています。

離婚の危機から脱出した夫婦
親たちは自分たちの死後、子供たちが経済的に困らない様にと財産を残されたのですが、その遺産があった為に働かずに音楽を志して・・・ついに遺産を使い果たしてしまい、経済的に苦しくなって夫婦喧嘩が絶えなくなり子供にまで離婚したらと言われていた夫婦・・・マリッジ・エンカウンター後、自己との出会いがあって、自立する事が出来て今では夫婦して働き出して頑張っています。教会にも行くようになったと電話がありました。

＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊

今村智行・豊子

FIRES を通して頂いてきた恵みを、思い返す時間をいただいて、思いがけず二人で充実した時間を過すことが出来ました。後悔の涙を流したり、嬉し涙を流したりと、忙しい日々でしたが･･･。我が家の今の子供たちの家族の涙や 5 人の孫達の様子を思います時、カルボ神父様のカテドラルの話が、思い出されます。私たちはその完成をみる事は出来ないでしょうが、確かに土台が築かれ、子供たち、孫たち、･･･次の世代へと時間は掛かっても、少しずつ築き上げられている事を信じることが出来るのは幸せです。長きに亘って体験して来たことをどう表現したらよいのか、迷いながら書いてみました。

先日、教皇様は四旬節に当たり「祈りと断食、愛の業」という伝統的な悔い改めの手段を再発見し、この四旬節を「内面の刷新の時」とするように呼びかけられました。私達が FIRES のプログラムの中でいただいたものは、正に個人として夫婦として家族としての「内面の刷新」のチャンスであったと思います。『私は生命と死、祝福と呪いとをあなたの前に置く。あなたは生命を選べ。そうすればあなたもあなたの子孫も生きるだろう』という申命記の私達にとって忘れられないみことばがあります。私達が幸せになるようにと様々な出来事を通して「こっちだ、こっちだ。こちらを選べ」と導いてくださった、大きな父なる神の愛を感じ、感謝せずにはいられません。金婚式をあと何年かで迎える私達ですが我が家の歴史を振り返りながら FIRES の様々な体験を通して価値観が変えられ、その都度立ちどまって軌道修正しながら歩んできた日々を思い出しています。

マリッジ・エンカウンター
夫 38 歳、妻 37 歳、長男 12 歳（小 6）、長女 8 歳（小 3）が初めてマリッジ・エンカウンターに与った時の我が家の状況です。新工場設立の為に前橋の地に転勤して来て父から受け継いだ事業を発展させるべく一族の将来を背負って仕事に専念していた夫と子供が手を離れレジオマリエの活動会員として教会の奉仕活動をしていた妻でした。経済的にも恵まれ

家族も健康で何不自由なく生活していた私達でしたが何かが足りないというか満たされない思いがあり、もっといい夫婦になりたいと当時家庭会に入り各家庭を持ち回りして毎月開かれていた集いに出席していました。そんな折にマリッジ・エンカウンターに参加したのです。妻は夫婦の時間が持てて喜んでいましたが夫は家族のためにと仕事、仕事で全国を飛び回る生活で家庭のことは全て妻まかせ、現実を逃げていたことに気付きショックを受けました。

日常生活を離れ客観的に自分自身のこと、二人の関係や神との関係を見つめることが出来て、神が結婚に対して一致という計画を持っていられる事、そして私たち夫婦はそれを証していく使命のあることを知りました。自己との出会いで、自分の良さはなかなか認められず、生活の中で自分に死ねずにお互いを苦しめている現実を悲しく苦しく思ったことを思い出します。価値観の転換を迫られましたし、祈り・働き・学び・奉仕のバランスの必要性に気付き生活全般にわたって識別するチャンスとなりました。現実を『観察して・判断して・行動に移す』という大切なことも学びました。「私たちの結婚の評価」の問いかけ『何故わたしは生き続けたいのか、何故わたしはあなたと生き続けたいのか』という問いはそれまで考えたこともなかったことでしたが、お互いに初めて長い手紙を書いて対話をしました。これらは以後、生活の中で自分に問いかけるものとなりました。私たちにとって一番ショックだったことは、クリスチャンの夫婦なのに、いただいている婚姻の秘跡の重大な使命を認識することなく結婚生活を送って来てしまった事でした。二人の肩に優しく手を置いて共に歩んでくださっているイエズス様のバンナが強く印象に残り、いただいた恵みを生かした生活をしたいと心から思いました。以来、私達は「夫婦の祈り」を一緒に祈ってきました。今でも毎朝手を取り合って、この祈りをしていますが、そのことで二人していただいている婚姻の秘跡を確認し、使命を意識して一日をお捧げしています。

はじめてのマリッジ・エンカウンターは、なにも分からず唯、夢中で過ごしましたが夫婦のあるべき姿や、神の望みを知り、人生の目標が出来た嬉しさで一杯でした。生活の中では徐々にではありましたが、変化がありました。私たちはお互いにオープンになったと思います。「自分の考え・望み・感情・霊的なこと・罪までも・・・分かち合うことが必要」と言われても恐れがあって、不可能なことと思っていましたが、私達の中にイエズス様が生きて下さっていることを意識し実感することで、恐れから解放されて、少しずつオープンになれたと思います。仮面はお互いに必要ではなくなりました。お互いの弱さを忍耐したり、許したり、思いやりを持って励まし、慰めたりと暮らしと、若い時この生き方を知っていたらもっとよい夫婦に家族になれたのに、という思いがあったのですが、FIRES の様々のプログラムが紹介される頃には子供たちは成長し、様々のことにチャレンヂし、自分で判断し、自分の信仰を求める年齢になっていたからです。

私たちはクリスチャンの夫婦として生きた信仰を子供たちに財産として残したいという強い思いがありましたので、FIRES の体験を通して、子供たち自身が具体的に体験し導いていただいたことを有難く思います。SADE や SADE・レトルノに与った子供たちの変わり様には驚かされました。高校生になったばかりの長女は自分の部屋の天井にまでロック歌手の大きなポスターを張り、受験後の開放感からか毎日ギターを弾き、大声でロックを歌っていました。ところが参加後にはポスターは剥がされ、自分の部屋には祭壇を作り、聖書を置き、賛美の歌を歌うようになりました。我が家では子供たちの小さい頃から毎晩 8 時に全員集合してロザリオの祈りをしていたのですが、以来ロザリオに代わってギターを弾いて賛美の歌を歌い、みことばを聞いて分かち合うようになり、子供たちが祈りの雰囲気づくりにも積極的に協力し、祈りをリードしてくれるようになりました。子供たちは勉学の為に家を離れる前に、家族で一緒に祈りあう楽しい時を持てたこと、そして家を離れて

も、子供たちが 8 時には家族が集って自分のために祈っているのを知っていた事は、本当に良かったと思っています。いい時期に次々と FIRES のプログラムを体験できた恵みです。

マリッジ・レトルノ
夫婦でこんなにも長く霊的な事を分かち合い、共に祈ったことは初めての体験でした。御父、御子、聖霊各々のペルソナの働きを意識するようになっただけでなく個人の祈り同様に、夫婦の霊性を大切にするようになりました。エンカウンターの中で「自己と出会うことによって通じ合いが生れ、和解に導かれ、一致に到る」事を度々聞く中で、自己との出会いこそ全ての出発だと思ってはいましたが、自分を愛していなければ他人を愛する事など本当の意味で出来ないと知り、悩んでもいました。レトルノの体験の中で、みことばを味わう中で自分との和解に導かれました。

「知恵の書」から「私たちは父なる神から愛のうちに造られた者、神がよしとして下さった者で、私たちの価値は存在そのものにあり、神の目には尊い者である」ことを知り、これらのみことばを通して、又お互いの生い立ちの中で徐々に、ありのままの相手を受け入れ易くなり、何かあっても「ごめんなさい」が素直に出てくるようになりました。最近思うことは、二人の価値観や、考え方、感じ方など、本当によく似て来て、一つの心で生きられる幸せを感じますが、これはお互いにいただいている婚姻の秘跡を、授け合って来た実りと喜んでいます。そして今、結婚して自分たちの家庭を営んでいる子供たちが私達の思いを継いでくれている姿は、世間的な価値観の中で子供たちを育ててしまった私達の失敗にもかかわらず、この秘跡の恵みと感謝しています。

RE
長男が高校生、長女が中学生の時に RE に与りました。私達は成長した子供たちに対して両親の仲睦まじい姿を見せられなかったことや、忙しさに追われて、ゆっくり子供たちの話を聴いてやれなかったこと、それから親の権威をふりかざして威圧的な態度を取って来てしまったことなど子供たちに謝りました。そして愛を表すことが下手な親だけど、本当に子供たちを愛し大切に思っていること、彼らを信頼し誇りに思っていることなどを伝えました。私達は子供たちにお互いの愛し合う姿をプレゼントする事を決意しました。RE の体験を通して、私たち親の方に子供たちと対等に分かち合う姿勢が出来たと思います。

子供達も SADE の体験が同じ頃にあって各々すごく成長していきました。そして自分の心のうちを分かち合ってくれるようになり、何かあると子供たちの方から手紙に書いて分かち合ってくれるようになりました。子供たちの手紙は今でも私たちの宝物になっています。

ファミリー・エンカウンター
長男が大学生、長女が高校生になった年にファミリー・エンカウンターを体験しました。私達はお互いを必要とし合っていること、そして親よりも大きな愛で子供たちを愛してくださるイエズス様が子供たちの中に生きて下さっていることを実感し、親のエゴでその主を殺してはならないと強く思いました。私たちは弱さや足りなさを持つ者だけど、互いに受け入れ許し合い、良い面も認め合いながら同じ方向を向いて共に歩んでいく事を話し合いました。私達は子供たちからも祈られている事を知りキリストに於ける兄弟姉妹である事を味わいました。私達は本当にラッキーだったと思います。初めてマリッジ・エンカウンターに与った時には昔の傷や結婚生活のこれまでの傷などを分かち合う事を通しても、そのことを実感できました。私たちは自分を愛せずに自分で自分を嫌い、受入れずに混乱した日常生活を送っていたのですが、その間もずっと支え見守り愛し続けてくれた神の愛、そしてお互いの愛にも気付く事が出来て信頼が深まったと思いました。
マリッジ・レトルノ後、特に変わったことと言えば神は共に居て下さり、みことばを通して

人を通して、様々な出来事を通して自然を通して、今の私に、私たちに語って下る方であると信じることが出来るようになったことです。そして特に聖霊を生活の中で意識するようになり「みことばをわからせて下さい」とか「愛する力を下さい」とか聖霊に祈ることが多くなりました。家族の病気とか、転職、子供たちの結婚問題や経済面でも重大な出来事が次々に起こりましたが恐れないで逃げないで避けないで、それらに直面する姿勢が出来るようになったと思います。様々な体験から、必ずその苦しみを神はいいものに変えてくださるチャンスになると信じられるのでゆだねることが出来るようになってきたと思います。

パウロの「神のご計画に従って召されたものの為に、神は全てのことを働かせて益としてくださる事を知っています」と言うみことばは、私たちが色々な出来事の時にいただいた忘れられないみことばです。「このことも益として下さるのですか」と問いたくなる時もありました。たとえば 6 年前、夫が癌の宣告を受けた時に二人で祈った時にもこのみことばを味わいましたが、この入院手術を通しても私たち夫婦の絆を深めてくださり、人との関係をも改善して下さって、「本当に神は全ての事を働かせて益としてくださる事を知っています」と喜びをもって言う事が出来るようになりました。

チームとしてこの奉仕に携わって来て今思うこと･･･
私たちは自分たちの体験したこの素晴らしいものを多くの人々と分かち合いたい一心で奉仕に携わってきました。当初は何も分からないながらも次々と様々な体験をさせていただいたお陰で、少しずつ奉仕する度にお互いの理解が増し、エンカウンターに対する確信が深められていきました。ダナン神父様の熱意ある、そして確信に満ちたご指導のお陰で、多くの共同体のメンバーとの交わりの中で喜びを沢山いただいて来ましたが、惨めな私たちの生活をありのままオープンに分かち合うことの辛さも度々味わって来ました。

ある時エンカウンターの始まる晩のこと、桐生の修道院の坂を登る車の中で「こんな嫌悪な二人の関係で奉仕なんてもう出来ない、もう嫌だ。このまま帰りたい」という思いでしたが聖堂の十字架像の前に二人でひざまずいた時、裸で十字架にかけられ人々の前にご自身の全てをさらけ出して居られるイエズス様の姿が強烈に飛び込んで来て････その時なかなか一つになれない惨めな私たちの生活ですが、このありのままの姿を差し出そうと決めて落着くことが出来ました。私たちは「何故私達がチームに」という思いがずっとありました。人前に出ることは好きではない二人だし、まして人前で話す事など苦手なのに･･･と。

でも今はサムエル記の「人はうわべを見るが主は心を見る」ということばのように、もっと神を愛したい、神の愛に応えたいという私たちの心を、主は見ていて導いて下さったという喜びを感じています。創立者であるカルボ神父様には、スパイラル･エンカウンター、司祭のエンカウンター、ホーム･エンカウンターなどで親しく度々お目にかかることが出来て、沢山のキーワードとなる忘れられない言葉をいただきました。奈良のオヘール神父様が「キリスト様は使徒たちを集め自分たちだけの場所へ連れて行ったがチーム･トレーニングの場は正にその場だ」と言われたことがありました。各々の夫婦が、自分の使命を感じてキリスト様の下に集い、様々なことを学び喜びをもって夫婦家族への奉仕に派遣されていく･･･その喜びに、息子や娘たちと共に家族で参加させていだけたことを嬉しく思っています。溢れるほどにいただいた恵みを無駄にすることなく生かさなければと強く思いました。パウロのことばの『人に福音を伝えておきながら自らが失格者とならぬように』ということばは、いつも心がけていた事でした。

カルボ神父様は全国チームトレーニング・スパイラル・エンカウンターで、「幸せの鍵は神のみことばです。神のみことばに聴いて常に回心の心を保つこと。幸せの鍵である神のみことばに心を開いて常に聴くこと」を繰り返しおっしゃいました。このスパイラル･エンカ

ウンターも私たちにとって恵みの体験でした。「神のみことばに対して開かれた心があれば、たとえ生活を通して神から離れるような事があっても神のみことばによって再び神の愛を発見し神に近づく事が出来る」これはレトルノで言われることですが、これは真実で、神のみことばこそ幸せの鍵だと今、確信しています。

今から30年以上も前の初めてのマリッジ・エンカウンターの時の事を思うにつけ、神父様はじめ沢山の人々に支えられ、祈られて生きてこられた事を感謝しています。私達の歩みを振り返るとき、神がイスラエルの民をエジプトから救い出され解放されたその歩みと重なります。世間の価値観の中にどっぷりとつかっていた私達を、神は力強いみ手を差し伸べ、私達を導き、生い立ちの傷をも癒し解放し自由にして下さいました。度々罪を犯し、鈍い私達を見捨てずに忍耐を持って導いてくださいました。先日祈りの時に「わたしはお前の神ヤーウェ、お前をエジプトから導き、豊かに満たした」(詩編)というみことばに出会い思わず涙がこみ上げて来ました。エンカウンターと出会う同時期に、私たちは在世の身分に留まりながらアシジの聖フランシスコの福音を生きる事を約束してフランシスカン・カップルとしての道を歩んで来ました。

転勤で前橋の地にやって来てフランシスコ会の神父様方を通してフランシスコに出会いFIRES の様々なプログラムを体験できた聖霊の導きに心から感謝しています。私たちは私達の主は生きておられ、父なる神に喜んでいただける知恵と恵みを与えて下さると信じることの出来る体験をFIRESを通して沢山いただきましたので、残された人生、それを深めていきたいと願っています。

司祭のためのエンカウンターに参加して
5月の連休に桐生の修道院に於て、カルボ神父様の指導による司祭のエンカウンターが行なわれました。島本司教様はじめ全国からの45名の司祭が参加し、国籍も年齢も違い、叙階2週間目という若い司祭から、司祭生活50年という老司祭まで様々、叉教区司祭と10の違う修道会の司祭たちでした。

“小さい教会である家族を通して福音化するように”という現代の教会の教えに基づいて私たちマリッジ・エンカウンター.のチーム・カップル達も奉仕しました。司祭のエンカウンターには、各自が深く自己と出会い、神に出会う目的があります。エンカウンターは、いつも私たちに現実を見つめ、そこから出発して判断し、具体的な行動に移すことを教えてくれますが、今回もまず現実を見つめることから始まりました。司祭たちもこの多様性のある社会の中で、私たちと同じ様に沢山の危機に直面しております。自分自身を正直に見つめ、オープンに分かち合う司祭の中に、私たちへの愛の為に、ご自分のすべてを与えつくし、傷つき孤独なキリストの姿を見ました。共に祈り合い分かち合う4日間の中で、私たちが同じ人間であり、クリスチャンであり、兄弟であること、神の家族としてお互いに必要としている存在であることを実感することができて、親密な出会いがありました。愛が自分の中でスパイラルの様に拡がっていく嬉しい体験でした。

ある司祭は期間中、お母さんに「自分を司祭にしてくれてありがとう」と電話をしたそうです。お母さんは突然のことにびっくりして、他人行儀に「どういたしまして･･･」と言ったとか、そのことを話してくれた司祭の顔は、解放された喜びに輝いていました。苦しみながらも司祭職におけるご自分の現実をみつめ、人間性の足りなさも可能性も認め、確信を持って奉仕職の更新をする司祭たち。

5月5日の桐生修道院の中庭に、シャロームの声が響きわたりました。大勢の信者が詰め掛けて、45人の司祭たちの共同司式による最後のミサは壮観でした。カルボ神父様は、パパ

様のように日本語でメッセージを下さり、私たちに愛を現してくれました。司教様は「自分で見たこと、膚で感じたこと、又この手で触れて味わったこと、皆の信仰と信仰が醸し出す家庭内の愛とその周辺の家庭に広がって行く愛の炎の証人としてこの司祭のエンカウンターのことを、司教団に伝える」と喜んで話されました。

私たちは9年前の5月の連休に始めてエンカウンターに参加しましたがその時、今は大学生になっている子供たちは二人とも、まだ小学生でした。この9年間の私たちの歩みを振り返る時、司祭からどんなに沢山の助けを受けて来たか、特に司祭からしかいただけない恵みを受けて来たかに、改めて気づかされました。

様々な価値観のあるこの社会の中で迷うことの多い私たちですが、直面する様々な問題を、福音的に歩める様に、手を差し伸べて下さいました。今、私たちがクリスチャンの家族として、幸せに生きていられるのは、司祭たちのお陰です。そういう感謝の気持を込めて分かち合って来ました。今回のエンカウンターでは、夫婦から出発して子供たち、そして司祭へと、神の家族として神の民が一つとなる希望の体験をさせてもらいました。特に、特別聖年に当って回心を呼びかけてくれた、このエンカウンターは、神からの大きなプレゼントだったと感謝しております。祈りで支えてくださった皆さんに心から感謝！
神に感謝

＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊

八戸

私は妻と一緒にマリッジ・エンカウンターに参加できたことに感謝しています。夫婦での改まった話し合いは普通では考えられないことでしたので、大変有意義でした。
＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊
「私たちの息子夫婦の関係が危ない」と息子から連絡がありましたが、マリッジ・エンカウンターでの分かち合いのおかげで神の助けがあり、今はとても良好です。
＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊
和解と、許すということに関するテーマのある典礼、そして、私たちはとかく不幸な事情が起こる時に神様を責めてしまうことがありますが、それについて深く内省することが出来ました。私たちは常に、神様との和解が必要であるという教訓は、今もずっと心に残っています。

＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊

† 主の平和　　水野昌子

私たち夫婦は、マリッジ・エンカウンターと同じ年月の結婚生活を歩んできました。聖家族になれるようにと目標を持って歩んできました。二人の娘は結婚し、孫3人となりました。昨年6月18日に、生まれて一週間で孫は天国へ行ってしまいました。名前は望愛（ノア）です。この娘夫婦には、初めての子供でしたが、このことが、この夫婦をより深く結び付けて常にどんなことも、二人で分かち合うことを学んでくれました。これから、少なくとも4･5人は、家族を増すといっています。神に感謝です。

私たち夫婦、そして家族は、神父様に『食卓を囲む』ということを教えていただきました。私たちのテーブルにはたくさんの人たちが、いろいろな時を過ごして帰られました。お手紙には、書けない人たちも来てくださいました。そして、その時々にすばらしい分かち合いをしてくださいました。神に感謝です。

私は、自己との出会いとラセン階段の話をします。自分を好きになるように、すべての自分を愛するように、と伝えます。どんなに苦しいことや、つらいことがあろうとも止まっ

ていることはないということで、ラセン階段のように少しずつ登っていけば良いということですね。私たち夫婦は大海へ出ることは苦手ですが、隣人のために自分を使ってくださいと、いつも祈っています。そして実行しています。

私たち夫婦が、現在まで結婚生活を営むことが出来たのは、桐生のクララ会のシスター方のお祈りのおかげだと思います。今から 27･28 年前ですが、マリッジ・リ・エンカウンターかレトルノかと思われるのですが、フランシスコ修道院でシスター方とご一緒にあずかることがありました。その時に、私が驚いたのは、一日中お祈りの生活をしている人がいるということです。当初、私はお祈りは苦手でした。そのシスター方と分かち合う時を持たせていただけたことが大きな感動で、それ以来 27･28 年間、手紙やら何らかのかかわりの中でつながっています。神に感謝!!

まだまだいっぱいあるとは思うのですが、どう表現していいのかわからないのでこの辺で。私が祈っていたことのひとつに子供の中に修道者がうまれますようにということがありますが、現在長男 31 歳、まだ望みは捨てていませんが･･･

＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊

渡辺

早いもので夫が死んでから今年で丸 9 年になります。自分で車を運転中、心不全の発作で意識不明になり助手席の人がブレーキをかけてくださり、車は止まり、他人に迷惑をかけずにすみました。

救急車で病院に入院し 17 日目に 63 歳でなくなりました。通夜、そして葬儀ミサと何がなんだかわからない状態でした。一つ一つの出来事は覚えているのに心の状態はどうしても思い出せないでいるのです。ミサも終わり夜、独りになると廊下の障子に虫が当るような羽音が聞こえてきます。我が家は二世帯住宅なので、二階の息子たちに調べてもらいましたが異常はなく、「何もないよ、お母さんの気のせいだよ」と申します。息子夫婦にしばらく一緒にいてもらいましたが二人には聞こえない羽音は私には聞こえます。また静かになった夜、居間の方から夫の声が聞こえてくるので行ってみると誰もいません。暗い部屋の中で声をころしていつまでも泣いていました。

主人の死や、自分の肉体的な問題、その他の思いがけない事情で耐えられないほどの状態になったころ、主が私の祈りに対して、そっと励みのある答をして下さったような気がして、喜びに満たされました。というのも、私がもうすでに十分に苦しんだので、これからは主が私を支えてくださる、ということでした。その確信を得られて時、体験したマリッジ・エンカウンターや家族のエンカウンターの精神を思い出さざるを得ないことになりました。つまり、私たちの生活をすべて主の手にゆだねるならば、主がすべてを計らってくださる、ということです。

今現在は、とてもあたたかく愛を込めて扱ってくれる息子と心から分かち合うことが出来るし、そして私の性格とはまるで違っているがゆえに自分の中に足りないものを補ってくれる嫁とも、また、中三の孫とも分かちあうことが出来ます。この 3 人の中にいて、夫をなくして出来ていた私の心の中の真空となった部分が埋め合わされ、暖かい家族の雰囲気を取り戻すことが出来るようになりました。

私のモットー、つまり私自身がいなくなったらば、私が体験したと同じ苦しみは誰も味わう必要はない、そして、やはりエンカウンターの精神を生かすこと、です。今、私が体験している喜びはそこにあります。主が生きておられる、主が私の中に生きておられる。ど

うしたら私は私に対する主の、その偉大なる愛に応えることが出来るでしょうか。そう考えるとき、とめどなく涙が出てきます。

＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊

マリッジ・エンカウンター/FIRES と私達家族

【その 1】夫として　　三木明・節子

私達家族はマリッジ・エンカウンターと FIRES のプログラムとの出会いを出発点として個人として・夫婦として・家族ぐるみとして成長し、家族生活の質を高めることができたと確信しております。「主においての家族」を作るという究極の目標に向かって歩み始める機会として、また道しるべとしてマリッジ・エンカウンターと FIRES のプログラムに参加することは私達家族にとって何よりもすばらしい「神様からの恵み」となりました。

私達夫婦がマリッジ・エンカウンターに始めて参加したのは 1977 年であり、結婚して 13 年目でした。この時、妻（節子）が洗礼のお恵みから 2 年後で、子供 2 人（長女と長男）は小学生でした、そしてマリッジ・エンカウンターに参加するまでは、私は何つとして問題がない理想的な生活を過ごしていると思っておりました。しかし、マリッジ・エンカウンターに参加して今までの家族のお互いのかかわり方や生活に大きな誤りがあることを知り、ショックを受けました。

その後、夫婦のための RE・ENCOUNTER などへの参加の機会を得ながら、子供たちの洗礼のお恵み・次女の誕生、そして子供たちも SADE に参加の機会を得て大きく成長いたしました、その後、私が洗礼のお恵みを頂き、やっと家族の仲間入りができた思いでしたが、その数日後に幼稚園の先生をしていた長女が「一度しかない人生だから世の中のために生きたい」と申して我が家を離れ、聖クララ会修道院に入会し、清貧・貞潔・従順・聖域を守る祈りの生活を選びました。

私達夫婦は故郷が同じで、お互いに仏教の家庭で育ちました。当時、日本（特にこの地方）は父親絶対君主主義の習慣でした。結婚についても、男性は嫁をもらう、女性は嫁にもらわれて行くとの考え方が残っている時代でした。このような家庭で育った私たちには結婚当初はカトリック信仰の教えやマリッジ・エンカウンター精神などを知るチャンスがありませんでした。私の母親は父親に「ハイ、ハイ」と従順でした。そして子供たちもそのように育ててくれました。今考えてみると、私はこのような両親を理想の両親と思っておりました。

＊ このような環境で育った私は無意識のうちに家族に対して父親君主となっておりました。このために夫婦・家族との対話・通じ合い・和解・一致などマリッジ・エンカウンター精神にはほど遠い生活でした。もしマリッジ・エンカウンターとの出会いがなかったなら私達家族は崩壊していたかもしれず、今は反省しております。マリッジ・エンカウンター参加を機会に、このような家族の状態が誤りである事に気付きました。そして家族の対話・通じ合いを大切にして価値親を共有しております。

＊ ある時、子供たちから、お父さんからプレゼントをもらった記憶は多いが、対話の思い出がないと言われショックでした。日本の貧しい時代に育った私は物質至上主義なところがあり、子供達との関係でも、欲しい物を与えておけば満足している筈との考えが強かった時期があります。このために私は子供との距離感があり寂しい思いがありました。しかし、マリッジ・エンカウンター参加で子供達との対話・通じ合い・一致が大切なことに気付き、家族でのお祈りの時間を大切にしております。今は子供達も

成長し、それぞれの道に進み充実した生活を送っており、神様に感射しております

私達家族はマリッジ・エンカウンター、FIRES のプログラムとの出会いに支えられて家族の一致に向けて歩み、岩の上にそれぞれ家族の土台を築くべく努力中です。
―― シャローム！！

【その2】妻として
私達夫婦が始めてマリッジ・エンカウンターに参加させて頂いてから 30 年が過ぎました。その間に 3 人の子供達もそれぞれに SADE のチームなど FIRES にかかわりながら成長し、それぞれに自分の生活を精一杯生きております。

長女は SADE に参加させていただき、今は観想修道会である聖クララ会修道院でシスターとして、清貧・貞潔・従順・聖域を守り祈り・犠牲・労働の生活をしております。長男はSADE、その後、婚約者のためのプログラム婚約者のエンカウンターに参加し、ダナン神父様の司式によりフランシスカン・チャペルセンターにおいて結婚式を行ない、今は二人の子供を授かり、マリッジ・エンカウンター参加の機会を楽しみにしているようです。

次女は卒業した大学の付属病院で看護師として働いておりますが、最近婚約者のエンカウンターに参加させていただき、フランシスカン・チャペルセンターでの結婚式を予定しております。

私達夫婦は、今 2 人だけの生活ですが、初めてマリッジ・エンカウンターに参加した頃から見れば、成長し、より一致した夫婦になっているでしょうか？

みことばに「神様はくずをつくらない」とありますが、自分自身を見つめた時に相変わらず、どうしようもない自分・愛することができない自分に出会うことがあります。また一方では、自分の長所に気付いて新たな発見と自分との出会いをしております。そしてそのことは、自分に対してだけでなく夫に対しても同じです。

今私達夫婦は 1 年に 1 度程度ですがチームとしてマリッジ・エンカウンターに参加させていただき、お互いにより親密に分かち合い一致できるように努力しております。また若い方々に SADE への参加を勧めたり、参加者のための食事の準備やお祈りの奉仕をしたりしております。そして、教会においてもそれぞれの立場で奉仕活動を積極的に行うようにしております。

聖書は、毎日の何気ない生活の中にあって、一つ一つの出来事に私達一人一人に語りかけてくださっていることを実感しております。難しい人を受け入れる、人から批判されたり、悪口を言われたりする自分であっても、「聖書のみことば」は「いつも喜んでいなさい、たえず祈りなさい、全てのことについて感謝しなさい」と語りかけてくださっています。

良い時や良い事だけではなく、自分達の中に起こる全ての事について、この「みことば」によってどれほど自分が生き生きと生きていけるかを実感しています。マリッジ・エンカウンターに参加して、たしかに私達の中にある神様の愛のエネルギーは、神秘の力となって、豊かに現れて生きつづけています。これからもずっと―――神様に感謝！！

＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊

三木明子

私の両親は、私が生まれる前からエンカウンターを経験し、私の姉と兄は、私が幼いころから SADE に参加していました。12 才（小学校 6 年生）の時に、私自身も初めて Family

エンカウンターに参加させていただき、中学、高校に入ってからは SADE のチームを経験しました。エンカウンターに参加することは、私にとって当たり前のことで、とても自然なことでしたし、そのお恵みは、毎回大きなものでした。

しかし、大学に進学し、看護士として働くようになった私は、いつの間にか教会やエンカウンター、FIRES と距離を置くようになっていました。神様の存在を意識せず、毎日を忙しく、ただただこなしている･･･　そんな日々に慣れてしまっていた私でしたが、そんな日々に何か物足りなさを感じていたことも事実でした。看護士としての仕事を通して、多くの人々と出会い、「生」と「死」を目の当たりにする中で、やはり私が求めたのは神様でした。頭だけでは理解しきれないこと、整理しきれないことを聖書の「みことば」は、私の心に語りかけてくださり、私の心は開放されました。苦しみや、死への恐怖と闘う患者様やご家族に寄り添う時、私を通してイエズス様が彼らを癒してくださると信じ、マリア様に祈ります。

私は一人ぼっちではなく、神様に支えられて、この仕事をしているのだと思うと、私の中にある「看護士として、こうあらねばならない!」という重荷は軽くなり、私らしさを発揮した看護が出来るようになりました。これは、エンカウンターの中で、私がいただいたお恵みだと思っています。幼い頃から家族を通して FIRES の仲間と、ダナン神父様を通して神様の存在を実感してきたことは、今、看護士として働く私にこのような形で影響を及ぼしているのでしょう。

そして私は、この春、結婚し、新しい家族と新たな生活をスタートさせることになりました。2 月、婚約者のエンカウンターに参加させていただき、改めて神様によって一致した夫婦、家族になれるよう努力して行きたいと強く思っています。きっと、エンカウンターを通して、これからも私と私の家族に（もちろん、まだ見ぬ未来の家族にも!?）たくさんのお恵みがあると信じています。神に感謝！！！　SHALOM!!!

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

『エンカウンターの恵み』

山野井

私達夫婦がエンカウンターに参加したのは、今から約 30 年前、二人目の子供(長女)が生まれて 3 ヶ月位のときに､4 歳になった長男が通っていたカトリック幼稚園のメキシコ人のシスターの Sr. ガダルッペから奨められたのがきっかけとなりました。その当時、生まれたばかりの娘は体調が悪く、他人に預けて 2 泊 3 日のエンカウンターに参加するなんてことは世間的な常識では考えられないことでしたが、Sr.ガダルッペの『もし、神父様の癒しの祈りによって、赤ちゃんの熱が下がって体調が良くなったら行きますか？』という熱心な説得に負け、ダナン神父様の訪問を受けることになりました。当時、未信者だった私は、祈りで病気が治るなんてことは思ってもいませんでしたので、これで断る理由ができたと思い、『治ったら行きますよ』と、軽く返事をしてしまいました。

そして、エンカウンターの前日にダナン神父様が来られ、娘に油を塗って祈って下さったところ、それまで下がらなかった熱も翌日には下がり、良くなってしまったので、断わる理由がなくなり、娘のことが心配で後ろ髪を引かれる思いも在りましたが、妻の姉夫婦(二人ともクリスチャンの)に二人の子供のことを頼んだところ、私達夫婦の非常識な行動に批判もせず、快く受け入れてくれましたので、マリッジ・エンカウンターに参加することになりました。

マリッジ・エンカウンターに参加して、それまで私達夫婦は何でも話し合っていて、今更

夫婦で分かち合うことなんて何もない筈だと思っていたことが、大きな間違いだったことに気づかされ、それまで無神論を信じていた私は、『神は愛である』というみ言葉に心が動き、一致した家族を造るためには、家庭の中でお互いが信頼しあって何でも分かち合えるように、そして、その炎を子供達にも伝え、家族の一人ひとりがエンカウンターの精神を生かしていけるようにしなければと思い、洗礼を受けることを決心しました。

そして、マリッジ・エンカウンターの炎を消さないようにと、私達はマリッジ・エンカウンター、マリッジ・リ・エンカウンター、レトルノに、また子供達もSADEに参加してくれ、最終的には家族のエンカウンターにも参加することができ、沢山の恵みを戴くことができました。

それぞれのエンカウンターによっていただいた恵みは数え切れないほどありますが、その中でまず最初に上げられる恵みは、家庭の中でお互いを信頼し、何でも話し合えるようになったことです。例えば嫁姑の問題では、夫の立場では気にならないことでも妻の立場で見れば姑の心配りのない一言に傷つき、ストレスになることがありますが、それが溜まっていくと精神的に大きな負担になってしまいますが、どんな些細なことでも、その時の感情を分かち合うように心がけることによって、お互いの立場や弱さまでもが理解しあえるようになったことです。

お互いが今何を思い、どのように感じているのかを知ることによって、より親密になれますし、また、そんな私達を見ている子供達にもその流れは自然と伝わって行くようです。今、子供達は二人とも結婚し、息子夫婦には3人、娘夫婦にも2人の子供に恵まれ、それぞれが順風満帆とまでは行かないまでも、父親は家族のために外で働き、母親は家庭を守りと、当たり前のことですが、子供達を愛し、親としての責務を果し、親の優しさや家庭の暖かさを子供達に伝えようと頑張っておりますが、そんな彼らにとっても、私達夫婦が手本になっているようで、これもエンカウンターの恵みの現われとなっていると思います。

息子と娘はカトリック信者ですが、それぞれの連れ合いはまだ信者ではないので、年に数回しか教会には行けませんが、それでも孫達の洗礼は快く受け入れてくれ、カトリックの幼稚園にも通うようになり、たまにですが食事のときに家庭の中で祈る姿を見せるようになって来ました。これらの小さなことも神様が私達家族に与えて下さった一つの恵みですし、未信者であるそれぞれの連れ合いにとっても影響を与えていると思います。

最近、娘が私達に分かち合ってくれたことですが、兄妹で話し合ったときに、「自分の理想は、自分達が育ってきような家族になることだ」と息子が話していたそうで、エンカウンターの精神が自然と子供達にも伝わっていることを実感することができました。これは私達にとって大きな恵みですし、子供達がそういう意識を持ったように、少しずつですが、スパイラルの輪が夫婦から子供達⇒家族⇒親戚⇒知人⇒友人⇒社会、というように広がっていくと思います。

結婚して35年、私達夫婦のスパイラルは、やっと基礎ができたばかりでまだ小さいですが、少しずつ大きくできるように、これからも頑張って行きたいと思っております。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

(匿名)

私たち夫婦がマリッジ・エンカウンターに参加させていただき、そのお恵みとして主人が洗礼の恵みをいただいたのは20年前のことです。私たちは二人で同じ信仰の道を歩むことのできる喜びに包まれ、幸せいっぱいの月日を過ごしておりました。でも、神様は、ご自身の愛と、もっともっと私たちが深く体験できるように大きな試練を与えられました。二

人の娘も一緒に、家族そろってゴミサに与っていた平穏(へいおん)の日々に突然、大きな苦しみが訪れたのです。

中学生になった次女の私たち両親には理解できない変化を直面させられ、戸惑うばかりでした。長女と同じように育てた次女が、髪を染め、勉強を放棄して進学しないなど、世間的な価値観で見るなら落ちこぼれ、という道を歩みだしたのです。お互いに優等生として生きてきた私たちにとって子供たちは、まじめで成績がよく、当然進学校に進むものと決めていた親にとって、それはとても受け入れることの出来ない事実でした。私たちは毎晩、次女に正当論として人間のあり方、なぜ勉強しなければならないか、とお説教をしていました。自分たちが何の非の打ち所もない立派な人間であるかのように振舞っていた姿に、当時、私たちは気づきませんでした。

次女との溝がどんどん深くなり、家庭での会話が全くなくなっていた日々は本当に辛く、苦しい毎日でした。そんな暗闇を彷徨(さまよ)っていたとき、私たちはマリッジ・エンカウンターのチームの奉仕をさせていただきました。それは私たち夫婦、親子のかかわりをもう一度見つめ直すために神様が下さった恵みの時でした。ありのままの自分自身と出会い、子供との関係を見つめることは、とても苦しいことでしたが、そのことを通して、イエズス様が私たち家族をどれほど深く愛してくださっているか、そして家族が崩壊しそうになっている私たちに注いでくださっているイエズス様の慈しみに満ちた眼差しを深く感じることが出来たのです。

イエズス様からの愛を、私たち夫婦は子供たちにそのまま分かち合っていなかったことに気づかされました。親の自己満足、世間的な価値観を優先する身勝手な親。ただ子供への愛情だけは持った弱い私たちを、いつも優しさと慈しみをもって導いてくださっていることへの感謝を持つことが出来た時、私たちは子供をありのまま受け入れることが出来ました。

種々な葛藤があり、次女とは傷付け合ったこともたくさんありましたが、進学のため、東京に住むようになったとき、「お父さん、お母さん、今までいろいろありがとう」と素直に言ってくれた次女の言葉に、私たちは涙して喜びました。過ぎ去った暗く苦しい日々は忘れ去られ、神様の愛の暖かさだけが心に深く残っていました。

現在、東京で働いている次女は、私たちにお誕生日や父の日、母の日にやさしい心遣いをしてくれます。私たちが、自我を捨て、神様からいただいた愛を子供たちに分かち合った時、初めて、子供との通じ合いが出来たことに感謝しています。今は子供たちが、神様の愛に包まれて元気でがんばっていることに感謝しつつ、幸せな日々を過ごしております。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

斉藤力也・愛美

知久様、早苗様
今回、マリッジ・エンカウンターという、すばらしい会に行かせてもらいありがとうございました。とても感謝しています。マリッジ・エンカウンターという会に今回愛美の方から「一緒に行かないか」といわれた時は正直、戸惑いもあり、不安もありました。しかし、夫婦が仲良く、楽しく、そして幸せになるための会と聞いてからは、自分がマリッジ・エンカウンターというものに興味を持ち、マリッジ・エンカウンターという会に出てみたいという気持ちになりました。

今まで22年間、カトリックというものに縁がなく、それに、神という存在を信じていなか

った自分が、カトリックの信者の方々がたくさん集まる場に行き、いろいろな問題について話し合うというのが不思議に思えました。

いざマリッジ・エンカウンターが始まり、いくつものテーマに分けられた段階に沿ってダナン神父様を筆頭に話をたくさん聞きました。マリッジ・エンカウンターのチームの方々の話も自分たちの夫婦に関わる問題も出て、とても親近感が沸きました。テーマに沿って夫婦二人でじっくりと話し合いが出来て、愛美が自分に求めているものだとか、逆に自分が愛美に求めるものなど、普段話せていないことがじっくり話せてとても夫婦二人のためになり、普段の生活の中で気づいてあげられなかったことにも気づけましたし、愛美にも気づいてもらうことが出来て、何かすがすがしく、すっきりした気分になりました。

和解するということがどんなに大切なことなのか、和解する（和解しあう）ためにはどうすればいいのかという点では、話し合いをもっと細かく、深くするべきという答えも二人で出しました。そうすることによって夫婦が一致できるようになれると思ったからです。

マリッジ・エンカウンターという会に出て変わったかどうかは、これから生活をともにしていく中で答えが出ると思いますが、周りの第三者から自分たち夫婦を見られたときに「一致している夫婦」とみられるような夫婦になりたいと思います。時間はかかると思うけれど、一歩一歩二人で足並みを合わせ、呼吸を合わせて前に進んでいきます。次回マリッジ・エンカウンターがまた開かれる時には行きたいと思っていますし、その時には今よりもよい夫婦で参加できたらいいと思います。今回は本当にすばらしいマリッジ・エンカウンターという会に出席させていただき本当にありがとうございました。心から感謝しています。

p.s.将来的な二人の目標する夫婦はお母さん、お父さんのようなすばらしい夫婦になれたらいいと思っています。そしてこれから先もずっと仲良しな夫婦でいてください。

＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊

幸せはすぐそばに

朝岡知久・早苗

『山の彼方の空遠く、幸住むと人の言う』
詩人は幸せを遠くまで探しにいったけれど、見つからなかったそうです。この世に幸せはないんですか。いいえ、あります。私たち夫婦は見つけました。それもごく近くに、です。

初めてマリッジ・エンカウンターに参加したのはもう20数年前です。そのときのことをはっきりと覚えています。たくさんのバンナがありましたが、2本のろうそくの炎が合わさって一つになるというのが、印象的でした。ダナン神父様の、温かでユーモアいっぱいの語り口。引き込まれるように聞き入ってしまいました。遠路わざわざ来られたチーム・カップル、感謝しています。お話くださった日常生活の一こま一こまに「そうだ、そうだ」と納得したり、励まされたり、新しい目を開かれたりしました。

夫婦で結婚以来初めて、心をさらけ出して話し合いました。周りからは私たち夫婦は仲がいいと言われていましたし、完全無欠とはいいませんが、かなりいい線をいっている、と思っていました。うぬぼれってこわいですね。自分を深く見つめる、そうしたらいろいろな発見がありました。相手から見られて「どうしようもない」と思われることにも気付きましたが、お互いのよい所を見つけ、それを尊敬し、理解することが、すなわち、相手を真に愛することだと悟りました。プログラムが進むにしたがってぐらぐらと心が揺さぶられて、なぜか涙が出て仕方がありませんでした。神父様のお話も、チームの講話も、びん

びんと心に響きました。もうどうしょうもない位に。

参加するまでは、「3 日間は長いなあ」と苦にやんでいたのに、あっという間に過ぎました。ほのぼのとした幸せな気持ちに包まれて帰宅したら、留守番していた娘は、「笑顔がすてき！」と迎えてくれました。

小学生のころ、公教要理の勉強でシスターから聞いた創世記の、アダムとエワの物語。あのころは、「神様が人間を造った」としか理解しませんでした。「二人は一体になるべきなり」二人が一人になる、ということは、身も心も夫は妻の分身、妻は夫の半身になるということです。夫は妻なくして充実した生き方はできず、妻は夫なくしておのが命をまっとうできない・・・。そこに結婚生活の聖さがあると、創世記は言っているのですね。

そうです。まさにあのバンナです！二本のろうそくが、いつかは一本になって炎を交える、あれです。その後、何回かマリッジ・エンカウンターに、RE にファミリー・エンカウンターに参加させていただきました。その度に感じる満ち足りた生命の営み、家庭を祝福するかのような幸福感！そして今は、主のみ旨に従って、相手の真実の声に耳を傾け、自分の間違いを謙虚に認める心の広さと素直さをもっていきたいと、ささやかな努力をしています。いただいた幸せの種を周りにどんどん蒔いて、幸せの輪を広げようと願っています。

＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊

桐生聖クララ会修道院 Sr. 三木直子

FIRE S と私の家族

私は苦悶のうちに主に願い、
神に叫びをあげた。
主は神殿にあって私の声を聴き、
御耳に私の叫びはとどいた。　　詩編 18:7

私の家族は、同じ屋根の下に住んでいながら、通じ合うために分かち合いをすることを知らずに生活していましたので、個人として、あるいは家族として何らかの問題に直面すると、感情をぶつけ合うことしかできませんでした。両親はたびたび大声で言い争いをしていました。ある日、私が学校から帰ると、母は泣きながら私に向かって生活の苦労について訴え、結婚したことを後悔していると打ち明けました。私は、両親が離婚するのではないかと心配になり、「お父さん、お母さん、どうか離婚しないでください」と手紙を書きました。何週間もの間、私はこの手紙をポケットに入れて持っていたのですが、手渡す勇気はありませんでした。家族皆がたいへん苦しんでいましたし、解決の道を捜していました。

そのような私たち家族皆の心の中の叫びは、確かに神様のもとに届いたのです。エンカウンターに参加した御夫婦の方たちが何組もかわるがわる訪問してくださるようになり、エンカウンターに参加するようにとすすめてくださったのです。そのおかげで、両親はマリッジ・エンカウンターに参加させていただきました。知り合いの方が私を最後のミサに連れていってくださいました。そのミサの終わりに、参加した御夫婦は祭壇の前まで進み出て、指導なさった神父様からバンナを受け取っていました。私の父と母も祭壇まで歩いて出ていきましたが、父と母は手をつないでいました。父と母が手をつないで仲良く歩いている姿を見たのは初めてでした。

天の国は人が畑に蒔いた一粒のからし種のようである。
それはどの種よりも小さいが、
成長するとどの野菜よりも大きくなり、

空の鳥が来てその枝に宿るほどの木にさえもなる。

マタイ 13:31-32

神様は、FIRES のプログラムを通して、私たち家族の中に種を蒔いてくださったのです。それはとても小さなものでした。朝起きて家族が顔を合わせると、「おはよう」と挨拶を交わすとか、食事の時間には皆が一緒にそろうようにするとか、そんな日常生活の当り前のことから始まりました。何年もかかって、家族皆の間に親しい交わりがはぐくまれ、心を開いて自分の体験や直面している問題、喜びやがっかりしたことなどを分かち合い、さらに、家族皆がそろって神様の前に自分たちのことを分かち合う「祈り」ができるようになりました。私の家族にとっての祈りの時間は何にもまして優先されました。

ある時、私は交通事故を起こしてしまい、相手の方から脅迫めいた電話が毎日かかってくるようになりました。家族皆が自分のことのように心配し、家族皆が私のために熱心に祈り、父は保険の手続きにあたり、母は電話の対応を引き受け、弟妹はいろいろな方法で心を配って励ましてくれました。家族の祈りに力づけられて、私は勇気をもって相手の方と交渉し、無事にこの問題を解決することができました。家族の祈りの時に、自分たちのことだけでなく、私たち一人一人の出合う人々、特に困難に直面している人々のことにも心を配るようになりました。そして、祈りの中から、これらの人々のためにできること、具体的な行動も自然に生まれてくるようになりました。隣の若い御夫婦は子育てに一生懸命励んでいましたが、貧しくて、時々、母のところに相談に来ていました。私たちは、この家族のためにも祈り、いつも自分たちのことのようにこの御夫婦の問題を心にとめるようになりました。ある時、末の娘さんがピアノを習いたいと言いましたが、家で練習するためのピアノを買うことができなくて悩んでいるとのことでした。母からこの話を聞くと、弟が古い電子オルガンのことを思い出し、役に立つのではないかと提案しました。さっそくお隣にお知らせすると、とても助かるということでしたので、家族皆でオルガンをぴかぴかにお掃除し、お隣の家まで運びました。とても喜んで受け取ってくださいました。

あなたも行って、同じようにしなさい。

このような形で、エンカウンターの体験の小さな種は、私たちの家族の中で大きく成長していきました。現在、弟は結婚し、二人の子供のお父さんです。奥さんは信者ではありませんが、弟の家の玄関には十字架がかけられており、部屋には開かれた聖書が置かれています。妹は婚約していますが、相手の方が大きな困難に直面していた時、たくさんの涙をもって主に祈り、たびたび進むべき道を聖書のみ言葉の中に見いだしてきました。弟も妹も人生の伴侶となるべき方とともに FIRES のプログラムに参加して、自分たちの体験してきたことを分かち合っています。また家族の中で培ってきたことを、それぞれに自分たちの生活の中で生きているのです。

私は修道者として歩んでいます。私もまた、FIRES のプログラムで体験し、家族の中で培ってきた2つのとても大切なことを、現在の自分の生活の中で生きるように努めています。それは自分の生活の中に神様が入って来てくださるように心を開いて祈ることと、神様のお望みになる道を知り、その道を歩むために聖書のみ言葉を読むことです。

ある時、共同体の中のある姉妹との関係が何ヶ月もの間、とても難しくなったことがありました。院長様とも相談し、時にはこの姉妹と直接話し合ったりしてお互いに努力したのですが、なかなか解決できませんでした。ついにこの姉妹に対して微笑んだり親切にしたりすることにさえ疲れてしまったほどでした。けれども、この姉妹と私の間に神様が入ってきてくださるようにと祈ることは一日たりとも止めませんでした。たびたび聖書を開き、「私が愛したように、あなたたちも愛し合うこと、これが私の掟である」というみ言葉を読

み、主のご命令にしがみつくような思いで一日一日を過ごしました。そして、愛が勝利をおさめたのです。この姉妹と私は和解し合い、私たちの共同生活は再び喜びと感謝にあふるようになったのです。

私は今 FIRES のプログラムに直接かかわることはありませんが（もちろんお祈りで応援しています！）、毎年様々なところで開かれている FIRES のプログラムに携わっている皆様に心から感謝するとともに、このすばらしい体験を一人でも多くの人、一組でも多くの御夫婦に体験していただけるよう、ますますがんばってくださるよう、熱いエールを送ります。

＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊

FIRES で頂いた私の召命

桐生聖クララ会修道院 Sr.マリア・ルチア

「神様、炎を消さないで」 ― 初めて参加した SADE で、円陣をつくって祈った時、私のろうそくはくすぶっていて、今にも消えそうでした。「神様、私の炎を消さないで」 ―けれども実はこの炎こそ、その時の私自身の象徴だったのです。SADE の中で体験した自己内省 ― 分かち合い ― 癒しのプロセスによって炎はやがて勢いを取り戻しました。更に各地に SADE を紹介する役目を頂いた事により、「祈る」事を覚え、それは私の人格の中に大きな部分を占めるようになりました。自己の全てを分かち合っていく為には、先ずプライドを捨てなければなりません。その為に私はどれ程祈った事でしょう。そのお陰で長崎での SADE が終わった日の夜遅く、誰も居なくなった聖堂で祈っていた時、私は心が破けるかと思うほど主の光に満たされ、召命を頂いたのです。

実は長崎に旅立つ前に、具体的に結婚を考えていたのですが、主ご自身が全てをくつがえされて、私の人生の主導権を握られました。では、どこに入会したらよいのでしょうか？私は宣教師になりたかったのです。

その頃、桐生のフランシスコ修道院でカルボ神父様とダナン神父様のご指導の下、全国から司祭が集り、当時の浦和教区長・島本大司教様も参加されて、司祭のエンカウンターが行われました。私も参加した最後のミサは、とても印象深く、私はまるで 2000 年前のイエズス様の山上の垂訓の瞬間にタイム・スリップしたかのような錯覚を覚え、「ああ、私の全生涯がこのごミサのようだったらいいのに・・・」と思ったほどでした。ミサも終わり、人々も散り、夕方帰る為に 2 階から降りて来ると、そこでバッタリお帰りになる為に玄関に向かうカルボ神父様にお会いしました。神父様は、私の顔を見るなり開口一番「あなたはクララ会に行きなさい」と仰いました。びっくりしている私を安心させるように「あの会は祈りのパワーのある会ですから、とにかく祈ってもらいなさい」と仰って車に乗って行ってしまわれました。

やっとの思いで炎を取り戻したような私に観想会など務まるはずがないと内心思いましたが、お言葉ですから従順の下に訪問してみましょう、と訪問してみましたら、ここが神様が望まれている私の場所だと確信することができました。ここは、世界で初めてのシスターのエンカウンターが行われたところで、シスター達の心がとても開かれていたのです。ヨハネ・パウロ 2 世は、「聖クララの生涯はユーカリスチア - 感謝の祭儀そのものだ」と仰いました。司祭のエンカウンターで私が願った事はこのように実現したのです。23 年目の修道生活を送っている現在、パパ様のこの言葉をしみじみ実感する毎日です。

桐生聖クララ会修道院は現在 16 人、そのうち 5 人が SADE 参加者、うち 3 人はチームリーダー出身です。2 回のシスターのエンカウンターが行われ、共同体としてまた個人として

FIRES のプログラムの為に毎日特別な祈りが捧げられています。

傷ついた葦を折らず、くすぶった灯心を消さないで下さった主よ、あなたに心からの感謝と賛美をお捧げします。そして、ダナン神父様とカルボ神父様に心から感謝申し上げます。

SHALOM！！！

＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊

ある週末（マリッジ・エンカウンター）で何が起きたか

（匿名）

Ⅰ．誘われた時点で

Q: つまりその、夫婦という単位で寄り合って、ですね。黙想したり相互に研修しあったり･･･そういうこと？

A: 違いますね。参加されたらわかります。

Q: ･･･　じゃあ、あれですか。どなたか識見の高い方が講師として招かれていて･･･

A: 違いますね。参加されたらわかります。

Q: あなたね、さっきから「参加されたらわかります」の一点張りだけど、そりゃ参加すれば分かるに決まっているじゃないですか。私が尋ねたいのはですね。週末の3日間をどういう内容で暮らすことになるのか･･･

A: ちょ、ちょっと待ってください。あなた今、参加すれば分かるに決まっている、といわれましたね。ほんとですか？決まっているんですか？

Q: あんた、気は確かですか。参加すればわかると繰り返していたのは貴方じゃないんですか。

A: そうでしたね、確かに。アハハ･･･、ごめんなさい。

Q: あなたが謝ってどうすんです。･･･どうも変だな、この人は矛盾している。何かを私に伝えたいんだ･･･。

A: 伊沢さん、さっき「分かるに決まってる」といわれたもんで少しあせっちゃったんです。参加カップルが戴く恵みは、カップルごとに違うんです。決まってなんかいません。

Q: ははぁ、やっぱりそういうこと。”恵み”という言葉が始めて出てきましたね。もう合理の世界を超えているんだ。あなたの言っていることが、なぜ分からなかったかが、分かりました。しかし、いま私は、その「分からなさ」に、なぜか魅力を感じます。関心が大きく膨らんでいます。私と裕見子、参加することになるでしょう。

Ⅱ.終了した時点で

*6 組の参加カップル、3 組のチーム・カップル、指導司祭、計 19 人が楕円形に向き合っている。*伊沢貴明さんは T、奥さんの裕見子さんは Y と略す。*

Y: この 3 日間、わたしたち夫婦は摩訶不思議な体験をしました。そうですね、それは神秘的としか言いようのない体験でした。

T: 最初の晩は特に何も感じませんでしたが、2 日目から、全体集会室や個室の中を何かが漂い、何かが流れ、満たされていることを感じました。私はクリスチャンではないので自信はありませんが、･･･　たぶん、指導司祭やチーム・カップルの人たちの、わたしたちの内省のためにささげて下さる「祈り」に因るものだろうと思っています。

Y: そういう点では、貴明って敏感なんです、私と違って。今朝も講和を聴き、”結婚の霊性”というプリントを貰ってふたりは個室に入りました。するとすぐに、貴明が言いま

す。「俺たちは、かつて、アカの他人だった」って。

T: そうだ。俺たちはアカの他人だった。しかし今では、両親や親戚といった血のつながる誰とよりももっともっと狎(な)れ狎(な)れしい。

Y: あたりまえじゃん。そういう間柄だからこそ夫婦じゃないんですか。･･･それにしても最近の私たち、少し夫婦喧嘩が多すぎる。この点では、今日の内省で私は、貴明のことば「結婚したてのころの俺たちは、今と同じに楽しかったが、まだ、礼儀があった」に涙を誘われました。

T: 私たちには現在 2 人の女の子がいましてね。先だって私は高校 1 年の妹と同 3 年の姉に名刺大くらいの白紙のカードを渡したんです。偶発的な、出来心です。そして「お父さんやお母さんに何か言いたいことがあったら書いてごらん」と。裕見子、これ読んでいいかい？

Y: 恥ずかしいけど･･･しょうがないでしょうね。内省の中心になってしまったんですもの。

T: はじめに妹「お父さんは黙って家出をして 3 日も帰ってこない。お母さんの心は喧嘩の当事者だから読めないけれど･･･私たち二人の悲しい悲しい長い無言の時間、お父さんにわかるの！！バカ！」

Y: 次に姉、「父も母も真実は愛し合っていることをお互いに知っているみたい。しかし二人は気質が違う。どんな小さな出来事でも大きくアピールして父に迫る母。一種の甘えかな。うんざりして冷戦に持ち込む父のだんまりもわかるけど･･･　わたしたちの居場所がない。罪深いぞ」。

Y: お互いが愛し合っていることを知っていて喧嘩をする、と見破ったお姉ちゃんの言葉が青天の霹靂でした。

T: この時間の内省はすべてこの長女の言葉に基づいて展開し、集約されたのでした。

Y: 私は貴明に愛されていることを知っていてもなお、愛されることの証をもっとほしがる、なんと言う浅ましい欲望でしょう。

T: 私は今、二人をエンカウンターに導いた、目には見えない大きな力、愛を感じています。これからは、信仰に入るための学習の道を進むことになるでしょう。

（了）

この夫婦は現在 80 代ですが、ずっとマリッジ・エンカウンターに奉仕しており、夫婦の強い絆と揺るぎない信仰によって、マリッジ・エンカウンターが自分たちの生活の中心であることを証ししてきています。二人には証しすべきすばらしい体験が山のようにありますが、今回、一つの分かち合いを私に送ってくれました。この証しは、これほどの確信を持った一組の夫婦が他の人びとを助けて自己の再発見ができるようにできることを見事に言い表していると思います。先ほど私が述べたように、この夫婦はマリッジ・エンカウンターと FIRES を日本の全く新たな地域にもたらした役割を果たしました。彼らの分かち合いをここでかいつまんで紹介すると、あるとき二人はマリッジ・エンカウンターについてクリスチャンではない夫婦と会話を交わしました。二人は質問攻めに遭いましたが、二人の答は、「一度体験すれば必ず分かる」でした。相手の夫婦は、「その体験から生じる結果は前もって決定済みなのか」と尋ねました。それに対する答は、「どの夫婦も違うので、夫婦ごとに受ける恵みは違う」でした。質問していた夫婦はこれで関心を抱き、マリッジ・エンカウンターに参加する決心をしました。

そして、いつものように、結果は彼らが聞いていたとおりでした。この夫婦は互いの愛を新たにする恵みを受け（この恵みがなんとしても必要でした）、子供たちとの関係は深まり、一番大事なことですが、マリッジ・エンカウンターの体験を通して自分たちを導いてくれた力がどなたであるのかを知りたいと望むようになりました。それで、彼らはキリスト教の信仰について学ぶことにしました。この恵みの特別な分かち合いは、誰かに手を差し伸べると、手を差し伸べられた夫婦は主から予期せぬ恵みを受ける、という一例ですが、そ

れはまた、手を差し伸べた夫婦にとっても恵みです。主は証を通して驚くべきみ業を行われます。

＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊

小田島輝夫・佳子

FIRES に招かれてからもう 30 年になろうとしています。その中で一番変わったのは、何をやるにしても家族で動くようになった、ということです。それが当たり前のことになったと思います。例えば、教会のバザーでは教会学校、婦人部、壮年会といった縦割りのグループの一員として動くのではなく、小田島一家として店を出させてもらいました。クリスマスの時期になると、知り合いの家を回ってキャロリングをしてきました。また、我が家の一番大切な行事は「焚き火」です。以前、福島に住んでいた時始めたデーキャンプから、次第に本格的なキャンプになっていき、家族でわいわい言いながら焚き火を楽しむことは、今家族にとって欠くことのできない行事になっています。

恒例の行事になっているものは、まだあります。それは毎年 8 月から 1 月まで続く誕生日です。当日のケーキを前にしてのハッピーバースデーが大変なのです。今家を離れている子供たちは PHS で呼び出され、どこにいても、その場でハッピーバースデーをスローテンポから超アップテンポまで 3 コーラス歌わされるのです。この「待ったなしのハッピーバースデー」が、我が家らしいスタイルになっています。

マリッジ・エンカウンターに最初に参加したときは、なるほどこれはいいものだとは思いましたが、なかなかしんどくて、そのあともう一度、盛岡に転勤になってマリッジ・エンカウンターへのお誘いを受けた時は、正直言って「もういいです」というのが本音でした。ところが気乗りしないまま、チームを引き受けて参加したそのマリッジ・エンカウンターの中で、聖霊に満たされたと感じたのです。その時、聖霊に満たされたという思いは、そのエンカウンターが終わった時、別の方向に動き始めました。それは FIRES のプログラムを、何としても全部体験したい、という思いでした。私たちはその年の内にマリッジ・リ・エンカウンター、レトルノ（これを当時は「3 点セット」と呼んでいましたが）と立て続けに参加し、その都度、新たに、そしてより深く喜びに満たされた体験をしてきました。

でも次第に、これでいいのか、と感じるようになりました。聖霊に満たされたことに満足しているだけでなく、誰かに手渡すために、私たちはこの熱さを手渡されたのではなかったか、と感じたのです。

では私たちは何をすればいいのか、その時示されたのが、エンカウンターのチームとして自分たちの Vivencia を分かち合い続けるということでした。それからマリッジ・エンカウンターに参加することに抵抗はなくなり、むしろ自分たちにとってなくてはならぬものと感じ、心待ちにするようになりました。それはエンカウンターの都度、新たな熱を持った聖霊が注がれ、さらにそれ以上の聖霊が、私たちを通じて参加しているそれぞれのカップルにも注がれていくのを感じることができるようになったからです。

もし私が FIRES に関わってこなかったとしたら、多分とうの昔に私たちは離婚していたでしょう。FIRES に関わり続けてきたことで、私は一番必要な時に自分の内面を掘り下げ、その度に佳子と新しい出会い方をすることが出来てきたと思います。これがあったから私たちは夫婦を、親子を、家族を続けてこられたのだと思っています。

マリッジ・エンカウンターは自分という地面を掘り返していくような作業ではないかと思うのです。それは同じことの繰り返しではなく鍬（くわ）は、だんだん深いころまで届くようにな

り、いままで気付かなかった石ころや、雑草の根っこに触れるようになります。それを取り除いて固い土を砕いていくと、土は新しい風に触れ、新しい光に触れ、新しい水脈に触れていきます。蒔いた種はより深く根を下ろすようになり、より大きく葉を広げ茎を伸ばしていけるようになるのです。そうやって私はFIRESに育てられてきたのだと思います。

私は「囚われ人」を解き放つ仕事をしています。つまり刑務所の職員として勤めているのです。「囚われ人」を解き放つということは勿論、彼らを脱獄させるということではありません。彼らがどんな生き方に囚われているのか、そこから自分を解き放っていくためにはどうしたらいいのかを一緒に考えていけたら、と思っているのです。

定年が近づいてきた今、定年後の仕事として教誨師(きょうかいし)になれないか、と考えています。教誨師というのは刑務所や少年院で、宗教を通じて被収容者の更生を助けるという仕事で、各宗教、宗派の宗教家が関わっています。実は、もし自分が教誨師の仕事をやれるようになれば、日本ではまだ実現していないエンカウンター・イン・プリズン、つまり刑務所の中のエンカウンターができるかもしれない、などという大それた夢を見るようになったのです。もちろんそう簡単に実現する夢ではないとは思います。でも神様にできないことはありません。もしそれが御旨であれば実現する筈だと最近は思うようになってきています。実は、これは夢のままでもちっとも構わないのです。こんな夢を見ることができるようになったことも FIRES が私に与えてくれた豊かな実りの一つではないか、と今感じているからです。

(輝夫)

神父様が「チームをやってみないか」といわれたとき私は「とんでもない。まだ子供たちが小さいのに、赤ん坊を抱えているのですよ。その内、子供が大きくなって、時間ができたら、いくらでも奉仕させていただきます」と言いました。そのとき神父様は私に「そんな人生完成した人の話を誰が聞くの。必要ないね」と笑っておっしゃいました。今、この一番大変なときだからこそ、私たちは人に分かち合うことができるのだと気付きました。それからもう何回チームをやらせていただいたのかわかりませんが、私たちは苦しいときも、悲しいときも、惨めなときも隠さずありのままの自分たちの生活を分かち合ってきました。そしているうちにエンカウンターが 44 時間の特別な体験ではなく私たちの日常になり、考え方・生活のあり方そのものになっていきました。私はいつも大きなおなかをしているか、乳飲み子を抱えてチームをやらせていただきました。こうして 7 人の子供を育ててきました。

成長するにつれて子供たちも SADE のチームをさせていただき、その中で大人になってゆきました。もうすぐ三年になりますが大切な息子を 16 歳で亡くしました。私たちにとって彼の PC に残されていた SADE の講話は家族へのラブレターです。この子がおなかにいるとき、ダナン神父様が私に「大きな家族には、大きな家族としての使命がある」とおっしゃいました。息子の講話の中には、家族として生きることの喜びと誇りがいっぱいに詰まっています。「こんなにも愛し合って私たちが生きてきたこと」を分かち合う精一杯の言葉があります。「家族っていいものだよ」と彼は繰り返し分かち合っています。何があっても私たちは互いに支えあってきたし、たとえ死が彼の命を奪っていっても、私たちの中に彼は今も生きていると感じる。こんなにも深い悲しみの中にも感じ取るこの穏やかな平安。もしエンカウンターを生きてこなかったら、彼の死に打ちのめされて私は壊れてしまっただろうと思います。

私たちはこれからの人生をもっと単純に神様の道具として生きてゆくことを願っています。具体的にどうなるかは分かりませんが、ある機会に司教様に尋ねられ、「私たちは家族として、

他の家族のために奉仕する招きを感じています」とお答えしました。もし若い日にエンカウンターと出会わなかったら、私たち夫婦も子供たちも今とは異なる生き方をしていたと思います。たった一度の人生だから、「招き」に応えて生きていくのもいいなと思っています。

（佳子）

＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊

秋山　幸子

マリッジ・エンカウンター、聞き慣れない言葉でしたが、救いを求めて参加いたしました。最初は内容がよく理解出来ませんでしたが、今、崩壊しつつある我が家を救うヒントを求めて、ダナン神父様の熱心なお話を一生懸命聞いておりました。色々な小道具を用いながらの講義、そのうち、何年も使い込まれてだいぶん痛んだスヌーピーとその仲間達の小道具が出てきました。神父様はスヌーピーを示されて「あなたもOK、私もOK」と言われました。その言葉が私の心に深く染み込みました。自分のことはOK、他人を裁いてばかりだった自分を深く反省いたしました。

人と自分の違いを素直に認めること、神に信頼を置く生活を送ること、主の祈りの「私たちの罪をお許し下さい、私たちも人を許します」。この一節がとても深い意味のあることがわかりました。

また、ある本の中に「人の口から咄嗟に出た言葉はその人の人間性を如実にあらわす」というような文章がありました。思えば自分は年甲斐も無く、自分本位に傍若無人に、なんとたくさんの人の心を傷つけてきたことか、思い上がっていたことかと恥ずかしくなりました。こんな自分が一朝一夕に変われるものではありませんが、“謙虚であれ“とのイエス様の教えを胸に、人として少しでも成長できるよう心がけております。気付きの機会を与えてくださったエンカウンターに心から感謝いたします。

＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊

「家族は神からのものである」　　深澤光・修子

昨日、夫婦で祈り、開き、分かち合った聖書の箇所は、エフェソ人への手紙3章14節から19節、キリストの愛を知る:「このことのために、わたしは、おん父のみ前にひざをかがめて祈ります。天と地にあるすべての「家族」という呼び名は、この「父」に由来していますーおん父が、ご自分の栄光の豊かさに従い、「内なる人間」に働きかけるご自分の霊によって、あなたがたに力を与え、強めてくださいますように。信仰を持つことによって、あなたがたの心のうちにキリストが住まわれますように。あなたがたが愛に根ざし、愛に土台を据え、その広さ、長さ、高さ、深さがどれほどのものであるかを、聖なる人々とともに理解し、人知をはるかに超えたキリストのこの愛を悟ることができますように。あなたがたが、神に満ちているすべてによって満たされるまでになりますように」のところでした。

この聖書の箇所は、私達に全ての家族がおん父に由来するものであることを改めて意識させてくれるものですが、この20年間に20回以上与ってきたエンカウターはまた、私と妻それぞれにとっても、子供たちにとっても、まさに家族の礎としての「家族は神からのものである」ということをゆるぎないものにしてくれたこと、と確信しています。

結婚して間もなく長女に恵まれ、長女が二歳になる前に始めてマリッジ・エンカウンターに与ることが出来た幸運な私達夫婦、家族でした。もし、エンカウンターに与ることがなかったら･･･想像することができないですが、おそらく、結婚して長女の誕生後、洗礼を受けた私が、神を経験するということや、ましてや婚姻の秘蹟を体験として知ることは出来

なかっただろう、ということは相当確かです。
冒頭のエフェソ書の箇所は、父なる神に由来する家族を強調しています。どうしてもその「父」には、ダナン神父様が重なります。家族の大切さ強く意識させてくれた父、世界一の家族を紹介してくれた父、自らの体験の分かち合いを通じて「ここに生きているイエズス様」を見せてくれた父、また、あるときは、家族のために涙を見せてくれた父、放蕩息子級の私の全てを赦し抱きしめてくれた父、一緒に旅をし、また食事をしてくれた父。何度もイエズス様を見せていただきました。その「父」が居なかったら、今の私達七人の家族はありません。まだ、世界一にはほど遠いかも知れませんが、エンカウンターの恵みが、本当に芳(かんば)しい家族に私達を育ててくださったと感じています。つまり、そのエンカウンターの精神が、まだ、あふれ出るまでにはなっていませんが、少しずつこぼれる位の家族になってきました。

私達家族が、この 20 年間に生きてきた道には、エンカウンターとともに、「薪(まき)のある暮らし」があります。薪で暖房や調理をしている人達は、世界中に数十億人いるでしょう。しかし、家族を意識して、特に結婚の霊性を感じながら、薪を割り、薪を焚いている人は、何人居るのか？･･･　わかりませんが、あまり居ないようです。神様は、私達家族にそのような恵みを分かち合うチャンスをくださいました。私が、薪の本を書くという、妙な仕事を通じてです。それは、「薪割り･･･」だったり「薪のある暮らし･･･」といったタイトルの薪についての本という姿、格好をしていますが、実は、家族の大切さを書いているものです。出版社は、全くキリスト教とは関係ないのですが、本の中には、夫婦で毎朝唱えるようにしているアッシジのフランシスコの平和の祈り有り、聖書の分かち合い有り、また、「家族の関係を深める･･･」の章が必ず有り、それを出版者（社）は、そのまま通してくださいました。それらの本は、あまり売れているとは言えませんが（神のご計画であるなら、将来、ベストセラーになる可能性は十分にありますが)、出版後しばらく経っても新聞やテレビ、ラジオといったマスコミが取り上げてくださいます。そして、この家族の関係を深める、ところに焦点を当ててくれることが多いのです。やはり、ただ、薪を割る、焚(た)いているといった物質的な豊かさを求めるだけでは、当たり前というより、訴えるものが少ないと気付いているからでしょう。

今年（2007）になってからには、岩手県の 2 つの民放テレビ局が、続けて「家族を暖める薪のある暮らし」をテーマにした 15 分と 1 時間の番組を作り、放映してくれました。特に 1 時間の特集番組を企画・製作してくださったテレビ局のディレクターさんは、薪の本を読んで何かを感じてくれたようでした。「主演」は、私達家族でした。もちろん岩手県内だけの放映ですが、いくつかの家族にとってその影響、響きはあったのではないか、と思っています。

ここまで紹介しましたように、私達夫婦、家族のこの 20 年間のエネルギーの源（エネルギーのインプット＝秘蹟）は、エンカウンターであり、そして神様が使われた家族のエネルギーを伝える手段（アウトプット）は、本や雑誌などを通しての夫婦、家族の大切さの分かち合いであったように思います。　幸いなことに、五人の子ども達も家族揃っての祈りを大切にして、エンカウンターの精神を伝えてくれる年頃になりつつあります。これから、どういう展開になるのか？･･･この頃は私達夫婦にとってとても楽しみになっています。私達夫婦は、これからもエンカウンターという錠(かすがい)につながれ、婚姻の秘蹟を深める苦行？と家族の暖かさの布教を続けてさせていただけるよう、神様に祈っております。

「エンカウンターの恵み」

修子

私たち家族にとって、エンカウンターの恵みは数限りなくあります。その恵みは衝撃的なものというよりは、静かに暖かく、私たち家族のなかに流れていると感じます。　私たちは結婚して22年になりますが、お互いの性格が正反対であるために、心から神様の望む家族になりたいと望んでも、毎日のように些細な事で衝突したり、誤解したりと、不一致な状態になります。主人と私、細やかで気配りのきく主人、おおざっぱな私、何でも頑張る努力家の主人、いいんじゃないと楽をしたい私、ダメダメと私に厳しい主人、すぐにダメなんだと落ち込む私。私たち夫婦は、ダナン神父様の友達、ルーシーとチャーリー・ブラウンそのものです。でも神父様はその二人の真ん中に、ユーモアたっぷりのスヌーピーを置きました。まさに私たち夫婦にはスヌーピー"DOG=GOD"の助け、働きが必要なのだということをマリッジ・エンカウンターに与り、はっきりと確信しました。

初めてマリッジ・エンカウンターに与った時、主人が「相手に分かち合いにくいこと」のひとつとして、分かち合ってくれたことは、私が平気で、お醤油がこびりついた醤油差しを食卓に出すということでした。「お醤油がこびりついた醤油差し」こんな些細ことであっても、その不快感を日常生活のなかで、分かち合えないという事実を知ったことは、初めてマリッジ・エンカウンターに参加した私たちにとって、大きな収穫でした。

あれから20年、毎年のようにエンカウンターに与る恵みをいただいていますが、マリッジ・エンカウンターの奉仕の準備に取り組む時は、「醤油差し」の精神を忘れないで、この時ばかりはと、些細な事でも分かち合おうと、努めることができているように思います。なかなか共通点のない私たちにとって、お互いの気持ちを知ろうと努力することは、神様の望む家族になるための、大切な第一歩だということを学ぶことが出来ました。

これは、本当に大きな恵みだと思います。20年という歳月の間に、子供が一人から五人に増え、私たちの環境も大きく変っていきました。歳を重ねるごとに子供のこと、お互いの親のこと、経済的なこと、健康のことなど、自分たちの力ではどうにも出来ないと感じる悩み、不安も出てきました。だからこそ、エンカウンターに参加し、ダナン神父様の御指導をいただき、分かち合い、祈り、静かな時を過ごすことは、とても必要であると、いつも感じます。私たちにとって、エンカウンターは神様に立ち返ることのできる所だと思います。

特に年頃の子どもを持つ親にとって、子供たちの男女交際は気になるところですが、夫婦で分かち合うことで、異性を好きになることはすばらしいこと、好きな人を大切にして、こそこそしないで、オープンに付き合いなさいと、子供に伝えることが出来ました。長女、長男は現在それぞれ付き合っている人がいますが、私たちに紹介してくれました。好きな人だから、家族に紹介したいという思いは私たち親にとって、とてもうれしいことです。これも私たち家族がいただいている、エンカウンターの恵みだと思います。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

「大丈夫だよ」

深澤　絵

いつでも「大丈夫だよ」といい続けてくれたのは、神様だった。でも、この言葉と出会わせてくれたのが、SADEであり、ダナン神父様だった。私は悩むことが多い人間だと思う。よく人から、「何でそんなことで悩むの？」と言われる。悩むことが悪いとは思わないが、悩むことに疲れると、誰かに向かって「私って大丈夫かな？」と大声で叫びたくなる。SADEに出会うまでの私は、その叫び声に応えてくれる人を見つけられなくて、苦しい日が続いたのを覚えている。でも、SADEで体験した「自己との出会い」によって私は、「大丈夫だよ」と、いつも同じトーンで同じ柔らかさで応えてくれる方を見つけたのだと思う。

ダナン神父様は、その「大丈夫だよ」と応えてくれる方のイメージそのものだ。かなり前のことだが、弟が「ダナン神父様は太陽の匂いがする！」と言ったことがある。全てを包み込む太陽は、いつでも暖かく、「いつでも居る」という安心感を私に与えてくれる。

大学に進学した私は今、「家庭の使命」というテーマに取り組んでいる。私がこの課題に取り組んだのには、SADE をはじめとする、家族の集い、夫婦の集いが強く影響している。この研究を通して私が強く感じることは、家庭が「愛を守り、表し、伝える使命」を担っているということである。だから私自身が母親となり、家庭を持つとき、私がダナン神父様を通して体験した多くのことを自分の子どもとも分かち合いたいと強く感じる。

＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊

†主に賛美

(匿名)

太田教会で神父さんと、またマリッジ・エンカウンターに関わった皆さんとの関わりに感謝しております。クルシリヨから始まって息子、娘のエンカウンター・リニューアル等などの人々の関わりは、洗礼を受けた当時からただただ良い暖かい雰囲気に変わりました。

次に神父さんのお伝えくださったことは深く心に感動しています。「神父さんのお母様は冷水一杯、いただいたとき、『神に感謝』といってるよ」と。「神様はゴミを創らなかった」。いつ聞いたか、どんな時か？いろんな集いに参加しましたので、私が落ち込んだ時など心の支えとなっております。まだまだ多くの恵みをいただいたと思いますが･･･

＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊

御聖体の宣教クララ修道会　Sr.マリア・ゴレッティ稲津

ご復活おめでとうございます。
神父様が、マリッジ・エンカウンターやFIRES のことをまとめようとなさっていることに大賛成です。それは、「恵の輪」がますます大きく広がるだろうと思われるからです。お手紙を拝見して、私も書いてみようと思いついたことがありますが、それは日本でのマリッジ・エンカウンターの、言ってみれば「歴史」の中に入る小さな小さな一つの部分に過ぎないし、多分、神父様も忘れていらっしゃることだと思いますが書いてみることにしました。

日本でのマリッジ・エンカウンターは（私の記憶が間違っていなければ）1976 年休暇を終えた神父様が、アメリカから帰っていらっしゃった日から始まったと思います。その日、神父様は、太田教会の庭の真ん中で両手を高くあげて大きな声で叫んでいらっしゃいました!!「シスター、信者の皆さんのために、とてもいいものを持ってきました！！」と。(1973 年、休暇からお帰りの時は「シスター、オルガンを買いに行きましょうとおっしゃったのでした」)。2 日の後、何やらお書きになった紙を持って愛児園の事務所にいらっしゃって、「この、日本語いいですか？分かりますか？」と始まりました。深い意味はなかなか理解できませんでしたが、神父様の説明を聞きながら、とにかくできるだけ適切な文章になるよう修正しました。

さて、次は印刷することになりました。覚えていらっしゃいますか？当時は、原稿を「手書き」し、それを輪転機を回して印刷する時代でしたネ。それで、読みやすくてきれいな字を書く先生に書いてもらって印刷しました。そのようにして出来上がったもので、第 1 回のマリッジ・エンカウンターが開かれたのでした。その後しばらくの間は、神父様が日本語にしたものを、‘修正’し、先生に書いてもらって印刷し、区分し、順番を揃えてホッ

チキスで止める、その仕事を先生方全員でやりました。それをやりながら、何だか新しい素晴らしい前途が予感されて、先生方の心が、ワクワク喜びで一杯でした。後では、マリッジ・エンカウンターに参加された方々が印刷をなさるようになって、先生方のお手伝いは終わりましたが、神父様の熱意と、参加なさった方々の熱意が、教会中、愛児園中にみなぎっていて、本当に素晴らしい雰囲気でした。ほとんどの先生方が信仰の恵をいただいたのもマリッジ・エンカウンターからのものだと思っています。日本でのマリッジ・エンカウンターの「あけぼの」の時期に少しだけお手伝いさせていただけた喜びを、今でも心の片隅に抱きながら、先生方はそれぞれの人生を送っています。

別のこと
教会の信者さん、愛児園の父兄でも奥さんだけが信者、という方が多いでしたが、マリッジ・エンカウンターの回数が多くなるにしたがって、ご主人と子供たちが洗礼を受け、一つの信仰の喜びに生きる家族が多くなった事実は、マリッジ・エンカウンターの大きな遺産だと思います（奇跡と言っても良いくらいのことだと思っています）この辺の「数」を調べるのも良いのではないでしょうか？取るに足りない小さなことを書いてかえってご迷惑かななどと思いながら･･･
いつもお祈りしています。

＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊

千葉リウ子

マリッジ・エンカウンターでダナン神父様とお会いするといつもほっとできるんです。神様のようにすべてを受け入れてくれていると感じるからです。ダナン神父様がいつも「かまいません」とおっしゃいますよね。とっても救われます。わたしが「神父さま、できません」ダナン神父「かまいません」、私「失敗しました」神父「かまいません」、私「こんな私でも」神父「かまいません」「いいですよ、かまいません」などなど･･･

私はいつのころからか、主人との会話の中で困った問題が生じた時に、「大丈夫、大丈夫よ、お父さん」といって、主人にしかられます。「無責任でパッパラパーなんだから」といわれます。これってダナン色に少し近づいたことになりませんか？

前向きに考え、神様を信じ委(ゆだ)ねる･･･　背伸びせず、自然体でいられるんです。だから私たち夫婦にダナン神父とお会いする機会を与えてくださった神様に感謝いたします。ダナン神父様の「かまいません」の言葉を聞かれる日を楽しみにしております。

＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊

†主の平安　　匿名

ダナン神父様、大変ご無沙汰をしております。お元気でご活躍のこととご推察(すいさつ)申し上げます。少し前、エンカウンターでの恵みの体験の分かち合いを、のお手紙をいただきましたので感謝を込めて、これを書かせていただきます。匿名でもよいということですので、匿名で書かせてください。

27年前、高校卒業と同時に、私は教会の門をたたきました。その時、私は自分の人生に行き詰っておりました。「教会に行って救いを求めてみよう、それでもどうにもならなかったら、自分ではやれることはもう全部やってみたのだから、もう、その時は･･･」と変な覚悟も心に抱いておりました。まだ求道者の私に神父様はSADEへの参加を勧めてくださいました。

その SADE の最終日、最後の派遣の式(？)の時、それまでのいろいろな課題に対して、答えを記録したノートを、参加者ひとりひとりが名前を呼ばれて祭壇まで受け取りに行っていた時です。私は向かって左側の祭壇のすぐ脇の席に座っておりました。私の名前が呼ばれたので席を立ったその時、祭壇の奥の高いところにおいてある御像の十字架上のイエズス様と視線が合ったのです。「イエズス様が私を見ている」と一瞬、感じたのでした。その眼差しは厳しいものでしたが、生きていることが苦しくて自分でも何がなんだかわからなくなってしまいそうな精神状態だった私は、その時の自分が陥っていた危険な状態を全部見抜き、理解し、見つめていてくださる方がいてくださると直感したのでした。

後日、同じ場所に行って十字架像を見上げましたが、その像のつくりは、私の席のその場所にはイエズス様の視線は向いていませんでした。エンカウンターに参加する私のために、多くの祈りをいただいていたことを後で知りました。きっとその方々の祈りのおかげでお恵みをいただいたのだろうと思います。

私の心の苦しみは、その後も続きましたが、その苦しみを理解し、見つめていてくださる方がいてくださるという思いは、苦しい日々を何とか持ち堪える精神力を私に与えてくれました。そしてそのエンカウンターの終わりに、今は修道女となっておられる方から「ユダはイエズス様を裏切ったことが悪かったのではないのよ。ペテロだって、イエズス様を裏切ったのよ」、「かいしんは回心と書くのだけれど、どうして、回るという字を使うのか、神父様に尋ねてごらんなさい」って言っていただきました。(その数年後、洗礼の恵みを頂き、現在 24 年がたっておりますが)、聖ペテロが、自分の弱さゆえに、イエズス様の聖旨に従いきれず、その度、恵みが先に在り、泣きながら回心し、イエズス様に従っていったことを知ることが出来たこと、そして、イエズス様はユダのことも愛しておられたことを知ることが出来たことはとてもよかったです。

その後、何回かエンカウンターに参加させていただきました。キリスト教と全く縁のない家庭で育った私は、クリスチャンの方の家庭をうらやましく思っておりました。しかし、クリスリスチャンの方の家庭の中にも苦しみがあることを分かち合いを通して知ることが出来たことも恵みでした。

エンカウンター以外でもたくさんの恵みを神様よりいただいてまいりました。今は、夫と娘、全員クリスチャンの家庭の主婦として幸せに過ごしております。

今まで、そしてここまで導いてくださった恵みといつくしみ深き主に感謝いたしております。ダナン神父様、どうもありがとうございました。これからも、どうぞご健康に留意され、ご活躍なさってくださいませ。　　2007 年 4 月 16 日(神の慈しみの主日の翌日)

＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊

天田範子

結婚した時、私は信者で主人は未信者でした。私は結婚以来、主人に要求ばかりしていて、それが満たされないため、よく主人に反発していました。生まれて間もなく父を亡くし、父の愛というものを知りません。ですから父に愛されたという実感がなく、父の愛に憧れのようなものを持っていて、それをいつも主人に求めていました。深い愛に満たされ、優しくて思いやりがあり、私をつつんでくれる人、そのような人を現実の中の主人に求め続けていましたが、実際には与えられないため、いつも不満に感じておりました。大人になれない、自己中心の私は主人とたびたびぶつかりました。

そのような時、群馬・太田教会におられたダナン神文様がマリッジ・エンカウンターを始められ、私たちも勧められて参加しました。少しは通じ合えるようになるかと期待しての参加でしたが、逆に益々ぶつかり合いの生活が始まりました。私はマリッジ・エンカウンターに参加したのだから、それを生かさなければと未信者の主人に一方的にいろいろと要求し、いつも二人は平行線でした。2回目のマリッジ・エンカウンターに参加した後、主人は別々の道、いつまでたっても平行線を歩んでいることに気付き、主人は要理のお勉強を始め、1年半後のご復活祭に洗礼の恵みをいただきました。私にとって本当に喜びでした。

家族で同じ信仰の道を共に歩めることが出来る、共に祈りあえるという私の要求がここでまた始まりました。現実にはなかなか私の思い通りにはなりませんでした。信仰についても、主人は理屈でとらえますし、私はフィーリングでとらえて、言葉でなかなか伝えることが出来ませんでした。どうしても主人を否定的に見てしまい、主人を素直に受け入れられず、主人のすることを感謝するまでにいたりませんでした。主人が洗礼を受けてくれましたので、その事だけでも感謝なのに素直に感謝と云うわけにはならず、相変わらず自分の頭の中で描いた憧れのようなものと対比して、要求ばかりの日々が何年か続きました。そのような生活の中でも、今思い返しますと日々マリッジ・エンカウンターの恵みが少しずつ生かされていたと思います。ぶつかり合いながらも、少しずつ通じ合いの生活が始まっていたと思います。

やがてお互いにありのままを受け入れ合うことが出来るようになりました。私は自分に気に入らないことを言われるとよく怒っておりましたが、それも少しずつとれてきました。このことは本当に感謝です。今もマリッジ・エンカウンターの一致の歩みを一歩ずつ歩ませて下さっていることに感謝です。紆余曲折の長い道のりでしたが平行線ではない歩みが出来、本当に感謝しています。

＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊

徳良英行・浩子

エンカウンターと私たち家族

エンカウンターに関わったことによる影響は、私たち家族にとってはとても大きいです。そのことについて分かち合わせて頂きます。私たちは学生時代、新潟でSADE等のエンカウンターに参加したことはありましたが、六本木フランシスカン・チャペルセンターでは、98年秋に行われたエンゲージ・エンカウンターに結婚講座として参加したことが始まりでした。以後、婚約者のエンカウンターやマリッジ・エンカウンターのチームのお手伝いや参加してエンカウンターに関わらせてもらいました。私たちの家族は、子供（長女3歳、次女1歳）の4人家族です。

☆子供への最高のプレゼントは、親が仲良くしていること

ダナン神父様の講話の中で「子供への最高のプレゼントはお父（母）さんがその子供のお母（父）さんを愛すること（＝大切にすること＝ケンカをしないこと）。ケンカをすると子供は『両親がケンカをしているのは自分のせいだ』と思いながら自分を責めてしまう」と話されます。子供がいなかった5年間、何となく分かっていましたが、長女が1歳の時、実感しました。

私が仕事から帰ってきて、食事を先に済ませた妻が子供とテレビを見ていた時のことです。私は出来るだけ家族との会話をしたいので、テレビは極力見ないようにしています（決められた番組しか見ない、いう家庭で育ちました）が一方、妻は1日の家事を終えて、テレビを見ていました（彼女はラジオ感覚でテレビが付いている家庭に育ちました）が、私としては受け入れがたく、言葉も少なめ、ぶっきらぼうになって、雰囲気が重くなりました。

具体的に何と言ったか覚えてはいませんが（普通ではない会話をした様に記憶しています）、1歳の長女が激しく泣きました。この時、ダナン神父様の講話を思い出しました。もしかしたら、こんな小さくても雰囲気を感じて心細く不安になったのかなと。そうしたら、子育てに追われ1日の家事を終えて、わずかな時間を自分の好きな時間として使ってもいいじゃないか、と私は思う様になりました。と同時に、妻も、私があまりテレビを好まないことを知っているので、極力見ない様に、また見たい番組がある時は「見てもいい？」と聞くようになりました。

★相手への言い方
「相手へ話す時に、主語を相手ではなく自分にして話すとよい」と講和の中で神父様は話されます。例えば、「あなたはいつも･･･だ」というより「私は･･･して欲しかった」という様に主語を自分にして話す、ことです。結婚当初はこの話し方をよく使いました。「掃除してよ」とか「皿洗ってよ」とか言われるより「掃除してくれたら嬉しい」、「皿を洗ってくれたら嬉しい」などの様に。

また、私たちは、4月12日に転勤で引っ越しをしました。ダンボールの山の中で、私の薬一式を妻に出しておいてもらったのですが、私が置きっぱなしにしていた（定位置に置かなかった）為に、次に使う時には2人で探していました。そうしたら台所に置いてありました。見つけた私に「定位置に置いておくといいね」と妻。エンカウンターに出会っていなかったら、私なら「ちゃんとしまっておけよ」位のことは言ったでしょう。また妻も直球でよく話して（結婚する前は、私はよく悲しい思いをしました）いましたから、このエンカウンターの影響は大きいと実感しています。

★育児と心のゆとり
エンカウンターのおかげで結婚当初より心のゆとりが出来て穏やかになってきたのか、子供への接し方も少し変わったと感じます。なかなか子供のリクエスト（＝わがまま）には心穏やかではないことも多いですが、心のゆとりのお陰で、子供のいいところを見ることが（ともすれば『ちゃんと出来て当たり前だ』と思ってしまいがちですが）出来る様になりました。

今年の復活祭に長女と2人でミサに行きました。今まで1回もミサを通してあずかったことはなく必ず外へ行こうと言います。実際私の経験からしても、3歳のころ、ミサはとてつもなく長いものでしたから長女の気持ちは分かります。しかし、この復活祭だけは「静かにしているよ」と自分でいいながらも、辺りをちょろちょろしていましたが、最後まで（拝領の時には「外へ出たい」と言っていましたが）外に出ることなく、あずかることが出来ました。神様が長女を導いてくれたことですが、長女のがんばりを私は「とてもよかったよ」と言ってあげることが出来ました。これも、日頃の妻との会話で少しばかりだとは思いますが、心のゆとりがあったからだと思います。また、この日の午後は多少のわがままを長女が言っても「ミサを通して与ることが出来たのだから、いいじゃないか」と受け入れてあげることが出来ました。

以上の様に、エンカウンターによって私たちはとても多くのお恵みを頂きました。指導されるダナン神様、カルボ神父様、チーム、裏方、また多くの祈ってくださる方々にお礼申し上げます。また、ダナン神父様がはじめの段階で、「教会から離れていたカルボ神父様がエンカウンターを必要だと感じたのは、家族がいない友達が列車に飛び込んで自殺したのを見たことがきっかけ（ーこのようなニュアンスだったと思います）」だと話されるのですが、この自殺してしまった先輩（＝自殺自体はよくないことだけど、この人がいたから世界中でたくさんの人がエンカウンターの恵みにあずかれたのですよ、とはダナン神父様談）

にも感謝したいと思います。また、この先輩に「あなたの存在のお陰で感謝して生活している家族がいます。どうもありがとう」と伝えたいです。ありがとうございました。

＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊

下境栄子

私はセルフ・エンカウンターへの参加に依り、たくさんの課題の中に自分を置き、向き合えたことで、反省や気付きの機会も得られ、貴重な体験となりました。

また、参加できたことで、ダナン神父様がこの仕事に心血を注いでおられる意味の深さに触れ、心を打たれました。私は、若いころから病弱で、手術による後遺症でも苦しんできましたが、参加の中でともに時間を共有し、分かち合えた人々から多くのことを学ばせていただきました。その後も、かかわりが保たれている中で、弱い精神の自分から解放されている自分に気付きました。

健康を改善することにも恵まれ、前向きに生きる希望と明るさが得られたことは、私にとって大きな恵みと感謝です。参加のきっかけを作ってくださった友人に心から感謝しています。神父様がこの仕事をしてくださっていることに改めて感謝しています。エンカウンターの価値の重みと深さをこれからも多くの人々が味わい、分かち合えますように灯火(ともしび)の中に心を向けて祈っております。

＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊

海外 *Tom と Trudy Ryan(アメリカ)*

恵みを与えられた時はいつでも、それを分かち合うとより意味深いものとなります。次に書く証によって明らかなように Tom と Trudy Ryan は 25 年もの間「ヘルパー・カップル」としてカルボ神父様の FIRES のメッセージを世界中に広める手伝いをしてきました。旅行の多い彼らですが、これはその旅行記のページ数を増やそうとするためだけではなく、世界のどこであれ、必要とあれば声がかかった所へはどこへでもかけつけていたのです。主の声に応えることで、カルボ神父様の強力な助けとなっています。

1981年、私たちはカルボ神父様がワシントンD.C.に住んでおられることを知りました。マリッジ・エンカウンターの恵みに対して心から感謝していましたので、是非神父様にお目にかかりたいものだと思っていました。妻Trudyは神父様に我が家を訪問していただけないかと手紙を差し上げましたが、それに応えて本当に来てくださることになったときは、興奮しました。

12月のある寒い日の晩、夫Tomは神父様とホセ・フェルナンデスさんを我が家にお連れしに迎えに行きました。道々、彼らはTomにFIRESプログラムのすばらしさを語り続け、Tomは私たちがFIRESのすべてのプログラムには関わる時間はなかったけれど、マリッジ・エンカウンターには深くかかわっていることを伝え続けました。

暖炉のそばにすわってカルボ神父様とホセと一緒に語り合う夕べはとてもすばらしいものでした。そのあと彼らを送って帰宅したTomは、興奮してFIRESのことを最優先中の優先事項とよびましたが、さっそく、そのマリッジ・レトルノのチームにサインしました。それが、そこから25年以上続くFIRESとのかかわりの始まりでした。

神様のおかげで恵まれた、主にある家族としていただけました。これは、カルボ神父様とホセに負うところが大きいと信じています。

1982年ヘルパーカップルとして、カルボ神父様とホセと一緒にFIRESの活動を手伝い始めました。同じ年の夏にはファミリー・エンカウンターを開きました。カルボ神父様とホセは5人の息子と私たち二人の待つ家に来てくださいました。本当に豊かで、信仰深い分かち合いを体験させてもらいました。ただ、一点問題だったのは、息子のリックがかつて愛を感じたことがないと言ったことです。私たちはショックを受けました。私たちはみんなして息子を大きな愛情と支えで包み込みました。何年も続けました。そして25年前のことです。素敵な信仰に満ちた男性、夫そして父親となったリックを眺められて本当に心温まるおもいでした。

もう一度言わせていただきたいのですが、リックもリックの兄弟、そして私たちも大きな分け前にあずかることができたのはカルボ神父様が示してくださった深い、オープンで正直な分かち合いのおかげだと思います。

マリッジ・エンカウンターは神様が大切とされていることの優先順位を教えてくれています。まず神様、そして自分自身、次に夫婦、子供、家族そして友人。調和と愛情深い対話は幸せな結婚生活への鍵なのだと。

＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊

ICCFM(キリスト者家庭運動国際協議会）の3年に一度の集いが数年前にタイで開かれたとき、カルボ神父と私は一つのグループ・ミーティングを指導し、FIRES について話しました。ハンガリーからのある若い夫婦がこのグループ・ミーティングに参加し、何かあると感じて、ミーティングの後で、ハンガリーに来て FIRES のプログラムを紹介してくれないかと私に頼んできました。たまたま（？）、スロバキアからの夫婦がすぐそばにいて、この会話を耳にしました。二人は近づいて来て言いました。「ハンガリーにいらっしゃるなら、スロバキアにもいらっしゃらなければ。それから、私たちの国がロシアのすぐそばだということもお忘れなく。」結局、私は6年つづけて両方の国に行っており、現在、いずれの国にも FIRES の 20 のプログラムすべてがあります。スロバキアでは FIRES の全国集会が開かれ、カルボ神父様が参加しました。この集いのために、スロバキア中から約 400 名もの家庭の人々が集まりました。

＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊

司祭のエンカウンターを体験したある司祭は、次の日曜日の朝、ミサの説教のときに会衆の中の 4 組の夫婦を指名し、次の週末、電車で行くと 3 時間はかかるのですが、名古屋で行われるマリッジ・エンカウンターに参加してほしい、と言いました。彼らはすなおにしたがい、そこで体験したことにとても満足しました。その中の奥さんの一人は、教会で子どもたちの宗教教育を担当していて、子どもたちも SADE を通して同じ体験をしたらいいと考えました。そこで、その教会から 15 人の子どもたちが SADE に送られました。翌年、さらに 15 人の子どもたちが、そして司祭も一緒に参加しました。現在、司祭はマリッジ・エンカウンターの開催を望んでいます。最近の SADE には、本物の仏教の僧侶も参加しました。私たちにとって初めてのことです。この僧侶は、きちんと僧衣をまとった姿でやって来ました。それにしても彼はユニークです。上智大学（イエズス会の大学）の学生で、英語を専攻しています。毎日ミサにあずかり、数珠を手に聖体拝領の列に並び、司祭から祝福を受けています。私たちが祈っていると、彼が十字をきっている姿がありました。彼が仏教を勉強しているのは日本でよくある、僧侶の父親からお寺を引き継ぐためというためではありません。彼のお父さんは僧侶でないばかりか、両親とも何の宗教も信じていないからです。ですから、彼はいつでも改宗できるでしょう。ひょっとすると、SADE がそのきっかけになるかもしれません。

＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊

海外（ハンガリー）

ハンガリーでは、国内全てのドミニコ会のシスターを対象にFIRESプログラムを実施しています。これは司祭のエンカウンターの形式に基づいたものです。参加する人のほとんどは若いシスターたちで、おそらくその全員が、一人の人間として成長するにはどんな地位であっても一度は自身を省みることの必要性を認識していたと思います。そして、それにはこれが独特で、なおかつ実り多い方法なのです。この経験から得る恵みとは、豊富な教育が霊的成長の妨げになってはならない、ということをしっかり認識できる点です。当時ウクライナで働いておられたドミニコ会の神父様の熱意と信念は、ドミニコ会シスターの多くの心を惹きつけました。神父は数多くのFIRESプログラムをウクライナに紹介され、現在ではカルボ神父様の本をウクライナ語に翻訳する作業に携わっておられます。さらに、婚約者のエンカウンターの活動をされているフランシスコ会の若い神父も、ロシア語訳を作ろうと企画しておられます。

＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊

ここ日本のフランシスコ会宣教師にドイツ人の神父様がいらっしゃいますが、弟さんも神父様でした。その神父様が日本で開催されたSADEに参加されたとき、幼いころをドイツで過ごし、勉強のためにまたドイツに渡り、ドイツ語が堪能な若い女性が同じチームにいました。（彼女はその後ドイツ人と結婚し、現在ドイツに在住しています。）彼女はもともとドイツに行く予定だったので、神父様は彼女にドイツにSADEを紹介するのを手伝う気はないか尋ねました。それをきっかけに二人がドイツにSADEを紹介したところ、500マイル離れた共産国の子どもたちもが参加するまでになり、まるで霊的なものが爆発したようでした。その後、神父様のお兄様も加わり、ある家族からの特別な援助もあって、今ではほとんどのFIRESプログラムがドイツの各地に広がっています。シベリアにマリッジ・エンカウンターを紹介することも考えておられます。

この家族がどのように関わるようになったかという話もまた一つの恵みです。父親はある時から13年も姿を消し、ごく稀にしか家に戻りませんでした。懲り懲りした母親は、次に戻ったときのために離婚届を用意していました。その父親が戻ったとき、彼は娘に愛していると伝えましたが、娘はいつもそばにいない父親の言うことは信じていませんでした。父親がまた偶然（？）家に戻ったとき、神父様が彼に会い、一度 SADEに参加している子どもたちに食事を作ってみないかと尋ねました。彼は承諾し食事を作っていると、隣の部屋からあるチームの分かち合いが聞こえてきました。また娘の分かち合いも聞こえてきました。それに心を打たれた父親は、家に帰り妻にマリッジ・エンカウンターに参加しないかと提案しました。妻は驚きましたが、とても喜びました。それをきっかけに二人は仲直りし、今ではドイツにおけるFIRESの最も熱心な証人になりました。娘さんは言いました、「私の涙は真珠に変わった」と。

＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊

カルボ神父と私でSADEをローマに紹介したとき通訳をしてくれたのは若い高校生の女の子で、彼女にはボーイフレンドがいました。数年後SADE・レトルノを紹介したとき通訳をしてくれたのもまた彼女で、その当時、彼女はバチカンで働いていて、その同じボーイフレンドと結婚することを周りのみんなから期待されていました。私が東京に戻って一ヵ月後くらいに彼女から長い手紙が届きました。手紙には、レトルノの後、彼女に起こったことが書かれていました。ある時、そのボーイフレンドと結婚する運命にはないと気付くとともに、今までに会ったことのないようなシスターたちと出会い、自分もその一員になり

たいと決断したと(本部：米国）。実際に彼女は修道会の一員となり、固く終生誓願を誓いました。彼女のようにFIRESを通して神の召命を受けた例は他にもたくさんあります。

ここ日本のクララ会修道会のひとつにでは、FIRESをきっかけに神の召命を受けたシスターが5人程います。毎年恒例のFIRESプログラムに参加したことのある人の集いで、私のすぐ目の前に並んで座っていた3人の女性の内、二人は神父様のお母様で、もう一人がクララ会修道女のお母様であることに気付いたのです。3人のお子たちは皆、SADEの経験を通して神の召命を受けられたのです。

＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊

カトリック信者のアメリカ人女性と結婚したある若い日本人青年は、彼女と出会う前、一時期、母親ともども、教会から離れていたことがありました。彼は、両親が力を合わせて建てた家が完成した途端に母親を家から追い出し、子どものいる既婚女性を連れてきた父親のことが許せなかったからです。その青年は偶然(？)東京で開催された癒しのミサに参加し、父親を許せるようになりました。奇跡的なことです。そこで彼は母親にも同じように癒しのミサに参加するよう説得したところ、それに従った母親もまた、ご主人を許したのです。その時から二人は教会に戻り、立派な証し人になりました。

母親が亡くなった時、葬儀に列席していた父親は亡くなった妻と和解するかのように棺に覆いかぶさって泣いていました。その後、もう一人の女性とは別れ、子供とも和解することができました。和解のできた息子は、短期間で 100万部の売り上げを記録した“Passion of Christ”という映画についての「100の質問に答えた本」について私に電話をくれました。彼は、この本の和訳をしたので出版社を探してくれないかということです。聖週間の時でした。

聖木曜日に大聖堂では聖油の祝福のミサの後、昼食が用意されていました。私の隣にはいままで会ったことのない日本人の若い神父が座っていました。彼にドミニコ会の司祭かと尋ねると、ドミニコ会ではなくサレジオ会だということ、小教区で活動しているのではなく出版社に勤めているということなどを話してくれました。私が出版社を探していることを伝えると、近くに座っていた彼の上司を紹介してくれました。その上司の神父とは初対面でしたが、彼に今までのことを話しをしたところ、英語のコピーがほしいといわれました。あいにく持ち合わせはなかったのですが、翌日20冊が届いたので、さっそく彼のところに1冊持っていきました。準備が整いました。

1万部の初版はその映画が上映されている映画館で3週間のうちに売り切れてしまいましたので、新たに1万部を刷ることになりました。DVDが出た今、売り上げは更に伸びるでしょう。まるで公教要理のように。

この作品によって彼ら夫婦はアメリカに移り、今もアメリカに住んでいます。二人はFIRESプログラムが人生に与えた影響を未だに忘れていません。彼らの努力のお陰で、今までにアメリカの東北地区で(オリジナル・マリッジ・エンカウンター)、SADE、セルフ・エンカウンターそして、ファミリー・コミュニケーション・ワークショップが開かれ、これからも更に増えていくでしょう。全てはFIRESの癒しのミサのお陰です。これら一連のことをただ「偶然」と言って済ましてしまってよいのでしょうか？

＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊

岡紗綾子

神様への手紙

主よ、この度のセルフ・エンカウンターのレトルノに参加することが出来たことを心から感謝いたします。

私は、あなたにお目にかかれなかったら、今日まで生きてこられませんでした。私自身も家族の一人一人の命も今日まで生きてこられなかったと思います。そして、私の周りに居られる多くのご家族もともに生きてこられなかったのではないでしょうか。

思えば不登校のご家族のかたがたと、初めて 15 人で桐生の修道院に参りましてから、20 数年の間に述べ何 100 組というご両親がマリッジ・エンカウンターに参加され、ダナン神父様に会われ、マリッジ・エンカウンター、SADE、 セルフ・エンカウンター、家族のためのエンカウンター、マリッジ・リ・エンカウンター、レトルノと参加して、どれだけ大勢のかたがたが家族で、夫婦で、個人で生まれ変わり、神の愛に触れて受洗されたかわかりません。そして、今では、それぞれの教会で中心になって、大勢の方々のご奉仕をされています。私は 45 歳からカウンセラーとして日本全国から何百人という不登校のご家族を抱え、不登校の「父母の会」を主宰してきましたが、そのことをマスコミに取り上げられ、一人ではどうしようもない数の方々が集まってこられた時に、その方々がエンカウンターに参加してくださった神のご計画の不思議を心から感謝しています。

また、マリッジ・エンカウンターのレトルノでの神のみ言葉との出会いの中で、み言葉が私たちの支えになる体験もたくさんしてきました。私はこの度、調布に引っ越してきましたが、15 年前に小金井の緑町にいた時、夢のお告げでいただいたみ言葉があります。それは、1988 年 4 月 19 日にヨエル 2 章 25 節です。そのみ言葉は、「私がお前たちに送った大群、すなわち、かみ食うイナゴ、移住するイナゴ、若いイナゴ、食い荒らすイナゴの食い荒らした幾年もの損害を私は償う」でした。私の今までのことをこんなにもよくお分かりくださり、あの分厚い聖書の中にこんなみ言葉があることすら知らなかった私に、突然お与えくださったみ言葉を読んだ時、とめどなく涙があふれ出てきて止まりませんでした。神が償うとおっしゃるのですから、神の償いは完璧だと信じて待っておりました。ちょうど 14 年目の昨年 9 月に娘がマンションの購入の話をしたと同時に息子本人から 10 年ぶりの手紙が来て、2003 年 3 月 25 日（お嫁さんの誕生日）、24 日（私の誕生日）なので、一緒にお祝いをしましょうといってくれたのです。やっと償いの年が始まったと思いました。

そして、マンションのことは、私は一つだけ教会さへ近ければ、後はどこでも娘のお勤めに便利なところでいいよと言いましたら、今のマンション、サレジオ修道院の庭先に立っているすばらしい借景のところが与えられ、毎日一分で早朝ミサに与っています。息子夫婦も何度も遊びに来てくれます。息子は 7 年前に結婚して今までの仕事をやめ、世田谷の支援センターでピアヘルパーとして少しでもお役に立てるように導いて下さったことをどんなに感謝しているかわかりません。息子も SADE に 3 回参加いたしました。

あなたは本当に心のそこから信頼してゆだねられた時にご自身がお働きくださることをいつもいつも体験させてくださいました。私の両親も 87 歳と 86 歳でマリッジ・エンカウンターに参加しました。世界で最高齢者だと言われました。そして、受洗して、大きな喜びを頂いて亡くなっていきました。また大きな恵みと喜びを下さったことを少しでも SADE や婚約者のエンカウンターの食事つくりというご奉仕を皆様とともにさせていただくことで分かち合えることも大きな喜びです。

今思えば、夫は 49 歳で肺がんでなくなり、私は 38 歳でした。子供たちは中 2 と小 6 で、二人とも相前後して不登校になりました。一時的に 2 人ともなくしたような状態になり、家も取り上げられ、すべての財産もなくしましたが、もっとすばらしい天のお父様と天の

お母様をいただきました。そして、イエズス様は私の本当の救い主になってくださったことは、この世のどんな宝をいただくよりも最高のプレゼントでした。私もマリッジ・エンカウンターやセルフ・エンカウンターにも30回以上参加させていただきチームもさせていただきました。そして、改めて息子も娘もお嫁さんまで頂き、天国の故主人も本当に喜んでいることと思います。

私ははじめ、この償いは私の家族のことだけと思っていましたが、あなたは私の周りのあなたからあずかっている人々や、その家族も償いの時として導いてくださっていることが解ってきました。そうしなければ私も本当の心の安らぎがいただけません。本当にこのセルフ・エンカウンターのレトルノで、あなたに心からの感謝の手紙が書けるときをお与えくださったことをなんとすばらしいご計画だったかと改めて思いました。

そしてここまで、エンカウンターを日本だけでなく世界中に広げてくださっているダナン神父様の上にもたくさんたくさんの感謝と主が惜しみない祝福を豊かにお与えくださいますように祈りつつ、ありがとうございました。

2003年セルフ・エンカウンターレトルノにて

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

日置温子

現在31歳の長男が3歳の時私たちはマリッジ・エンカウンターに出会いました。マリッジ・エンカウンターの教えのおかげで大きな具体的助けを頂いたときのことを改めて書き記し感謝の心を呼び起こしたいと思います。

奈良県天理市に住んでいるときのことでした。九州福岡の実家で両親を見送った妹が、古くなった家を解体し、一緒に新築したいといってきました。いずれ終の住家となるその家の話は進み、妹が建築会社の人のアドバイス受けながら仕上がった間取図のまとめを持って私どもを訪れたのです。その日、家族で夜遅くまで話は沸き高校生の長男も夢が膨らむなどといいながら素晴らしい家を期待して契約の判をつくところまで決めて眠りにつきました。ところが夜中3時頃、目が覚めて私はにわかに胸騒ぎを覚えたのです。これでいいのか、と。主人にそのことを告げるとすぐに、「そういえばダナン神父様は『車や家など買おうとする時、あなた方は聖書に祈りましたか』と言っておられたよな。そうだ、皆で祈ろう」。

次の朝、ロウソクをともして祈り御旨を、といつものように聖書を開いたところ『金もないのに塔を建てると、土台だけできて人の物笑いになる･･･』というみ言葉が与えられたのです。みな唖然としました。確かに経済的な詳細にいたらないままに判をつくところでした。当然承諾してもらえると、遥々やってきた妹には気の毒なことになりましたが、結局、その妹が一番大きなお恵みを頂いたのです。当初の計画では200坪のど真ん中に一戸建ちの我々の住まいを建てるという計画を変更、100坪に15戸入る3階建てのアパートを建てたために独り者の彼女には豊かな収入が、それ以来入ることになったのです。そして私どもは残りの100坪に共同で住むにも十分に広い住居を建てることができました。実際生活においても大いに助けられた体験でありました。

本当にたくさんの恵みをエンカウンターから頂きました。盛岡天理、そして青森県八戸市と移転いたしましたが行く先々でマリッジ・エンカウンターとかかわることになりました。三人の息子たちも家族の大切さを彼らなりに意識しているようです。それは社会人となった今でも将来の夢の一つに全家族が一緒に住むことと言っているからです。マリッジ・エンカウンターを実行する限り家族一人一人がみ旨に従って生きていけると確信しております。私どもは「夫婦の関係は死後も成長し続ける」を信じ、今日も同じ方向をさして生き

ようとしております。

創立者のカルボ師、たゆまず情熱を持って指導してくださったダナン師、日本に最初に受け入れられたカップル松本御夫妻に心から感謝。　シャローム！

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

今も一緒に　　八戸　小西和子

私たちは、今から十年前のマリッジ・エンカウンターで夫婦で祈ることの大切さに気づかされました。それまでは身近な人の病気快復を願ってとか、家族誰かのお誕生日のお祝いなどと、特別なことがあるときだけ家族みなで祈ることはありました。「夫婦二人で祈りたい」、「祈らなければ」とお互いに思っていながら照れくさいような恥ずかしいような気持ちが邪魔をして、どちらからも「一緒に祈ろう」と言い出す勇気をもっていませんでした。通じ合いがなかったのです。

1997年5月はじめてマリッジ・エンカウンターに参加して自分ということ、夫婦ということについて見つめ直すお恵みを頂いたのでした。　そのころ夫は重い腎臓病を患っており、その7年後に天に帰りました。ですから二人で一緒に祈ったのは長い結婚生活の中で、わずか7年間だったということになります。たった7年間だけでも一緒に祈れてよかったとしみじみ思います。

結婚のときお祝いに頂いた聖家族の御像の前で祈るのですが、その頃の夫はもう膝まずくことも侭ならなかったので、二人で立ったまま、夫が作ってくれた祈りで心をあわせて祈ったことが大切な宝物となってキラリと光っています。現在私は夫の姉と一緒に暮らしていますが、天国の夫も一緒に加わって祈っていることでしょう。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

聖霊病院　カトリック社会事業室　Sr. 村上多美代

わたしは今、学校の事務にいた上田さん（今は結婚して矢沢になりました）と二人で病院のカトリック社会事業室に移り、わたしの専門のパストラルケアと同時に、カトリックの行事やホスピスの立ち上げ準備、ボランティアの養成、新入ナースの心のケアに関わっています。

1983 年にフィリピンからもどり、看護学校でもエンカウンターができるかどうかを確かめるために、仙台であったエンカウンターに参加したことが始まりでした。次の年に、1 年生は毎年、御嶽山（おんたけさん）に教育キャンプに行く計画があったのですが、それをエンカウンターに変えました。何も知らない 1 年生は上級生に「あなたたちはかわいそう。御嶽山はとてもいいよ。あなたたちはどうして行けないの？エンカウンター？なによそれ、そんなところに行くなんて」と散々言われ、多治見に出かけるときにはみんなふくれ面をしてしぶしぶでした。

わたしの役割は環境を整えること、手づくりのおいしい食事をいっぱい食べさせて満足させることです。彼女らの食欲は旺盛で、最初の朝食に 2 日分を平らげてしまい、とうとうわたしは断食する羽目に陥ってしまったことは懐かしい思い出です。3 日間を終えて 1 年生は喜びにあふれていました。寮に帰り、その喜びの様子を見た上級生はきっと何かを感じたのでしょう。卒業近くになってわたしのところにやってきました。「シスター、わたしたちも 1 年生が体験してきたことを、卒業する前にぜひ体験したいのですが、できませんか？ぜひお願いします！」というのです。

卒業までの予定はもういっぱいです。でもその希望をつぶしてしまうにはしのびなく、やっと 1 日を確保し、神父様にいらしていただきました。これが聖霊付属看護専門学校で 1 年生と 3 年生にエンカウンターをはじめたいきさつです。それから 20 年間、最初は行事として行っていましたが、1990 年からは正規の学科として位置づけました。途中、学生の気質からとても難しいことが 1〜2 年ありましたが、参加した学生のみならず、ご父兄からも家族の絆を深めることができたという評価をいただきました。他の学校ではなく、この学校に入って本当に良かったとエンカウンターを体験してそう思う学生がたくさんありました。3 日間の体験が、さらに深められていくよう日常のかかわりの中で気をつけてきました。

学校に帰れば教師と学生ですが、この 3 日間はお母さん役に徹し、学生たちが心を開いていい体験ができるようにと願って祈りをこめて食事を作りました。今、卒業生は日本中に散らばっていますが、ここで結ばれたわたしたちの絆は今もしっかりつながっていると感じています。学生を長年にわたり指導してくださったダナン神父様に心からお礼を申し上げたいです。

最後のシャロームはいつも神父様と学生のタイミングがずれていて不発に終わっていましたね。それでもお互いに喜びと涙の挨拶は何度体験しても感動的でした。

神父様もお元気で。時々多治見にいらしているのでしょうか？エンカウンターに多くの若い人たちが参加していい体験ができるよう願っています。本ができましたらぜひ教えてください。聖霊の慈しみのうちに

＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊

エンカウンター参加をふりかえって

聖霊病院付属看護専門学校卒業生　吉田珠美

シスター村上から手紙をいただき、一生懸命思い出しています。その頃は、とても感動しましたし、自分自身が素敵に思えて、友達もすばらしく思えたのを覚えています。わたしはカトリック信者だったので、後輩のエンカウンターのチームとしても参加しています。普通は家族から手紙をもらうのですが、私はシスター村上にいただき、とてもうれしく、大事にとっておきました。私は今結婚して家庭をもっています。夫も信者で SADE 経験者です。それでその時にいただいた笑うキリストの絵が 2 枚あります。

看護師として働き始めたときに職場の研修でもう一度エンカウンターに参加しましたが、とても心に響いたのを記憶しています。慣れない仕事の圧力、患者さんや、先輩とどのように関わってよいかわからず、心が薄っぺらくなってしまったようで、暗く、辛かった自分がありました。そのようなときにクラスメートとまた一緒に分かち合うことができ、心が軽くなり、充足したのを思い出します。皆に助けられて本当によかった。今も仕事が続けられるのは皆のおかげだと思っています。感謝！！感謝！！

私の中には、私の周りの方をうわべだけでなく、深く知ろうという心が働きます。今看護師として働いていますが、いつまでたっても未熟な者ですから、いろいろなことがあります。人間関係の難しさは、人間である以上続きます。煩わしさ、時には、この人は私に合わないなどと決め込んで、知らず知らずの間に心を閉じてしまっていることが多いです。でもそんな時こそ自分から心を開いて相手に接するように心がけるように努めています。それがエンカウンターで学んだ中で一番の収穫かなと思っています。いろいろな出会いが

あってたくさん学ぶことができました。

＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊

エンカウンターで得たもの　　浅井文美

私は、看護学校の1年･3年次にエンカウンターを受けました。そこでは、自分自身を振り返り考えることができました。私は当時、18歳でした。自分のことは結構理解していると思っていました。我が強く自分を強く持っていて、自分が思ったことは曲げられないと信じていました。その為、自分の考えと違うことを受け入れられなかったり、友達も同じような考えの人としか一緒にいることが出来ませんでした。しかし、エンカウンターで怖くなるくらい少しずつ私自身が解きほぐされていくのを感じました。2日間という、余るような時間を自分のことを見つめなおすために使ったことはありませんし、1つずつの課題をゆっくり考える事で気づかなかった私を感じました。

強がっていたのは、自分が弱いから…、弱さを見せたくない気持ちと受け入れられない気持ち。今までの自分をつくってきたものは何か、なぜそのような考えになったのか、そしてこれからは、どうする？と考え、言葉にして友達に伝える分かち合いの中で、自分のことも友人のことも信じられないくらい素直に受け入れることができました。現在は、素直に人に気持ちを伝えられるようになりました。自分の弱い部分もたくさんわかっています。弱い部分も認め、しかし弱さに甘えすぎず、自分には強く人には優しく出来るようになってきました。弱い人には心から助けたいと手を貸し、話を聞くことができ、自分の事も話すことができます。毎日、自分に正直でいることは気持ちがとても楽で、前向きになります。そして、時々休憩をして私自身を見つめなおしています。自分の発見方法を学んだエンカウンターは、私に大きな恵みを与えてくださいました。感謝しています。

＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊

エンカウンターに参加して　　7階病棟　細井裕加里

私は学生のときに1年次と3年次の2回エンカウンターに参加させていただくことが出来ました。ダナン神父様は看護学校に入りたての未熟な私たちにも分かりやすく楽しいお話をしてくださり、大変興味深く聞かせていただいたことを覚えています。また、ただ面白いだけではなく、家族のこと、友人のことなどを真剣に考える機会もくださり、私たちは決してひとりで生きているわけではなく、みなに支えられていることを教えてくださいました。そして、みなで許し合い、感謝をすることの大切さも学ぶことが出来ました。

エンカウンターに参加できたことで、36回生はみな仲良くなることができ、卒業した今でもみなで集まる機会を作り、思い出話しをしています。私は看護師4年目となりましたが、今でも看護師を続けていられるのはエンカウンターに参加でき、ダナン神父様にお会いできたからなのかもしれません。看護師という仕事の対象は患者様であり、なんらかの疾患を抱えています。心にも問題を抱えている患者様もたくさん見えて、対応に困ることもよくあります。その中でも患者様や御家族に謝罪するということがスタッフの中で最も難しいことのように感じています。看護師からの謝罪の気持ち、言葉が足りないために患者様や御家族の怒りがおさまらないという場面に出くわすことがあります。そのような場面を見ると、ダナン神父様のお話を聞かせてもらっていたら、素直に謝罪の言葉がでてくるんだろうな、と思うことがあります。

私もエンカウンターに参加し、ダナン神父様のお話を聞かせてもらえなかったら、素直に謝ることも、日々感謝するという当たり前のことにも気づけていなかったかもしれません。

看護師になった今、もう一度機会があればダナン神父様のお話を聞きたく思います。学生のときとは違った思いでお話を聞き入れることができ、また自分の成長と今後の課題も見つけられるような気がします。そして、これからもダナン神父様から聞かせていただけた貴重なお話を忘れずに看護に励んでいきたいと思います。本当にダナン神父様には感謝しています。

＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊

SADE の振り返り

松浦志保

7 年ほど前に、SADE に始めて参加した時、自分や家族に対しての振り返りをして、思いやりの心を学びました。その時に、母親から手紙をもらい、自分への愛情を感じ、感動し、涙したことが一番心に残っています。周りの子も涙していたことも印象に残っーています。

当時は、初めて親と離れて暮らし、なれない寮生活の中で、ホームシックにもなり、精神的に辛いことが多かったので、母からの手紙は大きな支えになりました。
看護学校を卒業して、看護士として日々働き、相手のことを考えながら接することが出来るようになりました。それは、2 回 SADE に参加し、自分の振り返りの中で思いやりの心を学んだことも影響していると思います。これからも、この気落ちを大切に、相手の気持ちを考えながら看護をしていきたいと思います。

＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊

(匿名)

看護師 6 年目の春を迎えて、学生時代のエンカウンターを振り返ると、私にとって初めての体験で何をするんだろうと緊張したことを思い出します。しかし、徐々にメンバーと語り合ううちに、自然と心を開き本音で語り合っていたことを思い出します。あの涙が止まらなかったのはそのしるしだと思います。

またエンカウンターを通じて、今まで私を支えてくれた両親、友達に感謝する気持ちを忘れないことを教えてもらいました。今もあの時の両親からの手紙は大切にしています。

新しい部署に変わり、忙しく、気持ちのゆとりがもてなかった 4 月にエンカウンターの振り返りのお話をいただき、この時の新鮮な感動の心を持っていた学生時代の気持ちを思い出しました。これからも、あの感動したエンカウンターの時の気持ちを忘れず、人と関わる時はやさしさを忘れず、感謝の気持ちをもって接していきたいと思います。

＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊

初めて体験したエンカウンター

匿名

かれこれ 20 年ほど前になります。当時看護学生の一環として捕らえていたと思います。少なくともはじめはそうでした。それが 20 数年の時を経ても記憶に刻まれる出来事となりました。細かなプログラムについては忘れてしまっている部分もあります。しかし、目を閉じて浮かぶ光景は毎朝の祈りをささげた聖霊病院聖堂での場面です。ダナン神父を私たち看護学生が囲み、そして、お互いの気持ちを分かち合う瞬間です。その時私の中で一番得たものは、言葉に言い換えれば、“許し”がニュアンスとして近いものだと思います。

学生寮という集団生活の中で、友情を育むことも出来れば、ストレスをぶつけたり、お互いに反発しあったりすることも、気が合う友人もいれば当然苦手と思う人もいました。

勉強、実習、寮生活、人間関係、うまくいかず自己嫌悪に陥ることも少なくはありませんでした。明るく振舞おうとしても気持ちは空回り、感情をうまく言葉にすることが出来ず、本音を言うのが苦手。そんな私が、苦手と思う人、わだかまりがあった友にも、エンカウンターを通して素直に「ごめんなさい、ありがとう」と言えた気がします。そして、こんな自分でもいいんだ、受け入れてもらえる、自分自身の中にあった壁を取り去り、晴れ晴れとした気持ちと同時に神様の前では、“こんな自分”もすべてお見通し、許されていることに気付かされました。

私たちの学年は、積極的なリーダーシップをとるものがいるわけではないのに、なぜか目的に向かって一致団結できるところがありました。これは、大きな恵みだったと思います。

寝食をともにした、同じ学び舎の友とエンカウンターを体験できたことは、とても大切な思い出であり、今も、心の中でつながっていると思うのは私だけでしょうか?貴重な体験を与えてくださったダナン神父様をはじめ支えてくださったすべての方々に感謝したいと思います。

＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊

エンカウンターで得られた恵み　　大徳屋　令枝

聖霊病院付属の看護学校で得られた尊い経験は、今の自分に大きく影響を与え、生活や環境にいきづくものとなっています。エンカウンターで、「分かち合う」という言葉の意味を教えられ、そこから人や物に対する「いたわり」が生まれました。二児の母親となった今、母からもらった手紙の真の意味を、理解することができます。いつも、全力で自分を支え、守ってくれた両親。その感謝を次は、自分の子供に同じように愛情を注ぐことで返していきたいと思っています。しかし、それが本当に出来ているのだろうかと、不安に思うこともしばしばで、あまりに慌しい毎日に子供の心、体力が付いてこられない日があるのも真実で、子供のそばにいてやりたいと思う時も、なかなかできずにかわいそうな思いをさせているかもしれません。この問題は、夫婦で常に向き合って、話し合って、「家族」のために協力しあう気持ちを日々、確認しあって、なんとかいまの生活を保っています。こんなふうに、解決していくすべを学んだのも、エンカウンターという機会を与えてくださったからだ、と思っています。機会があれば、夫婦のエンカウンターを経験したいと思っています。

今の自分は、いろんな人に支えられ成り立っています。そうした人に感謝しながら、争いのない平和な毎日を送れたら、こんなに幸せなことはないです。私を、看護の道に導いてくださった、なにか分からない大きな力に感謝です。そのことで、得られたものは、「看護師資格」より、はるかに大きなものですから。

＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊

赤塚庸子

私が初めてSADEを体験したのは、今から20年以上も前の看護学校1年生の時でした。両親がいかに私を愛してくれているのかを強く強く実感できた体験でした。また、帰りの電車の中、今ここで火事がおきたとしても、他の人に逃げ道をゆずり私は最後でいいと心から思えるような気持ちでいたことを、車窓からのきらきら輝く風景とともについ昨日のことのように思い出します。看護学校在学中の2度目のエンカウンター体験では偉大なる大きな力のことを感じずにはいられませんでした。分かち合いでは何度も何度も「ありがとう、ありがとう！」と感謝の思いで心がいっぱいでした。

卒業後はSADEのチームを何度か体験させていただき、またレトルノにも参加させてもらって、あらためて家族のすばらしさ、一致にむかうことの大切さ、天に召されるまで人は

気がつくことができるチャンスが与えられていること、ここには書ききれないほどの多くメッセージを神様からいただいたように思います。その神様に何かお返しがしたいと、初めて神様を実感してから約 5 年の月日を経て洗礼を受けるお恵みにあずかる事ができました。洗礼の日ダナン神父様が私の手を握りながら「信仰を捨ててはいけない。たとえこのダナンが捨て去ったとしても！」とおっしゃったことはこれからも忘れることはないでしょう。ダナン神父様、心から感謝いたします。18 歳の時に神父様に出会ったことで私は人として生きていく上でとても大切なことに気づくことができ、その後の人生が豊かなものになりました。これからもその時の体験が私の生きていく核となることでしょう。

＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊

聖霊病院付属看護専門学校　卒業生　中西　仁恵

エンカウンターに参加して

私はエンカウンターに 3 回参加しました。聖霊病院付属看護専門学校を通じての経験でした。1 回目は津カトリック教会研修館、2 回目は名古屋市宿泊青年の家で行われました。初めて参加した時には「どうして参加しなければならないのか」と拒否的な態度を表していたことを覚えています。しかし、参加して本当に「よかった」と心から思いました。

エンカウンターは家族のことについて深く考える機会となりました。自分の気持ちに素直になって、この場所なら分かち合って、そして、ゆるしあえるという気持ちになりました。母親からの手紙を読んだ時、「忍ということが大切だよ」との言葉に自分の道を見出し、「辛かったらいつでも戻っておいで」との言葉に母親の愛を感じることができました。この手紙は今でも大切な宝物です。3 回目は、チームの一員として参加しました。どれだけ、自分が他のメンバーの役に立つことができるか不安でしたが、皆で分かち合える素晴らしい機会に再びめぐり合うことができてうれしかったです。また、この時の最後のミサには現在の夫も駆けつけてくれ、夫と共に知らせてくれた友人に感謝しています。

エンカウンターというものは、私にとっては、家族や友人の深い愛に気づく機会となりました。また、自分が生きていくうえでの普遍的な価値観をもつことができたと思います。この経験が今でも私の生命力になっています。ありがとうございました。

＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊

マリッジ・レトルノから 1 年後、今度は私が休暇で帰省しました。これを機に、カルボ神父が私たちに提供してくれた賜物を本人に直接感謝したいと思いました。そして、弟を訪問するために出かけたボルティモアにいる間に、カルボ神父に 2 回電話をかけました。カルボ神父はそこから車で 1 時間で行けるワシントン DC に住んでいたのです。2 回ともカルボ神父は不在でした。ボルティモアを再訪する計画はなかったので、もう電話をかけることはあきらめました。ところで、私たち家族はペンシルバニア州で再会を計画しており、弟ももちろん参加する予定でした。ところがその前日、弟は車に乗り込む際に、ぎっくり腰になってしまい、会場まで移動することができなくなりました。それで、結局私が弟をボルティモアまで迎えに行くことになり、もう一度カルボ神父に電話したのです。今度は在宅で、きっそく私に会ってくれることになりました。カルボ神父と話している時、私は日本に来てもらうわけには行かないだろうか、と頼んでみました。9 月でした。カルボ神父は、11 月にフィリピンに行く予定があるから、米国に帰るとき寄り道して日本に行ける、と答えました。

カルボ神父がフィリピンに滞在中に2つの出来事が起こり、日本行きが危うくなりました。

まず、カルボ神父は腎結石で倒れ、誰あろう「ロザリオ十字軍」の創始者で現在列聖候補者に上げられているパトリック・ペイトン神父に祈られました。結石の激痛は治まりましたが、今度はバルセロナ在住の父上が重病で危篤状態だという知らせが入りました。即刻バルセロナに行って父親の臨終に立ち会うべきか？母上の一言がこのジレンマを解消しました。「日本に行きなさい。日本はあなたを必要としているのです。」

こうして日本でFIRESプログラムが始まりました。初来日の際、カルボ神父はマリッジ・リ・エンカウンター、SADE、家族コミュニケーション・ワークショップを紹介しました。カルボ神父は今まで6回来日しており、現在ではカルボ神父が始めたプログラムを事実上すべて日本で実施しています。

＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊

私が最初に考えていたのは、自分の小教区の信徒たちの助けになればいい、ということで、それ以上は夢にも思っていませんでした。しかし、少しずつ、マリッジ・エンカウンターを体験するために全国から人々が私の司牧する地域を訪れるようになりました。そして彼らを通して私やチームの信徒たちが他の地域に出かけるようになり、まもなく全国を巡るチームが数組結成され、自分たちが受けた恵みを他の人びとと分かち合うようになっていました。それから、他の国々で家庭使徒職に携わっている人々と交流するために、3年に一度開かれるICCFMの国際大会とヨーロッパとアジアで開かれる地域大会に参加するようになりました。今まで日本からフィリピン、シンガポール、タイ、スリランカ、インド、香港、ケニヤ、イタリア、マルタ、ハンガリー、スロバキア、クロアチア、アメリカを訪れ、近々ポルトガルのファティマに行く予定です。こららの大会で出会った熱心な夫婦が私を招いてくれたおかげで、上記の国々にオリジナル・マリッジ・エンカウンターとFIRESプログラムを導入することができたのです。

＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊

ダナン神父

司祭のひとりがセルフ・エンカウンターを体験し、大変感銘を受けました。この司祭はカトリック教会を離れた女性信者を知っていました。彼女は夫と別居し、神とも別れ、聖書もカトリックの信仰に関することも一切放棄していました。ある時、司祭は彼女に会って、東京で開催されるセルフ・エンカウンターに参加してみてはどうかと提案しました。彼女が住んでいる場所から東京までは列車で5時間もかかります。彼女はしぶしぶ承諾し、遅れてやって来ました。しかし、場になじめず家に帰ることに決めましたが、一応、翌朝まで待つことにしました。結局彼女は最後まで留まり、そして完全に生まれ変わりました。すぐに東京に住んでいた息子二人を訪れ、もう一度息子たちの父親と人生をやり直す決意を語りました。

今仮に住んでいる場所により近い所で行われたセルフ・エンカウンターにも参加し、次は自分の住んでいる秋田市でセルフ・エンカウンターをしてほしいと頼みました。会場は、101回も人間の涙を流したと分析されている木造の聖母像を崇敬するために世界中から巡礼者が訪れるようになった黙想の家でした。(私も涙を流すのを直接見たという人々を知っています。) 彼女は日本中の7つの都市から40人の参加者を集めました。その中には、司祭が一人（彼女に最初にセルフ・エンカウンターを勧めたあの司祭)、神学生が1人、黙想の家から会員が3人、アルコール依存症の男性が2人とその妻たち、老若男女、クリスチャンも未信者もおり、皆すばらしい恵みに満ちた体験をしました。彼女の夫は未信者でしたが、妻の変貌ぶりに驚き、2週間後に開催されるマリッジ・エンカウンターに参加するこ

とにしました。彼女がどれほど喜んだかは想像に難くありません。また、そのセルフ・エンカウンターの参加者の一人は、秋田市出身の若い主婦で、今まで一度も教会に足を踏み入れたことがありませんでした。たまたま近くのカトリック教会の前を通りかかったとき、道路沿いにあった教会の掲示板に貼ってあったセルフ・エンカウンターの案内に目が留まりました。いったいそれが何なのか全く知らずに彼女は参加しました。参加後、彼女は信仰について学び、洗礼を受けました。これは本当にただの偶然でしょうか？

そのセルフ・エンカウンターのチームだった一人は、アルコール依存症でした。彼にも彼独自の恵みの物語があります。ある日、酔った勢いで逆上した彼はナイフを取り、ある男を刺そうとしました。警察がかけつけ、彼は拘置所に入れられました。警察は、彼を列車で4時間かかる横浜の精神病院に入れる決定をしましたが、そこで下された医師の診断は、彼は精神異常ではなくアルコール依存症だということでした。病院は彼を横浜市内の AA に送りました。そこで彼の話を聞いた人々は、彼の故郷にあるカトリック教会で開催している AA のミーティングを紹介してくれました。初めてそのカトリック教会を訪れた彼が掲示板に目を向けると、地元でセルフ・エンカウンターがあり、誰でも参加できる、とありました。それがどういうものか想像もつきませんでしたが、彼は自己と出会わなければならないことだけは痛感しており、妻と一緒に参加することにしました。彼は大いに恵みを受けたので、次回はいつどこで開かれるのかを知りたがりました。次回のセルフ・エンカウンターは翌週末北海道で行われる予定でした。彼は8時間車を運転して北海道に行き、再び参加しました。それから彼と妻は教会に通うようになり、要理を学び、娘と一緒に 3 人で洗礼を受けました。彼はそれ以来一滴もアルコールを口にしていません。彼はアルコール依存症者だけを対象としたセルフ・エンカウンターを開催してほしいと頼み、私たちは開催に向けて準備をすすめてきましたが、3 人しか申し込みがなかったので、アルコール依存症者以外の人々も誘いました。そのうちの一人は奥さんと一緒に参加していましたが、前回のセルフ・エンカウンターにもまた参加しました。彼らも今教会に通い、奥さんはすでに洗礼を受けています。

* * * * * * * * * * * * * * * * *

Christie and Loren(アイルランド)

次に、仕事の関係でアメリカから来日しその後アイルランドへ移った夫婦の証しです。彼らとは今も連絡をとっていますが、婚約者のエンカウンターに参加したこと、そしてチームとして手伝いをしたことがどんなに自分たちの結婚生活の助けになっているかということに関し、よく話をしています。これはFIRES からのもう一つの恵みです。

2002 年、東京でダナン神父の霊的指導の下に 2 日間にわたる婚約者のエンカウンターに出ました。カトリック教会で結婚するに当って、必要とされる結婚講座は終了させなくてはならないということ以上には何の期待も持っていませんでした。参加した婚約者のエンカウンターは妻となり夫となるのに必要な大切な心の準備に関わるすべての事柄を網羅するように出来ていて、結婚の意義ということに関しても非常にわかりやすく出来ていました。この集いの中で、私たち二人はそれぞれに恵みを頂き、それは私たちに堅固なる結婚の土台となっていきました。

Christie:（妻）
私にとっての最大のことは、この癒しのミサで、神の絶大なる愛を感じることができ、それによって長い年月私の心の奥に消えずにあった痛みやなやみがすべて取り除かれたと感じることが出来たことでした。私はなぜ自分がこれほど、さめた冷たい人間なのか、これはトロピカルの人たち特有なものではないのかと考えていましたので、ダナン神父様に言

われるまではそれが、子供時代に受けた否定的な経験から来るもので、それを癒し、許しを得るまでは取り除かれないなどとは、思いもしませんでした。

大家族の中で育ち（私は 12 人兄弟姉妹の上から 2 番目）、両親の愛情を豊かに受けた覚えはありません。私は早くから独立し、自分自身をそして幼い兄弟たちを養わなくてはなりませんでした。両親にかわいがられたり、両親が私のために時間を割いてくれたりした覚えはありません。この経験から、私は自分自身も、出会ったほかの人たちを愛することなく大きくなりました。癒しのミサの中で、私もあたたかく人を思いやれる人になれるのに、それが出来なかったのは、この子供時代に体験した辛い経験のせいだったのだと、生まれて始めて気付かされました。癒しはゆっくりと、でも豊かにひろがりました。その日から始めたお祈りのおかげで、神は私に両親を許すこと、そして感謝できるようになる恵みをあたえてくださいました。このエンカウンターに出ていなかったら、今でも冷たい、さめた人間であったでしょうし、私たちの結婚も問題だらけになっていたでしょう。いま、私は自分が幸せであること、愛情深く、人に対して思いやりをもって接することが出来、両親ともとても素敵な家族でいられるようになったと、自信を持って伝えられます。

Loren: (夫)
何も知らないまま、何の期待もないままエンカウンターに参加しました。問いかけの深く意味することに驚くとともに、それが、人生のあらゆる場面に信仰をどういかしていこうかと奮い立たせてくれました。二人して、自分たちの生き方や、どのように神のみ旨にそって行くかを深く掘り下げていきながら、クリスティとわたしは出産計画など立てずに子供は神様からの授かりもだから素直に従おうという思いに誓いを新たにしました。こう決めたおかげで、二人のきずながますます強いものとなり、互いをより結び付けています。

＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊

大村宜子
わたしが、エンカウンターに参加したのはもう 10 年以上も前のこととなります。2 年前結婚をし、看護士も少しずつ続けています。私は人に感謝をすることの大切さ、それを伝えることの大切さをエンカウンターで学びました。それは私の人生の中で心の支えとなっています。両親、夫、姉妹、同僚、友人･･･　今の私がいるのも自分だけの力ではなく、いつも支えられ私がいることに日々感謝をしています。

先日大切な友人を立て続けに 2 人亡くしました。1 人は末期がん、1 人は交通事故でした。2 人は私の人生の転機のとき、背中を押してくれた大切な友人です。今は 2 人の写真を見ながら、「ありがとう」と声をかけることが私の日課となりました。2 人の死を悲しむだけでなく、自己の死生観を振り返り、どう生きていくかを再確認させてくれたことに感謝しています。日々いろいろな困難に出会い、生きることの大変さを感じ、つい不平･不満を口にしてしまいがちですが、生きていく中での試練と考え、一日一日感謝の気持ちを忘れず歩んでいこうと心がけています。

＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊

マリッジ・エンカウンターに参加するため、ある主任司祭は北海道からはるばる東京までの長い旅をしてきました。そこで夫婦関係・家族関係を育むことが信徒の霊性向上に素晴らしい効果をもたらすということを悟るのに時間はかかりませんでした。その司祭が誘った3組の夫婦はバスや飛行機、電車、タクシーに乗ってまで、何か内容もよく分からない集まりのため、わざわざ出かけることに乗り気ではありませんでしたが、お礼に黙想の家の近くにある有名な温泉に連れて行ってあげるという約束を聞いて、喜んで参加してくれる

ことになりました。

出発当日、雪が降り始め、フライトが中止になる恐れがでてきてしまいました。司祭は雪がやんでくれるように祈りました。しばらくして雪はやみ、彼らは無事現地に到着。プログラムに参加し、最終的に素晴らしい時間を過ごすことができました。そして、あとはその有名な温泉を満喫するだけとなりました。すると何ということでしょう、その朝に雪が降り始めたのです（その時期には現地で前代未聞のことでした）。司祭はまた祈りました。ただし、今回は雪がやまないようにと祈っていました。というのも、最後の晩を温泉ではなく3組の夫婦が地元の人たちとその地でマリッジ・エンカウンターを開けるように、彼らの体験を分かち合ってほしかったからです。すると雪は降り続け、温泉行きのバスは運行停止、そこでマリッジ・エンカウンターを開くための相談会を持とうということに決まったのです。

これには29組の夫婦が参加を申し込んできました。このマリッジ・エンカウンターに、あの3組の夫婦と司祭も参加することに同意しました。その時期は、ちょうど空港周辺が深い霧のため何日も運行中止になることが多い時期だったので、7名のチームメンバーは早めに空港に行き、予定していたフライトよりも早い便に空席がないかを見に行くと、たまたま7人分の空席がありました。しかし、いざ飛行機が飛び立つと、こんどは飛行時間が通常よりだいぶ延びてしまうことが分かりました。初めてのマリッジ・エンカウンターを一生懸命準備し待っていた夫婦たちは、霧のせいで到着が遅れることを知って、飛行機が無事着陸するように祈りました。すると、視界には分厚い雲以外に何も見えなかったのに、着陸準備のアナウンスが流れました。それは、まるでモーゼが杖を振りかざして雲の中に通り道を用意してくれたかのようでした。飛行機は無事着陸しました。後で分かったことですが、この前後3日の間にこの空港に着陸することができたのはこの便だけだったそうです。

実際、マリッジ・エンカウンターの後、帰宅のためにはこの7人は電車で遠く離れた別の空港へ行ってそこから飛ばなければなりませんでした。言うまでもなく、このマリッジ・エンカウンターは神の恵みに満ちたものとなり、これに続きいろいろな地域で、マリッジ・エンカウンターとFIRESのプログラムが数多く行われるようになりました。雪がやんだこと、雪が降り続いたこと、6日間のうちで着陸することができたたった一つのフライトにちょうど7人分の空席があったこと…。わかりますか、その意味が！

繰り返しになりますが、7人のチームメンバーが飛行機でマリッジ・エンカウンターにでかけようとしていたときのこと。目的地周辺が強風のために彼らが乗ろうとしていた便は別の空港に着陸・待機しなければならない可能性が非常に高いとのアナウンスがありました。もしそうなれば、その空港から電車で目的地に移動しなければならず、その夜にマリッジ・エンカウンターを始めることはできなくなります。それ以降アナウンスはありませんでした。が、結局、目的地の空港は静穏で飛行機は無事、着陸できました。チームの一人は何かの間違いだったのではないかと言いましたが、激しい嵐があったことはまぎれもない事実で、この日に着陸できたのはこの便だけだったとも知らされました。言うまでもなく、このマリッジ・エンカウンターこそが、この地域へもたらされる多くの恵みの出発点だったのです。わかるでしょ、この意味が！

＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊

先に述べたような状況で神の恵みの力に心から感謝するには、それに関わった人々をじかに知り、まず神の恵みがもたらした結果をその目で見ることだ、ということももちろん納得できます。しかし、あなたがたの祈りもその一役を担っていること、そして、私はその

ことであなたがたに感謝したいと思います。

すでに引退されていますが、長年にわたってマリッジ・エンカウンターに関わり、多くの夫婦にもたらされた恵みを目にしてこられた神父様がいました。その神父様が自ら体験された恵みについて次のように分かち合っておられます。「私の場合、マリッジ・エンカウンターのおかげで、女性との関係をより人間的、かつ真のキリスト教徒的なものにできました。私は女性に対してとても堅苦しく形式的で、どこか恐れを抱いていたところがありましたが、『マリッジ・エンカウンター・ウィークエンド』で奥さんたちから誠実で率直な話を聞かされ、多くのことを学ばされました。今では彼女たちが人生や神との関係について語ることも、女性の意見だからという簡単な決めつけをせずに聞けますし、むしろ聞きたいと思えるようになりました。」

＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊

海外・匿名

日本中で、どれだけ多くの人たちが次にお伝えするような体験を分かち合われているでしょう。「32年の結婚生活で初めて、夫が私と一緒に祈ってくれました」(夫がセルフ・エンカウンターを体験した主婦）。「私は神様もキリスト教も嫌いでしたが、『婚約者のエンカウンター』の体験を通して、神が瞬時に私の心をとらえたのです。そしてその場で3つのことを決心し、今でもそれらのことを守っています。それは、妊娠中絶を行わなければならなかった産婦人科での仕事を辞めること、フルタイムでホスピスに勤めること、そして洗礼を受けることです」(婚約者のエンカウンターを体験した医師)。「少なくとも、私は父を殺した男を許せるようになりました」(SADEを体験した高校生の少女)。「私たちは神の恵みにより、スピード違反による交通事故で3歳の娘を奪った若い男を許すことができました。また、私から大金を借りたあと姿を消した兄も許すことができました。私は兄を見つけ、許しの気持ちを伝えました。今はとても仲良くしています」(マリッジ・エンカウンターですっかり変わった夫婦)。「この体験を通して、『神は本当にここにおられる』という、それまでは知らなかった言葉が受け入れられるようになりました。今では、この言葉がまるで、神を無視し続けてきた僕のために書かれたような気がしました。今は、神がここにおられるということを知っています」(SADE・レトルノを体験した高校生の少年)。「今まで、家族と一緒の、また家族を通しての福音など考えたこともありませんでした」（司祭のためのエンカウンターを体験した中年の教区司祭）。

＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊

ダナン神父

そのご主人は妻を愛していましたが、同居していた妻の母親を受け入れ、許す気にはなれませんでした。しかもこのために結婚生活に亀裂が生じ、離婚の危機にまで至っていました。彼らはマリッジ・エンカウンターに参加したことはありましたが、それでも夫と義母の関係にはほとんど変化がありませんでした。ちょうど、彼らの関係が冷め切ってしまった時、私たちはマリッジ・レトルノを通して夫婦が神と深い和解を得られることをめざしたマリッジ・リ・エンカウンターを計画していました。これは、「まず行って仲直りをし、それから帰って来て、供え物－ もし望むなら、神との霊的和解をささげなさい」というキリストの説諭に基づくものです。

しかしどういうわけか、その開始前日になっても、彼ら以外には2組の夫婦からしか申し込みがなく、私は中止を考えていました。しかしそうする前に、神のご意思を確かめたいと思い無作為に聖書を開くと、ヨナの話で、神が「よこしまな時代のものたちはしるしを欲しがる」(マタイ12:38)と言われている部分が私の目に入ったのです。まさにこれだ！ そして、「ヨナのしるしのほかには、しるしは与えられない」。ヨナは3日3晩クジラの腹の中

にいて、ニネベに行き、人々に説教をして彼らを悔い改めさせました。ここでヨナが3日3晩クジラの腹の中にいて3日目にはきだされると描かれているのは、イエスが3日3晩大地の中にいて3日目に復活されることを示していると解釈されています。同じように、マリッジ・リ・エンカウンターも3日間のプログラムで、細長くてクジラにそっくりな黙想の家で行われます。私は、主がこう言われているのだと感じたのでした。「行ないなさい。きっと3日目に一致が見られるでしょう。」そこで、私たちはプログラムを決定しました。そして翌日までになんと10組の参加者を得ました。そしてさきほどの夫婦は驚くべき和解を遂げ、妻が乳がんで天に召されるまで、夫と義母とともにすばらしい関係を築くことができました。しかも夫は、その後も義母を最期の時までずっと、愛情をこめて面倒を見ていたのです。神は居られる！神は、神の不思議な業を私たちに与えられた聖霊という道具を通して行われる。

＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊

ダナン神父

また、上記の夫婦と同じ教区内に彼らの親しい友人の主婦がいました。彼女の夫はキリスト教徒ではなく、私の知る限り、彼女と一緒に教会に訪れることはありませんでした。彼らはさそわれてマリッジ・エンカウンターに参加し、そのマリッジ・エンカウンターで私は初めて彼らと会いました。そこで、私は彼らのすばらしいきずなに強く感銘を受けました。その時までは、私とともにマリッジ・エンカウンターのお手伝いをしていたのは、ともにカトリック信徒のご夫婦ばかりでしたが、私は夫が未教徒の、このご夫婦にもお手伝いをお願いすることにしました。ただ、私がそのことを彼らに話すよりもだいぶ前から、このご主人はだまって教会に行って洗礼準備の勉強をしていたようです。彼は、その日が来れば妻が大喜びするだろうと思って、彼女を驚かせようとしていたのでした。もちろん、彼はそんなに長く秘密にし続けることはできませんでしたが。ともかく、彼は洗礼を受け、マリッジ・エンカウンターのチームをしてくれました。

ところが彼女は乳がんで倒れた友人の女性と同じ頃、胃がんとわかり、場所は違いましたが同時期に入院することになりました。彼女たちは二人とも、主への強い信仰によって、この病気と自らに差し迫った死とを受け入れていました。そして、彼女たちの強い信仰心が、二人の夫たちの信仰をも深めることになったのです。妻を喜ばせようとして密かに洗礼準備をしていたその男性は、自分に与えられた信仰という賜物に応えるため、今では非常に積極的に教会の活動に貢献しているばかりか、貧しい人々を援助するために外国にまで行って自分の専門技術を伝える活動を行っています。

＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊

幻想　幻滅　喜びの旅路を生きる

岩本　冨佐子

マリッジ・エンカウンターに出会ったのは1988年、今から、19年前の桐生修道院でした。何も知らない私は、2日目の夜2階の廊下に並んで待っている人に、神父さまとお話できると聞いて並び（それは告解の順番を待っていらしたと今ならわかりますが）神父さまの前の椅子に座りました。「どうしたらあのチームの人達のような夫婦になれるでしょうか」と訊きました。ニコニコしながらダナン神父さまは「明日もう1日ありますよ」と・・・・

最後のミサの時、シャローム！と色んな人が飛びついてこられたとき、何がなんだか本当に驚きました。ただ夫が妙に元気になって、帰り桐生からの電車の中からしゃべりっぱなし。家についてもその状態で、余りの父親の変わりように娘が「パパがこんなになるなら、私も行って見たい」と言ったことを覚えています。これは何なのだろうと思いました。でも私にとっても、私達夫婦にとっても絶対必要なものだと私は感じ、確信のもとに以来、

エンカウンターの各プログラムに何回も参加しました。でもそれは決して順調なものではなく、夫と私のエンカウンターに対する温度差があり、「あんなものに行ってもしょうがない」と言う夫を説き伏せるように東武鉄道の「両毛」に乗ったこと、電車の中でも夫が行かないと言い出したり、分かち合いのとき夫はベッドに寝転がって、まるで分かち合いが出来なかったことなど、たびたびありました。

私はイグナチオ教会に通い、カトリック入門講座に出てミサに与りました。祈ることで心の安らぎも覚えました。そのころの私は、癌の母の遠距離介護、長女の結婚、資格試験に挑戦している次女、そして何が不満なのか何かと不機嫌な夫、さまざまな問題を抱え押しつぶされそうな苦しい日々でした。そんな中、「疲れた者、重荷を負う者はだれでも私のもとに来なさい。休ませてあげよう」とのみ言葉に救われ、この苦しい時に神様に出会わせていただいたと思います。

夫は定年になってからダナン神父さまのもとで勉強をさせていただき、1994年4月、ご復活祭に夫婦で洗礼の恵みに与りました。洗礼を受けても生きていくのは簡単な事ではありませんでした。1997年8月に夫の肺癌が発見されました。タバコが原因のたちの悪い小細胞癌、ステージ3、余命は発症から1年。5年生存率10%と聞かされたのです。

発症の時期については、その年の3月と考えられました。マリッジ・エンカウンターにチームとして参加していた最中、大田ファミリーハウスで夜中に急に呼吸が苦しくなったのが始まりで、同じ3月の末に私がSADEのお手伝いに潮見教会へ朝早くから通っていた時、夫は会社のOB会に出かけましたが、その時、本人は話しているはずなのに声が出なくなったのです。医者はこの嗄声(させい)を発症とみて余命1年だと言いました。検査の為の手術とはいえ手術室からお部屋に帰って来るまで9時間、私と次女は祈りながら待って、待って、その挙句いきなりの宣告でした。その時、既に8月ですから医者の診たてどおりなら余命は半年ほどです。もうダナン神父さまにおすがりするしかなく、神父さまにお伝えしたとき、神父さまからお聞きした言葉は私の中に今もはっきり残っています。

「神様の力は奇跡より大きいよ」「希望はいつまでもなくならないよ」
「でも、神様の思いは別だよ」

またお見舞いにきていただいた際、帰り道で「今の医学は発達しているから、それも使いましょう。これから点滴も受けるでしょう。そのとき、1滴1滴を『今イエスさまが私の身体のなかに入って癒してくださっている』とイメージして、受けるように伝えてください」。さらに「油塗ってね！」とおっしゃいました。これらは忘れられない言葉です。そして皆さんに伝えたい言葉でもあります。

「英次さんを何としても、車椅子ででも、ルルドに連れて行く」と祈りの言葉で励ましてくださったのは、1994年10月バチカンでの「教皇と家族の世界大会」の巡礼で始めてお会いした佐藤聡　郁子ご夫妻です。お二人はわざわざ函館からお見舞いに来てくださいました。こんなことを、私は人にしてあげたことがあるでしょうか。札幌の植村ご夫妻からも何度も祈りのお手紙をいただき、元気を出すようにと写真や、いつも聞いていらっしゃるカセットテープまでお送りいただき、希望と大きな力になりました。FIRESの方とは、本当の身内以上のような関係になってしまう不思議を感じたことでした。

夫の予後は、初めは順調だったのですが、9月9日にインフォームドコンセントもなく、わき腹につけてあったドレーンから直接肺に抗癌剤を注入されてしまいました。途端に容態は急変し、夫は激しい苦しみに襲われました。私は「おかしい！」と直感的に思い、医者に確かめたところ、当初医者は、薬は肺の癒着を防ぐ為のものと説明しましたが、私が必

死で問い詰めると、「実は抗癌剤です」と答えました。珍しい小細胞癌だし、必ず死ぬ患者だから論文のための症例に使われていると感じ、私は夫を救わなくてはとの一心でした。転院も覚悟のうえで医者と話をしにエレベーターで降りて行く際、思わず「イエズス」といいながら吸い、「キリスト」といいながら吐く深呼吸をしている自分がいました。私は何の怖れもなく医者に対して、落ち着いて言葉を発していました。私が経験したことのない冷静さで、真剣に医者の目を見て話すことができました。大学病院の医者の口から「すみませんでした」と聞いた時にはびっくりしてしまいました。私一人ではない目に見えない助けがあったと強く感じました。

夫の看病をしながら苦しくて聖書を開くたびに、何回も同じみ言葉が目に飛び込んできます。「現在の苦しみは、わたしたちに現されるはずの栄光に比べると、取るに足りないとわたしは思います」（ローマ 8・18）です。私は、神様が「栄光」を現わして下さると信じ、勇気をもって祈り続けました。毎日ひたすら病院へ通い、病院へ向かう車の中では、運転しながらロザリオを唱えていました。そしてやがて教授が驚いてしまうことが起こりました。夫の肺の入り口にあった 10 円玉ほどの、カリフラワー状の影が消えたのです。このことが CT で確認されたとき、み言葉の「神の栄光」を実感させられ、神様のみ業に感謝したのでした。夫は、30 回の放射線治療と 2 クールの抗癌剤治療とを経て、入院から約 4 ヶ月、126 日目のクリスマスイヴに退院しました。退院に当たっても、医者からは私に、近い将来、癌が脳か骨に転移し、癌死するといわれていたのです。ダナン神父さまから「命の限りについては本人が一番わかることだから言うのはよしましょう」と聞いていましたので、夫には、癌であることは知らせていましたが、余命については伝えてはいませんでした。

1998 年 9 月末に佐藤ご夫妻の祈りが実現して、ルルドに行くことになりましたが、佐藤ご夫妻の発案で、日本マリッジ・エンカウンター25 周年を記念して、世界で始めてマリッジ・エンカウンターに参加されたスペインにお住まいの、ご夫婦を訪れてお目にかかろうということになりました。私は、退院 9 ヶ月の夫と次女佐保里と参加しました。

スペインのバルセロナ空港には 9 月 26 日 11:00pm という遅い時間にもかかわらずハイメさん、メルセデスさんご夫妻が出迎えてくださいました。おふたりの姿を見た瞬間のあたたかな感動を記憶しています。修道院での 3 泊 4 日、当時もう 80 歳を超えたご夫妻だったのですが、お元気で私達のために、本当に心のこもった優しい細やかなお心遣いをしていただきました。ご夫妻の講話をダナン神父さまが通訳してくださった貴重な時間のそのシーンも、サグラダファミリア、ティビダボ、モンセラットなど案内していただいた、あらゆる光景もあの空の青さも、今も全てが脳裏によみがえり思い出すことが出来ます。でもバルセロナの一番深い感動は、どんな有名な場所でもどんな景色でも、ご馳走でもなく、ご夫妻の存在そのものだったのです。バルセロナを離れるとき、ハイメさん、メルセデスさんとの別れがこんなにも別れがたいものになるとは思いもかけないことでした。魂の深い響き合いと感動の渦に、感極まり、その気持ちは言葉では表現することができません。神様の恵みに感謝するばかりです。

ルルドでは、朝露のしたたる早朝、グロットでのダナン神父さまのごミサに与った喜びは一生忘れられません。まさに冥加に尽きる思いでした。夫が一緒に来られたことに、心からの感謝の祈りを捧げていました。夫は、ルルド到着の日の夜に行われたマリア行列に参加した時、疲れてしまい地べたに座り込んでしまいました。休ませるベンチのようなものもありません。時雨れて小雨のなか、何回も倒れる夫を休ませ、休ませ、私は大きな夫の体を支えて、行列の渦をぬけてやっとストーブのある暖かい休憩所にたどり着きました。そこで夫を待たせ、ホテルまで走って帰りました。お部屋から全部のバスタオルを持ち、

ホテルの車椅子を借りて、一刻も早く夫を休ませなければとの思いで、行列から帰ってくる大勢の人の波に必死で逆らって突進して、休憩所に行ったのです。途中偶然にも行列の人波にいた次女と出会い、次女も手伝ってくれて、休憩所の椅子に座って眠り込んでいた夫を、バスタオルでくるんで車椅子に乗せ、坂道を駆け上がって帰りました。何もできずベッドに倒れている夫の靴をぬがせ、着替えさせ寝かせました。夫は余程疲れていたのでしょう。グウグウ眠っていますが、私は疲れてお風呂に入る気力もなく、このまま皆様とこれからのローマ、アッシジへの旅を続けられるかしらと、眠れない夜でした。

次の日、まだ体調が回復していない夫を、ピシーヌ（水浴場）に車椅子で連れて行ったときのことです。80キロ程の夫を重い重いと押していました。ルルドでは担架の人や車椅子の人が特別で、昼間のグロットのミサの間でも祭壇のうしろの「湧き水」の所を見ることが出来るのです。普通の人はミサの間、行列して待っていなければいけないのですが、夫が車椅子なので特別の列に入れていただいて、滔々と豊かにあふれている、透明にかがやく清らかな泉の水を見ることができたのでした。

そして一生懸命本当に重いなと車椅子を押していましたら、案内係りの人が勿論言葉はわからないのですが、車輪を指しているので見ると、パンクして空気がぬけていることを教えてくれていたのです。あの重さはパンクの所為だったのです。待っていなさいと誰かを呼びに行ってくださった様子だったのですが、一人の大きな男の人が現れました。ルルドでのボランティアの制服を着て、帽子をかぶり、肩から担架を担ぐための皮のベルトをつけた人です。私はルルドの奇跡の、写真が載っている小冊子を見ていたのですぐわかりました。私たちにかわってパンクしている夫の車椅子を押していかれるので、修理する所へ連れて行ってくれるのだろうと思っていたら、グロットの右の道に沿って、どんどんホテルの方向の坂道をあがって行くではありませんか。横を歩きながら見ると顔は少し赤ら顔、左足が不自由そうで引きずり加減です。申し訳ないと思いながらついて行くしかない有様、言葉は交わせません。その方も無言のまま進まれるのです。だんだん私たちのホテルが近くなります。あれあれと思っていると、着いた所は私たちのホテルのロビー。かすかに優しく微笑んだ目と目が合いました。どう考えても私たちはホテルの名前をお教えしていません。にもかかわらず、本当に驚きました。何が起こったのか判断できない程の驚きでした。どのようにお礼を言ったのかも覚えていません。そしてその方は無言で、呆然としている私達を残したまま、その制服の後姿は見えなくなっていきました。

夫を車椅子でピシーヌに連れて行っていたので、私たちはベルナデッタの生家を訪ねることができませんでした。私は当初それが残念でたまりませんでしたが、これは神様がもう一度ルルドに行けるように、行っていない場所を残して下さったのだと、今は思っています。ですから、私はルルドにまたもう一度行きたいと思います。まだルルドを訪れたことのない長女や孫たちも一緒に行けたら尚うれしいと願っています。

夫の肺癌発病から丸10年が経ちました。今も、いくつもの生活習慣病を持つ夫との生活です。いつ救急車で夫を病院に運ばなければならないことが起こるか、緊張の毎日です。夫の病気は全て生活習慣から由来しているものです。これだけの病気を持っているのだから、自己管理をして、もっと自分を大切にして欲しいと願うことしきりです。人間として弱い私は、このような日常を過ごし、夫を支え、乗り越えていかなければならないことの多い中で、心身ともに疲れ果ててしまいました。眠ることもできなくなり、食事も入らずボロボロになり、ついには鬱状態になって、歩く時には杖が必要な時もありました。今は以前より少しずつ元気になってきてはいますが、やはり人と会ったり話すことに苦痛を感じることがあります。

人間各々役割が与えられているとするなら、私の人生を振り返ったとき、一生懸命、必死にやらなければならない事が起こります。性格としていつも誠心誠意、全身全霊で最善を尽くそうとしてしまうので、その結果、時として自分が倒れてしまう程、辛く苦しいことも沢山あります。でも、その辛さと苦しみがあったからこそ、イエスさまに出会うことができたと信じています。いつも離れずに導き助けてくださっていることを、実感させていただいています。そして神様の現存を知ることができたことを、心からの喜びをもって感謝の祈りを捧げたいと思います。

そして逆説的ですが、自分の人生を振り返ってみると、それこそ、見つめの次元である喜びが私の生活の中に入ってくると思います。様々な困難に出会ったゆえに、イエズス様に出会うことが出来ました。重荷があるときに、それを“支え、頼らせてくださる方”に行くことが出来る、どんなにすばらしい恵みでしょう。最初にマリッジ・エンカウンターに参加する紹介があった恵みを受け、それによって夫婦として、そしてさらに、2人の娘と孫も洗礼を受けることが出来ました。それにFIRESを通して、身近な親族よりも親しく感じている多くの友人を作ることが出来た恵み、バルセロナ・ルルド・ローマ・アッシジ・グレッチオとラベルダへ行くことが出来て、それぞれのところで神秘的な体験をすることが出来ました。夫は肺がんから解放されて現在まで10年も寿命を延ばしていただくことが出来ました。

神様が私たちを見捨てないでこれからも導き続けてくださることを信じています。信仰の恵みのために、十字架なしに復活はないことを悟らされ、いろいろな十字架があるからこそ、永遠までに続く復活を期待することが出来るようになりました。幻想、幻滅、喜びという、繰り返しのパターンは人生の一部分で、避けられないことです。ところが、マリッジ・エンカウンターの体験によって、幻滅の次には喜びが出てくることを信じることが出来るようになりました。最後にもう一度、聖パウロがまさにこの事を言いあてていることばを引用します。“現在の苦しみは私たちに現されるはずの栄光に比べると、取るに足りないと私は思います。”（ローマ 8:18）

人生の終着点の旅路に向かって、全て神様のご計画の中で生かされて、歩んでいる私なりの役割を果たせるよう祈りつつ。感謝と賛美のうちに。

＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊

海外(ハンガリー)Kalman and Vera

Dear FIRES Friends、
CMFやFIRESがもたらしてくれる霊的世界が我々にとってどんなに大切なものであるか、私たちが経験したことを、皆さんに分かち合いたいと思います。しかしながら同時に、私たちは人間としての限界や弱さにも、常に直面しています。現に今、婚約者のエンカウンターの原稿を書きながらも、「自分たちでさへ完璧になれないんならそんなに懸命になったり、人のために何かしようとしても仕方がないだろう。どうせ、そんなに信頼されやしないし、それでなくても問題はいろいろあるのだから・・・」という、書かせまいとする声がささやきかけています。そうした誘惑の声は、「CFMグループを始めたマリッジ・リ・エンカウンターのプログラムを作ったり企画したり、開かれるたびに霊的に祈りを持って、参加者を支援し続けている理由は何だっけ？もともと、私たちはクリスチャンホームに育ち、いろいろ問われることには、すでにちゃんとした答をいくつでも持っているじゃないか」と言います。でもそうではなく、エンカウンターで行われるように、順番にVivenciaを分かち合いたいのです。

Kalman:
私たち二人はすでに67歳、結婚して生涯の3分の1にもわたる年月をともに重ねてまいりま

した。ヴェラは6年間、母親として子育てに専念してきましたが、音楽家としてクラシックギターの教師としての経験から、再度、教師として教えていきたいと考え始めました。私はもともと経済学者で、いろいろな工業ビジネスに携わってきましたが、今は出来る限り公共業務に関わるようにしています。

Vera:
去年私たちは結婚10周年を祝いました。神様から元気な3人の息子、Bence(6歳)、Agoston（4歳）、Mate（2歳）そして娘Maria Veronika（1歳）が与えられました。みんなFIRESを体験しています。それは私のおなかでのこともありましたし、授乳中の1年2ヶ月の間など、少なくとも数回は体験しています。実際、エンカウンターに参加している時に誰もいなかったということはごくまれです。わたしたちは、その間、神が託されたにせよ、基本的には子供たちは神様のものなのだと思っていました。この深い心に触れるしるしは、子供たちが生まれるたびに、それがどこの場所であっても聖母の保護の下に置かれますようにと心からゆだねました。この子達がまだ私のおなかで５㎝ぐらいでしかないそのとき、私たちは聖母にこの子達を守ってくださるように、そして子供たちが皆、主が準備してくださる道を歩くように、聖母の御子が導いてくださるように祈りました。

Kalman:
CFMやFIRESプログラムで若者たちの霊的手助けをするとき、自分たち自身も霊的に満たされ、子供たちの世話に手抜きすることなく、どこまで出来るのかという限界を知るためには賢くなければなりません。手伝いが、時として我々の体力の限界を超えること、子供たちをかまってやれない辛さ、そうしたことも見極めなければなりません。私たちは、私たち大人が教会のお手伝いをすることを、子供たちが「何か教会のお手伝いとか福音という時は、両親が出かけてしまって私たちと一緒にいてくれることはないということなんだ」というふうにとってほしくはありません。そこで、子供たちも一緒に参加できる機会をつくったり、今やっていることは子供たちのためでもあるんだと感じてもらえるようにしたり一生懸命になりました。毎晩、家族でCFMやFIRESの次のプログラムのために祈ります。

私たちが忘れていると、すぐに長男がそのことを指摘します。この子はいつもこれらのことを心に留めているのです。また、家族としての活動のチャンスはチームトレーニングにもありました。こうした集いを子供たちも一緒に出来るように夕食時にもつようにしもしました。そして、二人で4時間から5時間かかるチームの分かち合いの前に、皆して子供部屋でともに祈ることにしました。真実、この祈りの間、私たちは心から子供たちが少なくとも今回だけでもおとなしくしていてくれるように、いたずらをしあわないように、参加した人たちにも迷惑をかけないようにと祈りました。

そして、きっと祈りのおかげでしょう、子供たちはいつもゲストのひざに座って大人しくしていてくれます。息子たちはこの集まりのことを何ヶ月も後まで何度も何度も思い出していました。昨年、他のご夫婦のところに婚約者のエンカウンターを開く用意を手伝いに、金曜日の午後に一緒に行きました。一緒に、その役を果たしに行くのがとっても誇らしかったのか息子たちはいたずらをすることさえ忘れているようでした。（その家の猫の印象は違ったかもしれませんが）

Vera:初めてのマリッジ・エンカウンターは1999年、そこでダナン神父様と何組かのCFMの夫婦にも初めてお目にかかりました。この人たちとは今もいい友達ですが、この、初めてのオリジナル・マリッジ・エンカウンターで私たちは互いの間にある特別な霊的絆が生まれたような感じを受け、毎年のように参加者として、またはチームとして実りあるエンカウンターを体験してきました。2002年、オリジナル・マリッジ・エンカウンターをCFMの

グループで開きました。このとき初めて私たちは聖霊がこのプログラムを通して本当に私たちの生活を変えてくれるのを体験しました。それは、その後エンカウンターに出席したカップルの意見や分かち合いを通して毎回体験することができました。2003年以来、私たちは婚約者のエンカウンターを担当しています。Domonkos神父に招かれてウクライナでも数回FIRESプログラムのお手伝いをしています。

Kalman:ブダペストの近くの小さな町Erd、そこに移り住んで、CFMの第３グループの活動を手伝い始めました。このグループは私たちがミサのあと教会の出口で出会った夫婦たちによって始められました。彼らは、互いに見知らぬ同士でしたが、心から主を求め、主に従って行きたいという信じがたいほどの深い願望というところで共通していました。そこで上記のオリジナル・マリッジ・エンカウンターをともにはじめ、これによって、私自身が深く変わって行くことができたと同時に、10年にもわたって癒されなかった内なる傷が癒されていました。

Vera:このErdのCFMは私たちの大きな支えです。はじめは、立ち上げるに当たって形だけでも、と顔を見せるつもりだけだったのに、結局最後まで彼らとともにいることになりました。このグループの一致は、集団での祈りや賛美から得られるもので、その祈りを通して、それぞれが開放される神の力を何度も体験してきました。この中で、ある夫婦は自分たちの抱えている問題、困難そして恐れまでも、誰をも恥じずに分かち合える機会を得ました。事前に話し合おうと決めていたことを話し合う時間がなくなることは珍しいことではありません。

目には見えなくても、祈りの力で支えている縁の下の力持ちは私たちの献身的な夫婦たちです。彼らは人目につかないところで働いてくれています。一見地味な部分なのですが、彼らなしにはどのエンカウンターのプログラムをすることも不可能でしょう。先週彼らへの手紙に、Menesiさんご夫婦とともにCFMとFIRESプログラムを度重ねて神様にささげながら、聖霊が導こうとしておられる方向を、主が私たちに示してくださるように祈っています、と書きました。心静かに注意深くみ旨を待っていると、この人たちに会える機会をつくりたい、彼らと話し合う時間をつくりたい、このような方法で、み国を築いていきたいという望みが私たちのうちに生まれてきました。ある人たちはお互いに知り合い、また、かつてのFIRESプログラムのチームメンバーとも互いに知り合えたらどんなにすばらしいだろうと話しました。なぜなら、婚約者のエンカウンターを企画していたどの夫婦たちも、どのチーム・カップルにも私たちは会う事はなく、誰とも知りあうことがなかったのです。この新しい思い付きをきちんとした形で取り入れる、今がその時ではないのか、と聖霊にささやかれたのは2006年春のことでした。そしてついに、2007年5月チーム・カップル全員が互いに知り合える日が企画されました。

私たちはこうしてCFMやFIRESの活動をお手伝いしていくことが自分たちに必要不可欠なことだと感じました。家庭以外のことにここまで携わることは世間一般の考え方からしたら、家庭に似つかわしくない姿ととられがちですが、もしずっと、CFMやFIRESをお手伝いしたり、若い夫婦たち、結婚している人たちを祈りで支えていたら、私たちの犯した大きな過ち（できれば、それが大きすぎないことを願いますが）にもかかわらず、神により近づき、神の元に立ち帰れるもっと大きなチャンスに出会えるのではないかと感じています。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

海外(ハンガリー)Gabor and TundeFeller

これはハンガリーの精神科医師と奥さん、Gabor（以下G.）とTunde(以下T.) Fellerご夫妻の

証です。非常に謙遜な方々で、御自分たちがハンガリーでのオリジナル・マリッジ・エンカウンターを結成したり、ホスト役をやったりしていることをめったに人に語ろうとはしませんが、事実、彼らこそ、この2-3年間、目覚しい成果をあげているハンガリーでのFIRESプログラムに心血注ぎ、祈りを込めてくれる人たちなのです。

私たちは2001年12月に開かれたオリジナル・マリッジ・エンカウンターに始めて出席しました。それまでも数回、声はかけられていたのですが、あらゆることを口実にして聖霊の招きを断り続けていました。というのも、これが本当に私たちにとっての好機になろうとは考えもしませんでしたし、家族はうまくいっているので、自分たちには必要ない、それに時間もない、と決め付けていました。しかし、声をかけ続けてくれた聖霊のおかげで、数回の後、招待に耳を傾けることができ、出席を決意させていただけたことに感謝しています。参加したオリジナル・マリッジ・エンカウンターの週末、私たちは真剣に自分たちの全生涯を、結婚生活を根底からあらためて考え直しました。それを皆さんに短く紹介したいと思います。

Tunde:当時、私はよく結婚式で言われたことを思い出しました。あなたたちはお互いの間に橋をかけていかなくてはなりませんよ、と。ところが、むしろ、夫と私自身の間に感じられる精神的離婚の兆候のほうが目立ってきました。3人の子供たちが生まれ、育児のほとんどがわたしの肩にかかるようになり、母親としての召命だけの生活が始まりました。夫G.は医師として仕事に満足を得られるように励んでいました。次第に2人の間の会話は少なく、たまに話す程度になっていきました。私たちの会話は子供たち中心で、子供たちについての喜び、問題などに限られてくるのを感じました。これはごく自然なことなのかもしれませんが、2人が互いの思いや願いを分かち合いをもっとしておく必要があったのです。2人の溝はどんどん広がっていきました。

Gabor:日常生活はますますつまらなくなっていきました。2人の会話は話題に乏しく、分かち合いは形ばかりでついには、信頼まで揺らいで来ました。子供がいなかったらきっと、だめになっていたでしょう。長女の学校の成績はがた落ち、息子はチック症候群の兆候を見せはじめ、次女はつめを噛むなど子供たちがそれぞれに戸惑いの色を見せていたにもかかわらず、私は私の技量にあまる仕事や、今までやりもしなかったものまで引き受けて、ますます仕事にのめりこんでいました。

仕事は完璧にこなさなくては済まないわたしの性分、それに過度の心配性はもとから持っている性質ですが、それが限度を超え、私はついに倒れてしまいました。模索が始まりそれが数年も続き、最後には入院せざるを得なくなりました。その時になってやっと、自分自身がなんとひどい生活をしてきたかに気付きました。思考は乱れ、目標は定かではなく、自尊心は崩れ、自分の働いていた精神科の病院の一患者となって人前で恥もかくようになりました。夫婦間の信頼も会話もなくなり、妻の助けも意味を成さなくなっていました。はじめは親切に、暖かく私がよくなるように介抱してくれていました妻も、だんだん態度が厳しくなってくるし、何もが私を回復に向かわせる手助けにはなりませんでした。無力感、そしてためらい。妻が最後に望みを置いたのは、神が、すべてを元のように戻してほしいと祈る妻の祈りに耳を傾けてくださることだけでした。

Tunde:私たちの大変な時期、私は心から深く神に心を向けることが出来るようになりました。わたしたちの町にあるCarmelite教会へ毎日かよい、St. Ritaに力を、忍耐をくださるように、私たちが今の生活に満足することなく、再び互いを思いやる生活に戻れるように、聖霊の助けによって一つの心、一つの思いに立ち戻れるようにして下さい、と祈りました。時はどんどん過ぎ、私は祈りが主に届かないのではないかと感じました。そんな時、義理

の妹が、いつかきっとこの辛い日々を思い返して喜びとなるような日が来る、それを信じなさいと言ってくれました。その時は彼女の言うことが信じがたかったのですが代わりに、祈り続ける強さをもらいました。そしてその時です、彼女からオリジナル・マリッジ・エンカウンターへの参加申込書を受け取ったのは。

Gabor: オリジナル・マリッジ・エンカウンター会場に着いた時、私たちはまだ疑いと不確かさで、なにも信用していませんでした。神父様によるオリエンテーションはまだ私の耳に残っています。そして、チーム・カップルによるVIVENCIAは私の心の中深くにうずもれていた未解決の問題を掘り起こしてくれたのです。私は妻と様々な問題を分かち合いました。もちろん、はじめは多少テレ気味でしたが、じきにどんどん自由に話せました。土曜日の晩の典礼は今まで鬱積したものをすべて吐き出し（忘れがたい経験でした）て、生まれ変わったようでした。日曜日には2人ともが自分たちの中に、聖霊の助けによって新たな何かが始まっているのを感じました。そしてついに、互いに向き合い共に祈りをささげることが出来るようになりました。

Tunde: エンカウンターの間に私たちは精神的に強められ、支えられ、自分たちの危機を乗り越え、前に書いた2人の間の架け橋をわたし始めることが出来るようになっていました。深い分かち合いのおかげで2人は互いにより親密になり、神とも深く関われるようになりました。わたしたちの生活は徐々に普通の生活に戻りましたが、一つそこに足されたのは、私たちがオリジナル・マリッジ・エンカウンターを通して与えられたものを他の人たちにも伝えていかなくてはならないという思いでした。なぜなら、人々はランプに火を灯さず、おおいで覆ってしまっていますが、やはり、ランプは高いところにおいたほうがいいし、そうすれば灯火は家中の誰をも明るく照らしてくれます（マタイ5:15）。その時から、私たちは喜んで主の証人となっています。そして、主は私たちの中に生きておらる、その主イエス・キリストの語りかけられる声を聞くために心も耳もオープンにしていようと努めています。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

海外(ハンガリー)ジョージ・フォルデヴァリ

ユダヤ人のある青年は、どういう巡り合わせかカトリックの女性と結婚し、思いがけずもクリスチャンファミリーの活動に出会い、偶然(?) 婚約者のエンカウンターに参加しました。その後は婚約者のエンカウンターのチームメンバーとして活躍するようになり、それにつれて教会への疑問や葛藤というものが少しずつ解決され、最後にはカトリックの洗礼を受けるまでになりました。果たして、ここに起こったこれら一連のことをすべて単なる偶然と呼んでかたづけてしまっていいのでしょうか？　以下は、カルボ神父に送られたこの男性からの手紙による、体験談です。

親愛なるカルボ神父様へ
以前からたびたび、私が洗礼を受けるまでのいきさつを書きしるしてきましたが、今回ようやく完成しました。神に感謝！私がユダヤ人であるという事実は、今ある私という人間の多くを物語っています。そのことは私の過去、私の世界観、とりわけキリスト教とのかかわりに深く影響してきたといえるでしょう。

私の家族は、第二次世界大戦の迫害のさ中、逃げ惑う中に神への信仰を失いました。そのため、私の両親はキリスト教から切り離された中で育ち、同じように私も妹も無信仰の中で育ちました。私たちを育てる過程で両親はいつも、世界というものを『自然の力が穏やかに調和のとれたもの』と教え、そしてもし神が存在するならばそれは、『私達のこの生き方を監視し、私達の死後に裁きをくだす方』と教えました。けれども、祖母からは別の概

念を教わりました。それは、特に一つの宗教に属しているわけではありませんでしたが、彼女は神を強く信じていたからです。

祖母はいつも言っていました。「不幸な出来事というのは、いつでも神様が私達に素晴らしい事を示すために準備されたことなのだよ。それによって、私たちの人生は大きく変えられるのだから！」この言葉はいつも私の心に深く刻まれていましたが、それを『人生の真実』として本当に理解したのは、私が信仰に目覚めた時でした。そのいきさつは、こうです。

大学の新入生キャンプで今の妻・アレクサンドリアと初めて出会った時、彼女は18歳、私は19歳でした。キャンプでそれぞれ気の合うグループが見つからなかった私達は、何となく2人で一緒にいるようになり、散歩をしながら人生やお互いの家族の事を話して、時を分かち合いました。キャンプから帰ってからこの友情は恋愛に発展し、交際は3年間続きました。この期間に、わたしの人格に大きな影響を及ぼすいくつかの出来事が起こりました。最も大きかったのは、大学2年の時に直面した『ガンによる母の死』でした。そのとき母は、まだ47歳という若さでした。父とはもうすでに離婚しており、その父ももう別の女性と再婚していたので、母がガンに冒されていて症状がそこまで進行していた事は知りませんでした。私は母の代わりに妹の面倒を見ながら、学校が終わるとパートをして、月々の父の送金の足しとして生活費を稼いでいました。もちろん後では、親戚たちや父も色々と支えてはくれましたが、人生でとても辛い時期でした。

3年半の交際のあと、アンドレアと私は結婚を考え始めました。そして、母が亡くなって一年後に結婚しました。結婚式が終わったあと私達は、「もし同じような人生の体験 ―苦しみや様々な出来事― を一緒に分かち合える仲間がいたら、どんなに素晴らしいだろう！」と話し合いました。そして、そういうグループを探し始めたのです。アンドレアが、その頃彼女の大学で宣伝していたALF主催による『夫婦関係のための講座』というものを聞いてきました。二人ともとても興味があったので、参加しながら、そこで友人が見つかることを願いました。残念ながら、その場では思っていたような出会いはありませんでした。けれどもその後、メネス夫妻（クリスティナとバラス）による『自分達の結婚の体験談』というものを聞く機会があり、その時に初めて『エンカウンター・プログラム』の事を知ったのです。講和のあと私達はメネス夫妻と話す機会があり、彼らは私達に『婚約者のためのエンカウンター』に参加したらどうか、と勧めてくれました。カトリック信者として育ったアンドレアは、是非参加したい！と言いましたが、それは私にとってはとても勇気のいることでした。なぜなら、私の育ってきた環境は彼女とはまるで違うものだったからであり、その上、宗教に関する知識もとても薄かったからです。その以前から、毎週日曜日毎に私たちは色々なカトリック教会を訪ねてはいましたが、やはり「もしそういうグループに参加したら私はきっと場違いに感じるだろう」と思いました。ミサに関して言えば、お説教で話される倫理観には興味深いものがありましたが、その他の事に関しては全く興味はありませんでした。それに反してアンドレアは、ミサ全体をとても素晴らしいものと感じていました。

私達はどちらも、このお互いの中の「違い」に関して何とかしなければならないと思っていました。なぜなら、それがお互いの意見の衝突のもと（＝特に将来子供ができた時、その信仰を養う上での）となっている事に気づいていたからです。それで、私は思い切ってこの婚約者のエンカウンター・プログラムに申し込むことにしました。まだ恐れと不安はありましたが、少なくとも、アンドレアのカトリックの信仰というものを知るのに良い機会であり、参加している中できっと抵抗もなくなっていくだろう、と思ったからです。

しかしまた、もう一つ障害となった大きな問題もありました。それは、私が子供の頃から

育ってきた環境と関連したものでした。それは、組織的宗教が過去の歴史において犯した数々の過ち－すなわち、聖職者達による権威の乱用や、その説教とはそぐわない不道徳な生活や言動といった事でした。それらのすべては彼らの際立った視野の狭さの産物であり、幼い頃からユダヤ教の環境の中にいた私の両親はそういった現実を目の当たりにしてきたので、私にもいつもこの人間性というものの歴史を客観視するように教えていました。彼らはよくこう言っていました。「一部の小さな組織が全体を支配するような宗教に関わってはいけない」と。ですから、私が何よりもまず初めにしなくてはいけなかった事は、カトリック教会に対して持ち続けていた「悪いイメージ」としての固定概念を取り払い、正しい見方を持つことでした。現代のカトリック教会は、それまでの歴史にあるような乱れた生活の中に浸っていた聖職者達の時代とはもう違うのだ、ということを認識しなければならなかったのです。この認識の転換の大きな支えになったのが、私がいつも家族みんなで聴いていた、前ローマ教皇ヨハネ・パウロII世の講和でした。この過程はすでにエンカウンター・プログラムに関わる前から始まっていましたが、やはり私の固定概念を切り替える上で一番大きな助けとなったのは、エンカウンターでの体験とそこで出会った人々でした。それによって私は初めて心が入れかえられ、カトリック教会の過去の歴史的過ちを赦すことができたのです。結婚して 3 年後に、私達は婚約者のエンカウンターに参加しました。ここでの体験―リーダーのカルモンとヴェラ夫妻やドモンコス神父、そしてチームの他の夫妻たちによる心の開いた分かち合いによって、私が今日のカトリック教会に対して抱いていたイメージはもう過去のようなものではなくなりました。

そしてまた神様は、私達夫婦を 2004 年 4 月の婚約者のエンカウンター・プログラムに招いてくださっただけではなく、「婚約者のエンカウンターでの体験は、一晩過ぎてまた単調な日常の生活に戻ればその魅力を忘れてしまうようなものでは決してない」、ということも教えて下さったのです。ヴェラとカルモン夫妻は私達に、「CFM メンバーのための地域での大きな集いがあるので、参加すればきっと今まで探していたような仲間が見つかるだろう」と言ってくれました。けれども実は、この集いでチームのリーダーを務めるはずだった夫妻の一人が病気になったためヴェラとカルモンは誰か代わりをさがしており、私達に「次の婚約者のエンカウンターのチームリーダーをしてほしい」と頼んできました。私達はとても驚きました。私はカトリックではないのに、どうして？

困惑した私たちは彼らに「返事をするまで少し時間がほしい」と言いました。その夜私達は、以前に婚約者のエンカウンターで行ったように、主に導きを願うために聖書の箇所を開きました。私達が開いた箇所は、マタイの 9:37『収穫は多いが働き手は少ない。だから、収穫のために働き手を送って下さるように、収穫の主に願いなさい』というところでした。このみ言葉による答えで私達の心は決まり、チームリーダーを引き受けることにしました。

私達はヴェラとカルモン夫妻に支えられて、喜びのうちに次の婚約者のエンカウンターのプログラムの準備をしました。そしてその次のプログラムは、私たちにとってより素晴らしい励みとなり、「自分達が今正しい場所にいる」と、はっきりわかったのです。その時から、私達は定期的に婚約者のエンカウンターにチームメンバーをして参加するようになり、そしてそのつど、神から大きな励ましを受けてきました。

前述の CFM 集会への参加と平行して、私達は自分たちの家の近くの CFM のグループを探し始めました。それは、婚約者のエンカウンター・プログラムでの得た体験を日常生活で生かしていくのにきっと助けになるだろうと思ったからです。けれども思うようなグループが見つからなかったので、私達は地域のグループの人たちの助けを借りて、自分たちのグループをスタートさせる事にしました。今、私達はこのグループで2週間ごとに集まっています。

また、私がキリスト者として人生を歩む上でもう一つ大切な段階となったのが、ダナン神父によって紹介されたセルフ・レトルノでの体験でした。これも、やはりまたヴェラとカルマン夫妻から招かれたものでした。彼らは私達に「これはさらに素晴らしい体験となることでしょう！」と言ってくれ、本当にその通りでした。ダナン神父の人間性、その週末に行われた様々なイベント、そして三位一体に関するすべてのトピックが「私と、父と子と聖霊との関わり」を、はっきり理解する助けとなりました。私はこの時、私にとって大切な事は何かを知ったのです。それは、神の子キリストは人となって私の罪のために苦しみ、それは今でも続いていること、そして主は今も私を『友』と呼び続けて下さっていることでした。もうこれ以上この大切な「真の友」を悲しませないために、私は、自分のできるすべての事をして罪から開放されたい！と心から願ったのです。

この時から、私の中に洗礼を受けたいという強い願いが生まれました。ダナン神父によるエンカウンター・プログラムの後にそうはっきり決心したのですが、問題はこの大切な日をいつ、そしてどこでするかという事でした。私達夫婦はトーコルというブダペストの隣の小さな近郊の町に住んでいるので、近くの教区の司祭にカトリックの信仰に関する本をお願いしました。けれども、やはり洗礼は私達の町の教会でではなく、エンカウンター・プログラムの時に受けたいと思いました。そこで私は、キリスト者の模範として最も大きな影響と賜物を受けたカルマンとヴェラ夫妻に、代父母となってくれるようお願いしました。彼らは喜んで引き受けて下さり、私達はこの善き日を2006年6月のエンカウンター最後の感謝のごミサの時にしよう、と決めました。その日はとても素晴らしい快晴で、グループすべての夫妻が出席してくれました。私はそこにいたすべての友人夫妻たちに助けられて、ここまで信仰を育むことができたことを感じ、とても嬉しく思いました。現在の私の霊的指導者であるドミニコ会のドモンコス神父が、洗礼式の司式をして下さいました。妻のアンドレアも、こうして私達が同じ信仰を分かち合えることになり、本当に喜びました。洗礼式のあと、カルマンが贈り物をしてくれました。それは、紅海の浜辺から拾ってきた石でした。私にとってこの石は、古いものと新しいものが一つのものとして共存する象徴であり、心から嬉しく思いました。この大切な贈り物は、私達の小さな家の祭壇に置かれ、いつもあの素晴らしい日のことを思い起こさせてくれます。

私達はいつも日々忙しく過ごし、時には間違いも冒(おか)しますが、妻やCFMの仲間と分かち合える信仰の力に助けられて、これからも皆でよりいっそう主のもとへと歩んでいけると信じています。
愛と尊敬をこめて

＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊

愛の息吹を送るマリッジ・エンカウンター　　阪生野教会 Sr. 諏訪部ゆり

私がマリッジ・エンカウンターを始めて知ったのは、高崎教会に来てからです。ちょうど、当時はヨゼフ神父様が主任司祭でカテキスタの高橋ユリ先生、鎌田先生、竹上さん、山田さんご夫妻がチーム・カップルをしておられました。教会内外、老若男女、結婚されているかたがた、これから結婚するかたがた、たくさんの方々が参加され家族ぐるみで受洗され、聖霊の息吹に満たされ生き生きした共同体でした。「教会は建物ではなく、キリストの体であり、キリストの愛に結ばれた精神的な共同体」「イエスとの出会い、イエスが自分の人生の福音になる」マリッジ・エンカウンターを通して、20年以上たった今、心に浮かんできたことを記したいと思います。

まず、他己紹介をしたり、自分を振り返り自己を知ったり、分かち合いがあったり、また

参加された方々のために祈ってくださった方々からのプレゼント（BANNER（ハート型の旗のようなもの?）をいただきました。そこにはカモメのジョナサンのことば“高く、もっと高く･･･”（はっきり覚えていませんが･･･）が印刷されてありました。知らない方々が祈ってくださっていること、またこのマリッジ・エンカウンターの集まりを企画、お手伝いする神父様、リーダーの方々の支えも忘れることは出来ません。家族、特に両親への感謝の気持ちで、両親にもエンカウンター参加を勧めました。両親は快く参加を受諾し、参加後もますます夫婦の契りを堅くし日々新たに、現在も父 89 歳、母 83 歳、仲良く元気にお互いを大切にしながら生活しております。

今の日本の社会では、1 時間に 4 人くらいの人々がどこかで自殺をしています。リストラ、いじめ、虐待、親子の断絶、離婚等、一人一人が孤独になったり、家族の支え、愛がなかったり殺伐とした社会になっています。わたしたちはこういった社会の中で私たちが福音になり、イエスの証人として喜びの種まき、ともに寄り添ってみんなの幸せを願うキリストとともに生きていく教会になりたい、と思います。私は現在、大阪生野教会におりますが、先日、ある教会のご夫婦が週末、連休のエンカウンターの紹介にこられ主日のミサの後、皆さんに参加を呼びかけておられました。私も一人でも多くの方が参加されますように、知人に声をかけてみました。愛の息吹を送るメッセンジャーとして小さな歩みですが･･･“あなたの息を送ってください。すべてがあらたになるように”

＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊

マリッジ・エンカウンターの恵み

山口奈美

私達夫婦がマリッジ・エンカウンターに初めて参加したのは 1975 年の春でした。今から 32 年前のことです。私は 3 番目の子を身ごもっていましたがダナン神父様、そしてチームの皆様の強い勧めも有り、主人の同意も得ることが出来、参加することができました。今、振り返るとこの時のマリッジ・エンカウンターとの「出会い」によって私達はそれぞれの自己と出会い、お互いを受け入れあい、神様を中心に一致した家族へ向けてスタートする事ができました。

当時、私達夫婦はまだ若く、特に妻である私はとても未成熟なものを抱えていました。私は 1944 年に生まれました。父は戦死し、母は私が 5 歳のときに病死しました。3 人兄姉の末っ子として祖父に育てられ、叔父夫婦と一緒の生活をしました。それは子供にとって厳しいものがありました。そんな中で成長した私はいつも心の中に不安を感じ、落ち着きが有りませんでした。幸い寛大な主人と出会い結婚する事ができました。幼いとき両親を失った私がずっと抱いていた夢は「普通の家族をもてたらどんなに幸せだろう」ということでした。結婚する事でその夢に一歩近づくことができた、と思いとても嬉しく思いました。やがて長男が生まれ、子育てをする中で両親に育てられなかった私は、子育てがよく解らず悩んでいました。

子供の資質や能力も考えないで勉強ばかり子供に押しつけていました。又、主人は日本経済の高度成長の真っ只中にあって、懸命に企業戦士として働いていました。子供とあまり接することも出来ず、家庭は妻である私の仕事と割り切り、仕事人間に徹していました。

そんな日々の生活のなかで、信者であり妻である私は「本当の幸せって何なのだろう？」と思いながら過ごしている自分がいました。そんな中でのマリッジ・エンカウンター参加でした。2 泊 3 日の中でいただいたマリッジ・エンカウンターの恵みは私達にとって計り知れないものがありました。特に私にとって嬉しかった事は、主人とオープンにゆっくり話

し合えたこと、又、それまで主人は未信者で、教会とはあまり関わりませんでしたが聖書の素晴らしさにマリッジ・エンカウンターの中でふれ、その後、聖書の勉強を教会でシスターと始めたことでした。教会の話も私達夫婦の共通の話題として話すことができるようになり、建設的な意見をしてくれる主人をとても嬉しく頼もしく感じるようになりました。

又、私は長男との関係で悩んでいましたが、マリッジ・エンカウンター参加のなかで、長男と私との関係を見つめる事で、どんなに私が至らない母親であったかに気が付くことができました。反省の涙の中で手紙を書き、心から長男に謝り和解の一歩を歩むことが出来ました。今、長男は結婚して二人の子供に恵まれ家族で遊びにきてくれます。

その後、マリッジ・リ・エンカウンターそしてマリッジ・エンカウンターにも参加する事が出来ました。主人はマリッジ・エンカウンター参加後、1992年に洗礼のお恵みをいただきました。又、次男は度々「SADE」に参加していましたが大学卒業後、自分の召命に気づき、コンペンツアル修道会に入会し2004年に司祭叙階のお恵みをいただきました。神に感謝です。歳月を重ねれば重ねるほど家族の大切さを痛感させられマリッジ・エンカウンターのお恵みを感じる今日この頃です。

マリッジ・エンカウンターに出会うことがなかったなら、真の自分と出会うこともなく家族の大切さをあまり認識せずに人生を過ごしてしまったかもしれません。あの時、マリッジ・エンカウンター参加を勧めてくださったダナン神父様に改めて心より感謝申し上げます。これからも一人でも多くの人がマリッジ・エンカウンターのお恵みに預かれるよう願い祈っています。私達の家族船はこれからも航海しながら悲喜こもごも色々なことに遭遇していくでしょうが、恐れることなく神様とともに家族の旅を続けていきたいと思っています。

2007年6月9日　聖母の土曜日

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

木内洋子(釧路)

私たち夫婦が初めてマリッジ・エンカウンターを体験したのは、昭和35年2月群馬の修道院でした。当時の主任司祭であったルカ神父様は、2-3度マリッジ・エンカウンターに参加する機会があったそうで、再び来るときは3組の夫婦を連れてくると約束なさったそうです。それから、神父様による私達へのマリッジ・エンカウンター参加の説得が続くのです。仕事に忙しい主人は、まったくその気はなく、断り続けました。しかし、その話の中でマリッジ・エンカウンターの開催地が草津温泉の近くであることがわかり、温泉好きの主人は何度も、そのために足を運ぶ神父様の誠意に触れ、群馬行きを承諾したのでした。そして、いよいよマリッジ・エンカウンター参加、プログラムが進むに連れて、私の中であせりの感情が芽生え始めました。遠く北海道より参加しているにもかかわらず、心の中に訴えるものが見出せないからでした。2日目の夜、それぞれの夫婦は、ロウソクを渡され、休むときまで十分に与えられた課題について話し合い、部屋を出るときも二人一緒に行動を共にするように伝えられていたのですが、主人は一人で部屋を出て行ったのです。トイレに行くのかと思っていたのですが、「オヤツ」の置いてある2階への階段を上って行ったそうです。修道院へ入ってから何かしら私たちを避けている風な神父様と階段の途中でバッタリと会ってしまったらしいのです。「木内さん、どうしたのですか？」と尋ねたときの主人の顔は真っ白だったそうです。

木内さんがマリッジ・エンカウンターに参加したら変わりますよ！と神父様に言われていて、「どんなことがあっても木内周治だと反発していた主人でしたが、「神父さん、俺は変わった！」と言ったそうです。その様子を見た神父さんはものすごく嬉しかったそうです。予定されている課題も終わりに近くなったころ、窓の外には大きなボタン雪が降ってきま

した。マリッジ・エンカウンターが終わったら草津温泉にいくことになっておりましたが、そのときの私たちの心は、講和によって、高められてきていましたので、温泉に行くことでせっかくの頂いた贈り物が湯煙とともに消えてしまいそうで、松本さんに草津温泉に行かなくてよい、と伝えたら、やはり松本さんも始めから、その様になるだろうと思っていたようで、主人の断りを喜んで受け入れ、近くの古びた温泉宿に泊まることに決めました。参加した私たちに3組の夫婦と神父様は1つの部屋に集まり手を硬く握り合って、これに参加できたことへの感謝の祈りを致しました。夢のようなエマオへの旅だったのです。その後は、釧路でのマリッジ・エンカウンターを実現したく再度、マリッジ・エンカウンターを体験しに群馬に足を運び、松本さんたちの力を借りて、釧路での独自のマリッジ・エンカウンターを実現することができました。その後、マリッジ・エンカウンター体験者が集まり、聖書による生活の分かち合いが、度々行われました。共同体には少しずつ力が漲り始めたようでした。

そのうち、教会の建物も老朽化して、新しい広い土地を求め建て替えなければならず、幾多の困難な問題もあったのですが、すべて、神父様をはじめ信者が心を一つにして祈り、新しい教会と、地下納骨堂も造られました。この様に、マリッジ・エンカウンターによって大きな影響が生まれ、生き生きとした共同体となったのです。しかし、現代社会は、キリスト者にとって、住みにくい社会ではありますが、神の望まれる生活に近づくために、マリッジ・エンカウンターの様なアクションが、今必要なのではないかと思うのです。

＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊

シャローム！

群馬高崎教会・山田信一、美也子

私たちは、1975年からいろいろなFIRESのプログラムに参加者として、また、チームとして数多く参加させていただき、神様からの大きなメッセージと多くの方々との出会いというすばらしいお恵みを頂き、心から感謝しております。その中で、今の私たちの日々の生活に生き続けている体験の一つですが、32年前始めて参加させていただいたマリッジ・エンカウンターで、見ず知らずの方から、「祈りのカード」をいただきました。私たちのために祈っていてくださる方がいることを知り、とても感激し、感謝いたしました。そして、祈りの大切さも自覚させていただきました。この体験から、その後のマリッジ・エンカウンターで、二人で心を合わせて他の人のために祈らせてもらうこと、マリッジ・エンカウンターでいただいた、「夫婦の祈り」をすること、また祈るための力をいただくために毎日のみ言葉を聴くことを誓約し今日まで続けてきました。32年前のマリッジ・エンカウンターでの、この体験は、その後の私たちの生活の中に行き続けています。

＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊

ある日、お寺の境内のベンチに若い女性が一人、悲しみに打ちひしがれて泣き崩れていました。そこに一人の婦人が通りかかり、「どうしたのですか？」と声をかけました。女性はその婦人に、今抱えている問題のいくつかを打ち明けました。話を聞き終わったあと、婦人は彼女に言いました。「SADE に参加してみてはどう？」クリスチャンでもなく、今まで神様のことなど考えたこともなかったその女性は、もちろんSADEのことを一度も聞いたこともありませんでした。けれども、結局彼女はこの後SADEに参加することになり、それがきっかけで教会に行き始め、最後は洗礼を受けることになったのでした。

また、この間に彼女は自分の姉妹たちもSADEの体験へと誘い、両親もマリッジ・エンカウンターに、そしてマリッジ・レトルノにも参加しました。こうして、家族全員がファミリー・エンカウンターを体験したのです。姉妹の一人は、母親と一緒にカトリックの洗礼

を受け、もう一人の姉妹はプロテスタントの教会で受洗しました。そして、カトリック信者になった姉妹は、その後在俗の共同体に所属しました。あの時、女の子のそばを通りかかってSADEに参加するようにすすめたあの女性は、一体誰だったのでしょうか？それが、彼女の守護の天使だったかどうか、私にはわかりません。けれども、これが『Synchronicity』を示すよい例であることは、確かです。ここで起こった出来事を、『神のみ業によるもの』という以外に他にどのように説明できるでしょうか？

＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊

聖クララ会修道院院長

観想生活を送りながら、生涯を神に捧げている聖クララ修道女会の院長はエンカウンターの伝えようとしていることがいかに真の福音のメッセージと重なるかを、喜びに満ちて分かち合ってくれました。ですから、皆さんにも役に立つでしょう。これは世界中で、まさに一番初めのシスターのためのエンカウンターからの分かち合いです。

私たち、群馬のクララ会修道会のシスター達は、私たちに向けての「シスターのためのエンカウンター」でダナン神父様の祝福を受けました。これは、神父様がシスターのために考え出してくださったまさに、出来立てほやほやの、初めてのエンカウンターでした。日常すべてから「離れた」3日間を過ごし、そして、すべてを再発見して「帰って」来ました。本当に、私たちのものの見方は新しくなっていました。新たに自分自身を知ること、互いと知り合うこと、そして神を知ることによって私たちの眼はきれいに洗われました。私個人としては神がシスターたちのためになされたすばらしい御業、そしてシスターたちが見せた主へ、また自分たちの召命への燃えたぎる忠誠心を目の当たりにしてなんとも幸せでした。ルカによる福音書の6:35、「何も当てにしないで貸してやりなさい。そうすればあなたの報いは大きい」。長年にわたる惜しみない「貸し」が神の私たちひとりひとりに与えられたこのような新しく深い贈り物によってすべて報いられた思いがしました。

エンカウンターで特に大事にされることの一つは、他の人との分かち合いです。神父様が道具としての動機づけやその気になれる雰囲気を作ってくださる。こうした自己の内省、社会との関り方の内省、自分たちがエンカウンターの間に受けた感じ、印象そして霊的分かち合いをもち、祈り、典礼そして歌などの体験から来る深い分かち合いが私たちの生き方を変え、確かなものに形作ってくれます。2日目にはすばらしい典礼がさらに高揚させてくれます。そこでは、イエス様がひとりひとりに各々の人を通して話しかけられるのです。なぜなら、私たちは皆、主の名の下に集っているのですから。主に在って、「みなの平和」。互いを阻(はば)んでいた壁は取り除かれ、主のうちに新たなる結びつきを体験します。エンカウンターの終わりは聖体拝領で、同時に皆、詩編によく詠われる「神に向かって喜び歌え」という意味をしっかりつかもうと、叫びながら、それはもう大騒ぎでした。指導してくださる神父様と一緒に、神父様に負けないように皆して、「シャローム!」「シャローム！」とお互いに叫びあいます。（チャペルの中でこんなに大声で叫んだのは初めてじゃないかしら）

毎週の分かち合いで、エンカウンターでいただいた実りが保たれていく様に、そして各々に渡された神のみ言葉によって、そのみ言葉との新たに個人的な係わりがあるようにと願いました。時間が足りないのと神父様がくださった課題への答えに熱心な分かち合いのために、結果たくさんの宿題をいただくことなってしまいました。そして、幾度も読み返され、どんな場合にでも相談することができ、神との会話の道具となった聖書はおのおのにとって、御父からの個人に宛てられた親展のラブレターとなりました。わたしたちは“Poor Clares”（貧しき）クララ修道女ですが、この体験は私たちの内なるものを豊かにしてくれました。こう

した形で霊感や慰めを与えられたことは私たちにとって特別な恵みです。主に望みを託し、神の国にたくさんの宝を蓄えたいと思います。聖フランシスコからクララ会のシスターたちへの戒め：形に過ぎない外面にこだわるな、霊との関係を持つ内面のほうがずっと大切だから。四方を壁に囲まれた暮らしの中に宝物を見つけた今、この言葉はより深い意味を持ち、実践するのによりたやすくなりました。主をたたえよ！

＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊

海外(ハンガリー)Balazs と Krisztina

Dear Fr Donnon、
先週末のレトルノは本当に恵み豊かなものでした。参加者の年齢はばらばら、SADE・レトルノというよりはセルフ・レトルノといったほうが当っているでしょう（写真を見てください。ただし、カメラを忘れ、携帯で撮ったので画像はよくありません）

この Vivencia、よく日本でのとき見かけたような面白いと思ったものを紹介します。ペーターという名の青年がレトルノに申し込んできたのは、開始前日でした。日曜の朝、聖書をあてずっぽうに開くその時、この青年が開いた箇所は、「イエスはペテロに、『私を愛しているか』、と問われた。『私の羊の世話をしなさい』(ヨハネ 21:15)」。深く感動したこの青年がいった言葉、「今朝、この祈りの時が始まる前に、１つだけ、このページだけはでませんように、と願っていたのに･･･」。後で、彼がこの時、司祭としての召命についていろいろに悩んでいたことを知りました。
皆さんの祈りに感謝。

親愛なるガブリエル神父様、ダナン神父様そして FIRES の皆さん、先週末で、100 人に近い人々がすでに２つ以上の FIRES プログラムに参加していることをご報告できるのはうれしい限りです。私たちはティボー神父様によるセルフ・エンカウンター（30 人以上参加）に、Kalman と Vera はドモンコス神父様による婚約者のエンカウンター（30 組以上の参加）に参加しました。参加者からの反響にプログラムがすべての人に大きな意味を持っていることを知りました。セルフ・エンカウンターの後で何人かから得た意見を記します。

…中年の未信者
私の加わっていた小さなグループの人たちが示してくれた受け入れ、そして愛情は私にとっては大きな意味深いものでした。手をつなぎながら互いに捧げる祈りは感動的でした。
…歳を召したご婦人
人間関係をここまで深く癒してくれる黙想会に今まで出会った事はありませんでした。
…20 代の青年
ミッション系の学校を卒業して数年が立っています。こうした中で、信仰に関連したプログラムで興味を感じ、なおかつ感動を覚えたのはこれが初めてです。
…30 代、無宗教の女性
こんなにすばらしい、愛しい多くの人たちと会えたのは初めてです。土曜日の晩の典礼では今までに味わったことのない暖かさ、平和を体験しました。たぶん、ここから人生を始めなくては･･･、と感じつつ。
…歳を召したご婦人
カトリックのシスターの経営する学校に行っていました。自分を知ろうとして今までに様々なことをしてきました。68 にもなって、誰かが新たに何かを教えてくれるなんて思ってもいませんでした。
…別の未信者の方
やっと何を目指すべきかが解った。次のセルフ・エンカウンターにも絶対に参加する。

…若い女性
土曜日の晩の典礼で精神的癒しをもらいました。仲が悪かった、今は亡き祖母と和解し直します。
…後で送られてきた女性よりの手紙
この週末は特別のものでした。今までの生涯に経験してきた何物にも比べがたいものでした。その週はいつもと全然違っていました。なんと言ったらいいのかむずかしいのですが、とにかく違っていました。私の中の何かが変わったのです。何か、より色彩豊かな装いをしているような、朝の景色も幸せに見える、それがセルフ・エンカウンターのプログラムの間中続きました。それをずっと身にまとっていたいと思いました。私たちのグループでの体験もすばらしいものでした。私たちは互いにオープンでした。そして、感情が高揚し互いに離れてはいけない、離れられないという感動を受けました。そこで、私たちは連絡を取り合い定期的に会う約束をしました。一方、互いの霊的向上を今日の方法で支えあうことも始めました。自分が本当に求めているものは何かまだわかりませんが、私は戸棚の奥にしまってあった聖書を見つけ新約を読み始めました。ゆっくり、でもしっかりと、最後まで通して読んでいこうと思います。日曜日のゴミサにも出ようと思います。

* * * * * * * * * * * * * * * * *

サビーネの **vivencia** 、2007 年 6 月ローダにて
1999 年 4 月 27 日の夢をお話します。それはローダでの SADE を計画している夢･･･その夢をとてもうれしく思いました。自分自身にとって SADE はこの上もなく大事なものだったし、その感動を是非とも他のひとにも分かち合いたいと思っていましたから。涙が真珠に変わります！

この夢を見た翌日の 28 日、私は祖父の 85 歳になる誕生日を実家で家族そろって祝っていました。そこへ突然ドアのベル。父がドアを開けてみると･･･日本からのウルバン神父様がそこに立っておられたのです。感激でした。ウルバン神父様が我が家を訪れて下さったことなど、かつてありませんでしたし、私たちの家がどこにあるのかだって正確にはご存じなかったでしょうに、誰もこんなことが起ころうとは期待もしていませんでした。もちろん、今日が家族にとっての大事なお祝いだということさえご存知ありません。この神父様こそが SADE を日本からドイツへ伝えて下さった方です。そして、神父様にお目にかかった途端、そうだ、昨日の夢がきっとかなう！と思いました。翌 29 日、私は神に願いを聞き入れて下さる様にと、短い手紙を書きました。私は今もこの時の小さい紙切れをベッド脇の机にしまってあります。

もしだれかが 1 人で夢を見たら･･･

同じ年の 9 月、私はローダからニコール、レナそしてモニという 3 人の少女を Eschwege で Heribert 神父様が行われた SADE に招きました。SADE の土曜日の晩のこと、ニコールが SADE をローダで開いたらどう、と問いかけてきたのには驚かされました。

ふたりで一緒に同じ夢を見たとしたら･･･

2000 年 4 月、父の 60 歳の誕生日の日、ローダに、はじめて SADE が開かれました。そして、引き続き 6 回の SADE。SADE はローダでの私の仕事の霊的土台となりました。参加者もチームもどんどん増えました。FIRES が彼らの心に焼きつき、他の人とも分かち合いたいと願いました。ローダでの 7 回目の SADE は 2007 年 4 月の 27 日から 29 日、まさに私が夢見た日からちょうど 8 年目に当ります。

もしたくさんの人と一緒に同じ夢を見たとしたら･･･

ローダで計 7 回もの SADE、この 7 回目の SADE を最後に、もう次の人たちに任せること

にしました。SADE のチームは FIRES を新しいやり方で広げていくことに決めました。そうです、私たちは皆、新しい命を信じているのです。そして皆して、それを夢み、歌いました。

一人だけで夢を見れば、それは唯の夢。
大勢の人と一緒に同じ夢を見れば、それは新しい現実への始まり。
ともに夢を見続けましょう。

そして、2006 年 5 月 30 日、ガブリエル神父からのことば、「親愛なる虹の架け橋、サビーネ、主の夢を見続けて！」

ローダに炎を灯して下さった主に感謝。霊がそうであるように、この炎がずっと燃え続けていきますように!

＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊

海外(ドイツ)Sabine

SADE 参加者の証し
参加した子供たち、だれもが非常に深く実りある体験をしていました。私は SADE の間にたくさんの子供たちと話しましたが、彼らはとてもオープンでした。

...Moni and Stefan
モニとステファンは SADE の間に神様を探そうと決めていました。
...Barbara
バーバラはお父さんの命に関わる傷が癒えるように、霊的指導者に助けを求めることを決めました。
... Verena
ヴェレーナはお母さんからの手紙を手に、その悦びに泣き続けていました。そして、チームメンバーになりたいと思っています。
...Katharina
キャサリンはうれしくて SADE の間中、ニコニコしていました。
...Fabian
ファビアンはお母さんの死後迎えた義理のお母さんとうまくやっていかれる方法を考えようと決めました。
「家族の中での理解」という段階の時、食事の係りをしていたある少年が突然、私たちのグループのところに座りだし、ベンハード神父様の分かち合いの言葉に耳を傾けていました。私はこの少年が父親との間に様々な問題を抱えていることを知っていました。「理解」ということについて聞いているだけの段階でしたが、彼は熱心に聞き入っていました。この段階で神父は神父様自身の父親や、他の女の子が話していた彼女の父親のことについて分かち合っていました。この子が感動に心を震わせている様子が見て取れました。　神に感謝です。

＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊

海外(香港)

Family Workshop、この集まりは非常に有意義でした。私にとってとても役に立ったので翌日の聖書勉強会でさっそく友人に伝えました。そして、次回の集まりにぜひ参加するように勧めました。

帰宅後、家族で今日のことを話し合いました。子供たちもそこで親についてのこととか兄弟げんかについてなどを包み隠さず話せる機会が与えられたことをとても喜んでいました。私たち大人にとっても、それぞれの家族が、お互い自分たちの家族のメンバー一人一人と思いを心から知り合えたのは大きなことでした。わたしたち家族が気づかなかったことを

伝えてもらえたのもありがたいことでした。

たまには家族同士あって、忙しい日常を離れ、こうした豊かな方法で時を過ごすのもいいものです。誰にとっても、互いに正直になれるこうした機会は必要です。

私たちは地元でもワークショップを開きたいと考えました。Shek O は景色のいいところですが度々行くところではないので、一緒に休暇的気分も合わせて得られる場所です。よい計画と同時にたくさんの協力のおかげで食べ物もおいしく頂くことができ、感謝です。タイミングもちょうどよく、祝祭日が週の半ばにあったので期間としても日帰りですみました。

メッセージ：愛は人を変えてしまう力を持つ（朝のテーマ）、家族の中での和解そして、神との和解（午後のテーマ）。また、神父様たちの神へ、そして神の民への愛の深さについて。ダナン神父様、神父様のお話はイエス様がわたしたちのためにどのように道具となって亡くなられたか、神がいかに私たちを愛してくださっているかということを、献身と確信そしていうまでもなくユーモアに満ちた話し振りで終始一貫していました。ウルス神父様の献身も一日中、私たちと一緒にいてくださるということだけを考えても明らかです。
ぜひ、あとに続いていかなければ。

＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊

Fr. Wurth 香港より

ダナン神父様、
香港に来て、私たちのためにファミリー・エンカウンターをしてくださったことに、改めてお礼を申し上げます。それは楽しく、意義深いものでした。特に質問、そしてそれへの答え、また、それを家族の中で分かち合うきっかけとして下さっているのはとてもいい案だと思います。みんなを素直にさせるのがとてもうまいとも思いました。家族でもつ祈りの時もまた、すべての人が平等になれていると感じられ、とてもすばらしいと思いました。

ダナン神父様がここでして下さったことに対する評価に応えてくださってありがとうございました。ビビアン・リーの評価を読んで納得しました。

私は、プログラムが終わって得られた結果や皆さんから頂いたコメントからすべてを判断しました。ファミリー・エンカウンターだけを見てもダナン神父様の努力が、いかに正しかったかが証明されています。私が話しかけた参加者の何組かも、家族のためにとても役立ったと言っていました。私にしてみればその言葉で十分です。私たちの家族を高めるためになることだったら何でもすばらしいことです。私の時間と体力のもつ限り、信者の方たちのイベントにはどれも協力し、参加していきたいと思います。では、神父様のご活躍を願いながら、最後に、私たち共同体を作り上げるための神父様の先頭だったご指導、努力に感謝いたします。

＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊

香港より

ワークショップは私も家族にとっても説得力のある体験でした。「説得力のある」というのは、私がかつて聞いたこともないようなやり方で子供たちに祈ることを教えてくださったことです。彼らが見せた霊的なものは考えもしなかったもので、神がくださった贈り物に私もデニスもただ喜びに満たされました。私は聖霊に彼らを満たしてくださるように祈っていましたが、それが遂に、ここでかなえられました!!!

対話についての話し合いは中でも役に立つもので、私たちそれぞれが、何とお互い違う見

方を持っているんだろうということにも気付かせてくれました。それによって、このせわしない香港の生活スタイルの中では「対話すること」が「一緒にいること」ことより、より一層大切なのだということを自覚させられました。

メッセージの伝えようとすることは明白で、お互いの対話は神との対話と同等に必要不可欠だということです。なぜ神が、家族を一番大事なものとして造られたのかを知るために、どの家族も、このワークショップに参加すべきだと思います。本当に、目を開かれるような体験、そして祝福された時でした。ずっと続きますように！

＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊

何年か前から、この病院のある地方（名古屋）に住んでいてマリッジ・エンカウンターに参加したご夫婦は、私が毎年名古屋へSADEの準備のために行くたびに、友人たちを自宅に招き、ともに食事と分かち合いの夕べを過ごしていました。ある夫婦がその集会に招かれましたが、集会の後で、帰りに私を宿泊先の病院に車で送ってくれました. そのとき私は、その夫婦にお子さんはいらっしゃいますか、とたずねました。

その夫婦には二人のお嬢さんがいて、ひとりは中学２年生、もうひとりは中学３年生ということでした。私は、３週間後の週末にSADEがあることを伝え、その子たちも参加しませんかと誘いました。夫婦は、SADEは娘たちにとってきっと良い体験になるに違いないと考え、娘達にもそう話しましたが、娘たちはさまざまな理由で参加したくないといって参加を嫌がりました。しかしとうとう両親の熱意が通じ、SADEの当日、両親は東京まで車で娘たちを連れてきました。

帰りの車の中で、５時間の間ずっと、娘二人は、生き生きと大喜びでSADE での体験を両親に話し、そして両親にも、マリッジ・エンカウンターに出るように求めたのでした。そのご夫婦はマリッジ・エンカウンターに参加しました。その結果、その家族によって、マリッジ・エンカウンターとFIRES が名古屋にもたらされ、マリッジ・エンカウンター、マリッジ・レトルノ、マリッジ・リ・エンカウンター、SADE、SADE・レトルノ、ファミリー・エンカウンター、司祭のためのエンカウンター、セルフ・エンカウンター、それに小教区での何度もの黙想会が行われました。そのSADE の体験をとおして、ひとつの小教区の青年たちが、きわめて強く結びついた共同体となり、信仰は、彼らの生活の焦点となりました。

この二人の娘たちは、たぶんSADE とSADE・レトルノ参加の世界記録保持者であり、20回以上参加しています。彼女らは婚約者のエンカウンターに参加し、ひとりはすでに結婚しています。

また、その共同体の中のひとりの若い女性は、私たちの催した１日の黙想会に、いつも母親を誘っていました。私は彼女に会うたびに、母親は洗礼を受けたかとたずねていました。彼女は笑って、ただ、まだですと答えていました。しかしある時、彼女は帰宅して、私がそう言ったということを母親に伝えました。そうすると、母親が、洗礼のために勉強を始めたいと言い出し、彼女を驚かせました。その母親は洗礼を受けました。

名古屋　大谷

私達家族が、ダナン神父様と、そしてエンカウンターのプログラムと出会ったのは、1995年のことでした。当時、神父様は聖霊看護学校の１年生のためにSADEを、3年生のためにセルフ・エンカウンターをなさっていました。その一環として、毎年12月に名古屋においでになるご予定があり、その際に、平針教会の方のお宅で、以前に群馬などでマリッジ・エンカウンターに参加なさった方々を中心とした一晩の小さな集いをして下さっていまし

た。その年に、私達もその集いに誘って下さり参加しました。それまでも平針教会の信者さんで、マリッジ・エンカウンターに参加したご夫婦の方々から、マリッジ・エンカウンターは素晴らしいものだということを何度もうかがっていました。

神父様も紹介して下さっていますが、その集いでは、持ち寄りのお食事の後、神父様のお話と小さな分かち合いがありました。車で行っていた私達は、その日の帰りに、神父様を宿泊先の聖霊病院までお送りすることになりました。その車の中で、年末に中高生のためのSADE があるとうかがい、神父様が「SADEはいいものだよ」とおっしゃいました。その言葉の響きに、これは絶対に行かせるべきだと言う強い確信のようなものを持ち、子ども達にもぜひ参加させたいと思いました。

ただその時、下の子は中2でしたが上の子は中3で、高校受験の直前の年末でしたので、今の時期には無理ではないかとも思いました。子ども達も、SADE がどういうものかもわからないし、「何それ？」「何でそんなものにいかなくちゃいけないの？」と言い、特に上の娘は「一番大変なこんな時期になんで？」とかなりの抵抗を示しました。でも私達は、子どもはどんどん成長していくのだから、参加させるなら一刻も早くに参加させたいと思いました。そこで、いやがる二人をなんとか説得して、ほとんど引っ張るようにして車に乗せ、SADE の開かれる東京の潮見教会に連れていきました。

3日目に迎えにいってみると、子どもたちは喜びにあふれていて、その顔を見た途端、私達の3日間の心配はふきとびました。いつまでもその場を離れたがらなくて、今度は帰りの車に乗せるのが大変でした。その日の名古屋までの帰り道、寝不足で疲れているはずなのに、車の中で3日間のことをしゃべり通しでした。その時の子ども達の、いきいきとした様子、はずんだ声、目の輝きは、今も忘れられません。幼稚園の時に洗礼を受けた二人が、もう一度、神様に出会ったのだと思います。

そして「パパとママも夫婦のためのエンカウンターに絶対参加しなくちゃだめ」と言いました。それもまた時期が2ヶ月後、上の子の受験直前の2月でしたので、常識的に考えれば、まず不可能だと思いました。そもそも、それまで、子どもだけを残して二人とも家を空けたことがありませんでした。けれども、「私達は大丈夫だからどうしてもいってきて！」という娘たちの言葉に背中を押されるように、マリッジ・エンカウンターが開催される群馬県の太田のファミリーハウスに行くことにしました。

行ってみるとやはりそれは私達にとっても、素晴らしい体験でした。私達はそれまでも良く話し合う夫婦でしたし、仲もよかったです。ですからマリッジ・エンカウンターによって何か大きな問題を乗り越えたということではなかったのですが、なによりも私達が得たことは、お互いが良く理解し合っていて、二人が考えていたことが同じであるという大きな確認ができたということです。そして、確かに二人は夫婦としてうまくいっていましたが、はたして信者同士の夫婦として、神とともに歩んでいただろうか、それを意識的に深く認識して、努力して歩んでいただろうかということを考えさせられたことが大きな実りでした。また、今の状態が完全なのではなく、夫婦として家族としてまだまだ成長する可能性があるということに、気づいていないことが問題だったと気づきました。

もしあの時ダナン神父様に出会っていなかったら、エンカウンターに出会っていなかったら、私達家族は今どんなだっただろうと、時々考えることがあります。それまでも、私達は幸せな家族でした。これ以上の幸せは望んではいけないのではないかと思っていたほどでした。でも、まるで、目の前にあったけど見えなかったもう一枚のカーテンが、さーっ

と開けられ、別の世界が開けたように感じています。そこには求めれば求めるほど見つかる深い喜び、幸せがありました。

そしてこの素晴らしさを、一組でも多くのご夫婦に知って頂きたいと強く思うようになり、ダナン神父様にお願いして、名古屋でも1996年から、マリッジ・エンカウンター、マリッジ・レトルノ、マリッジ・リ・エンカウンター、セルフ・エンカウンター、SADE、SADE・レトルノ、司祭のためのエンカウンター、ファミリー・エンカウンターなどを、年に一つか二つ、開催して頂いてきました。そこにさまざまな形でかかわり、そのたびにあらたな自分に出会い、自分を見つめ直すチャンスとなりましたことを、神様に感謝しています。

すべてのエンカウンターでの体験一つひとつに、自分でも毎回驚いてしまうほどの、毎回新たな発見や驚きがあり、ここには書ききれません。ですから、私達家族全員で一緒に味わうことのできたファミリー・エンカウンターのことを書こうと思います。

1998 年と 2002 年の夏、名古屋でファミリー・エンカウンターを開きました。そのどちらの時にも、とてもほんとうに深い一致を味わうことができました。準備の段階から家族が一つになっていました。それぞれに違う作業をしていても、でも一緒の時間を、一つのことのために、同じ目的のために心をひとつにして集中していました。その準備の時間がすでに私達にとって、ファミリー・エンカウンターでした。そして終わった後は、家族ごと、神様の大きな愛にすっぽりと包まれている暖かさを実感として感じ、そして家族の中心に強い磁石が存在しているかのように一時も離れていたくなくて、でもたとえ離れていてもいつも一緒にいるようで、とても不思議な気持ちでした。秋になり学校や仕事も始まり、また日常のあわただしさに戻っていったのですが、それでもその感覚はなくなることはありませんでした。子ども達が独立・結婚した今も、その気持にかわりはありません。離れていても、あの時のファミリー・エンカウンターがそのまま続いているように感じます。

もうひとつ、私の和解の体験を書きたいと思います。私の両親は私が5歳の時に離婚しましたが、かえってそのことのために、「自分の家族は幸せにする！」という固い決意を持つことができましたから、私にとって、結果的には、決して不幸なできごとではなかったと思っています。でも、育っている間には、心のどこかで父や母に、「なぜ、こんな思いをさせたのか？」と憤りを感じていたことも、否めません。自分の悲しみにふたをして、幸せだったんだと思いこもうとしていた部分もあったように思います。でも、エンカウンターに出会い、自分の傷をはっきりと見つめたとき、父や母との和解が自分には必要だと気づきました。父とは、別れた後、9歳の時に一度、そして結婚の前一年間に何度か会っただけでした。私は結婚して長崎に行ったため、孫を見せることができないまま、父は 1984 年に亡くなりました。

エンカウンターの中に癒しの典礼という時間があります。3回目のマリッジ・エンカウンターの時でした。その癒しの典礼の中で、ある瞬間、はっきりとその傷から解放されたことを実感しました。小さい時によくされていたように、父に抱きしめられ、あふれるような暖かな愛を感じ、心の中にあった固まりが溶けて流れていったように感じました。涙があふれてしかたがありませんでした。その時、私は父を心から許すことができたと感じました。また、それよりあとのことでしたが、ある年の私の誕生日に母が話してくれた話も、私にとってはとても大きなことでした。私は自宅で生まれたのですが、私が生まれた日、私が朝9時に生まれてから夜中まで、父はトイレに行く以外、片時も私のそばを離れなかったという話でした。たとえ、その後離れて暮らしたとしても、自分が生まれた日に、そこまで祝福され、愛されたという事実が、どれほど人生を輝かせるか…。私は父と母の子として、この世に生まれてきて、よかったと、心から思いました。

こうして、父を完全に許すことができたのには、もうひとつ理由がありました。私の結婚が決まったとき、母が父に連絡をとってくれて、結婚前の一年間、父と何度もデートをし、食事をいっしょにしました。その中で、父が私をどれほど愛し、そして一緒にいない間もどれほど愛し続けてくれていたかを、心から感じることができたことです。ですから、愛を感じ合う、通じ合いの大切さも同時に確信しています。

私が、否定的な体験を完全に肯定的なものとすることができたのは、神様がいろいろな人に出会わせ、そしていろいろな形で私に道を示して下さった結果だったと思います。しかし中でもこのエンカウンターの体験は、私にとって決定的でした。悲しい思いをする子どもは、もう一人も見たくありません。そのために、私はこのエンカウンターを世界中の人に体験してほしいと願っています。でもその思いがなかなか伝わらない、そのもどかしさも同時に感じています。けれども、悲しい思いをした子どもの一人として、そして、その傷を癒された一人として、この努力だけは続けて行こうと決心しています。

私達家族の始まりから振り返ると、私達夫婦は二人とも神奈川育ちなのですが、結婚してすぐに長崎に住みました。長崎に行った当時は知り合いは一人もいなくて、さびしくて毎日のように泣いていた時期もありました。でも子どもが生まれ、親しい友達もでき、私と子ども達が洗礼も受けた長崎の土地を離れて名古屋に行くことになった時、今度はそれが悲しくて泣きました。私の好きだった「主よ、変えられないものを受け容れる心の静けさと、変えられるものを変える勇気と、その両者を見分ける英知を我にあたえたまえ」という祈りの言葉が、この時ほど支えになったことはありませんでした。また、その時相談した子ども達の学校の校長先生でいらした神父様が、「だいじょうぶ、どこにいっても。大切なのは家族なのだから。あなた方が失うものは何もありませんよ。失うのはあなた方ではなく、私達の方です」と暖かく、そして力強く言って下さり、その言葉に勇気づけられて、名古屋にやってきました。その名古屋で大学から与えられた官舎がたまたま平針教会のすぐ近くにあり、そこに通うようになってたくさんの友達に恵まれました。そして夫も、洗礼を受けました。そしてその友達の中に、マリッジ・エンカウンターに参加した多くのご夫婦がいたことで、ダナン神父様に出会い、エンカウンターに携わるようになったわけです。振り返ってみれば、あんなに来たくなかった名古屋に来たために、ダナン神父様との出会いが待っていて、そして、よりいっそうの家族の一致を得ることができたのです。

こうして、人間の目から見たら願いと違ったり理不尽に思えたりすることでも、必ず意味があるのだと言うことも知ることができました。ですから、いつも神様のみ旨を感じ、識別し、「はい」と言って実行できるよう、耳を澄ませていたいと思っています。

ほとんどの楽器は中が空洞です。しかし、その一つ一つの楽器が奏でる音も、その楽器が集まって小編成で奏でる音も、そして大きなオーケストラとなって奏でる壮大なシンフォニーも、すべてが美しいです。神様の道具（インストルメント）として、一人ひとりが、家族が、美しい音を奏で、そしてカルボ神父様とダナン神父様の指揮の許に、世界の、全国のFIRESファミリーが、シンフォニーを奏でることができたら、幸せな家族が増え、世界も平和になっていくことと信じています。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

（函館）佐藤聡・椰子

魂をゆさぶられて21年
マリッジ・エンカウンターの恵みとその働き
私たち夫婦は1986年の春、函館山の麓の施設で行われた第2回マリッジ・エンカウンターに初めて参加しました。今は天国にいらっしゃる橋本神父様の熱心なお誘いに、深く感謝

しております。

私の転職、二女の愛が交通事故、5歳で突然天国へ、長女の反抗期、事務所開業、母の死…今思うと、私たち夫婦、家族にとって激動期でありました。

しかし、このマリッジ・エンカウンターほど私たち夫婦、家族に大きな影響を及ぼしたものはありませんでした。たった三日間をとおして考えさせられたことは余りにも多くて、でも、実に衝撃的な、しかし、魂をゆさぶられるような感動的な体験で、私たちの生活の価値観、人生感をほとんど180度変えることになりました。 あれから21年経った今でも、昨日のような気がするほど新鮮で、豊かで、ずっとその恵みの中で生かされています。

私たちがマリッジ・エンカウンターを体験したことで受けた最も大きな恵みは、イエスの現存からくる「愛と一致」、「赦しと慰め」を感じ、味わうことが出来たことです。この私たちにとっての一つの Vivencia は夫婦として、家族としての生活に深い影響を及ぼし、私たち夫婦が新しい決心をする機会ともなりました。

二女の愛は、今から29年前の5歳の時に、交通事故で突然天国へ行ってしまいました。19歳の未成年者が運転するタンクローリー車に巻き込まれ、ほぼ即死状態で病院に運ばれました。霊安室での私の不思議な行動に神さまの慈しみと愛を、そこにいた皆が目の当たりにしたのです。加害者の年老いた両親が霊安室の片隅に体を小さくして私たちに赦しを乞う姿がありました。霊安室に下げられた娘と悲しみの対面後、神さまは今、一番小さな人のところへ私を派遣されました。そして、加害者の両親の肩を抱きながら、「私はあなたたちを決して恨みません。お互いに辛いですけど、がんばって生きていきましょう。安心してください」、そう言って、慰め、癒しているイエス様の姿がありました。後日談として、側にいた人の話しによると、その時の老両親の表情は、恐れから救いに変わっていったことが、はっきりとわかったそうです。

後になって妻と分かち合いました。あの時、どうしても私たち二人が加害者を恨んだり、憎んだりする気持ちになれず、実はずっと不思議に思っていたことを。こんなに悲劇的で絶望的なことを起こした人間を、心から赦せるのはいったいどうしてなのだろうか？

その答えは、マリッジ・エンカウンターの参加によって得られました、いや、気づかされたのです。神さま、イエスさまが秘跡を通して私たちの中にとどまっていらっしゃること、そして、イエスさまの愛がずっと私たちの中に生きていてくださったことに気が付いたときから、「そうだったのか。そのイエスさまから力をいただいているのだ、そうなんだ！」と二人とも実感することが出来たのです。そして、どれはど「愛と一致」の間に深いつながりがあるということに気づかされました。21年前のマリッジ・エンカウンターの最終日、婚姻の秘跡の段階で、そのことを神さまから知らされたのです。「あなたたちが一番辛くて倒れそうになったとき、私はすぐ近くにいたよ！」愛の事故から6年間も「その宝物」に気づかなかったのです。『あなたたちの中に（「あなたたちの中に生きておられる程」の意）、あなたがたの知らないお方がおられる』（ヨハネ 1:26）この洗者ヨハネの言葉が響きます。

「聖霊の働き」によって気づき、どうしようもなく、ただ止めどもなく流した涙と共に、私たちは神さまによって変えられたのだと思います。それは、新しい生き方への始まりであったのです。ここから、本当の信仰生活がスタートしたのだと確信しています。

マリッジ・エンカウンターの恵みは、娘の SADE への参加・マリッジ・エンカウンター、R.E.での子ども達との和解・FIRES の参加とチーム奉仕へと続いております。主に信頼する

生き方として、マリッジ・エンカウンターの精神を私たち夫婦の中により深め、「夫婦の一致」「家族の一致」をめざしたいと心から願うようになり、また、この「神のご計画」を伝えるメッセンジャーとして、より多くの夫婦、家族と係わっていくという価値観で生活する決心を二人でしました。

神さまは、そんな私たちの願いを恵みとして与え続けてくださっています。

○　教会における結婚講座と結婚式の担当（夫婦）・結婚後のかかわり
○　教会における求道者に対する入信講座担当
○　教会における信者の信仰を深める講座担当
○　教会典礼ミサにおける神父の手伝い（聖体奉仕者）
○　仕事上での夫婦・家族の悩み相談

＊最近の小さな Vivencia

若い夫婦が離婚の相談に来ました。出来ちゃった婚で出産し、親同士のケンカにお金が絡み、離婚することになったので手続きしたいとのこと。その後、奥さんが子どもを連れて再び事務所に相談に来ました。迷っている、子どもがふびんだと。ヨチヨチ歩きの子どもが、私の側から離れないでニコニコしていました。はじめは気にも留めず奥さんの話を聞いていましたが、どうしても私の側から離れようとしないでいるので、可愛い子だと思いながら、私はお母さんに話しました。親の家を出て二人でやり直すように、人生の繰り返しの話し、あきらめなければ、信じられない喜びが待っている可能性があること、こんなにも無邪気で可愛いこの子の為にも。そして、親が子どもに与える最大のプレゼントの話しもしました。奥さんは泣きながら私の話を聞いていました。その子は、相変わらず私の側でニコニコしており、だんだん私は、その子の中にイエス様を感じるようになりました。(私のお母さんに、もっと話してください) 私も、イエスの現存を確信していました (主よ、どうか私の体、手、口を使ってあなたがこの若いお母さんにお話下さい)。

若いお母さんも決心したように、「主人とよく話し合い、やり直してみます。この子のためにも。」そう言って帰って行ったのですが、その子は帰り際、又振り向いて笑顔でお母さんと手をつないで行きました。仕事にはならなかったのですが、私は信じています。あの子の中にたしかにイエスさまがいたこと。そのイエスさまに癒され、励まされて若い夫婦は危機を乗り越えたことを。なぜなら、私がイエスの現存を実体験しているからです。私は若いお母さんと子どもの後ろ姿を見ながら、(神さまありがとう) と、言いました。

○　家庭裁判所における家事調停委員としての、夫婦、家族への係わり
○　FIRES のチーム奉仕

これらのすべてが、マリッジ・エンカウンターからの恵みであることに疑う余地はありませんし、神さまのみ計らいと導きに他なりません。神さまのみ旨が私たちに判るようになり、改めて強く認識するようになりました。あなたたちが、FIRES を通して体験した夫婦、家族として、癒しと恵みをより多くの人に伝えてはしい、これからも、ますます夫婦、家族のために働いてほしいと。

神に感謝！　FIRES に感謝！カルボ神父とダナン神父に感謝！

もし人の過ちを赦すことができるなら、人のために祈ることができるなら、
それは父の子らの恵みを受けているしるしなのです。(マタイ 6:14)

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

「御手の導き」

藤井由紀子

1999 年、婚姻の秘跡をいただいて 8 年半…当時の私たちは、特別に大きな問題を抱えていた訳でもなく、何でも話し合う仲良い夫婦だという自負がありました。霊的に渇いていた

私たちは、次の 3 月の連休をどこかの黙想会に参加しようと思っていましたが、様々な理由から二つの会に断られ、最後に小浜さんから度々お誘いのあった「マリッジ・エンカウンターに出てみようかしら？」と少しどきどきした気持ちで指導司祭のダナン神父様に連絡すると「喜んでお待ちしています」と明るい声で応えて下さいました。

分かち合いを苦にしていた恥ずかしがり屋の夫を、私は聖霊様と共に説得し、99 年 3 月の群馬県太田での初めてマリッジ・エンカウンターに参加しました。

太田のチームの方々は、私たちをまるで家庭に呼んでくださったように気を遣い暖かく迎え入れて下さいました。そして頂いた各々の十字架の苦しみも喜びも話して下さり参加者の心の中に響いていきました。ダナン神父様の導きのことばは、力が有り、渇いたスポンジが水を吸い込むように私の心を潤していきました。私が求めていた夫婦のあり方を初めて人から伺えたようで、『ああ…仲が良いだけではなく、神様を中心にしてもっと私たち夫婦は一つになっていいんだ。もっと成長していけるんだ』という確信をしっかり頂きました。何と言う喜びでしょう！

過去に夫が忙しい時代に、ある神父様やシスターに私たち夫婦の現状を嘆くと「あなたが我慢して夫を支えていく事が大切だよ」と諭される事がありました。納得できなかった私は、心の中で『このままの夫婦でいたら本当に淋しいし一緒の生活も出来ない、ゆっくり話もできないで何で夫婦と言えるのだろう…』と叫んでいました。

1 日目からチームのお話に感動し、他の参加者と涙を流していた私とは逆に疲れた顔をし、どこか冷めている夫が気になっていました。このまま 3 日間が終わってしまうようにも見えました。夫も自分だけがとり残された気持ちがあった様でした。

結婚前に 4 年、結婚後 7 年間、夫は 0 歳から 20 歳代までの青少年が対象の児童福祉施設で児童指導員として勤めていました。その施設は、80 年の歴史があり保育園・学童保育・児童養護施設・20 歳前後の青少年の為の自立援助ホームもありました。夫の夢であった福祉施設での仕事でした。私も夫の自己実現の為にずっと応援し続けたい…と思っていたはずでしたが、夫の連続の泊りと帰宅しても深夜、そして朝早く出て、再び泊り…という厳しい現実の日々が続きました。私は体調もすぐれずアトピー性皮膚炎もひどくなり、一日中家で淋しい思いをしていました。実家もすぐ近くにあったのですが、『夫がいない』という事がものすごくこたえました。

夫によく泣いては、職場を辞めてほしいと訴えましたが、夫は責任感の強さから結婚後も 7 年間勤務を続けました。そしてついに夫は考えの近い職員・ボランティア数名でその施設での限界や問題点を感じ、施設を去る事になりました。それから小金井でカトリックの高齢者施設に転職することが出来て、ちょうど一年が過ぎようとしていたころ、マリッジ・エンカウンターに参加することが出来たのです。

何も変わらないと思われた夫の心の中に聖霊様の風が吹いて下さいました。それは、マリッジ・エンカウンターの 3 日目で、まさにチームの方々とダナン神父様が心を一つにして参加者の為に尊いロザリオの祈りをして下さっている時でした。夫の話によると、夫はその時、ファミリーハウスの裏山を一人で登り、祈る場所を見つけ吹きすさぶ風の中で『神様、私だけこの 3 日間、真の恵みを感じていません。どうかどうか、私にあなたが与えたい恵みをお与えください。お願いします』とひれ伏して心から祈ったそうです。太田の山々の風はいっそう強く聖霊様の嵐のようだったそうです。

夫は祈りの後、山から下りてきました。そしてエンカウンターの最終日の夫婦が互いに按手し許し合ういやしの中で、直ぐに変化が現れました。私が許しの按手をすると、夫が泣き始めたのです。それから夫は、泣きながら初めて私にいままで傷つけてきた自分を許してほしいと言ってきました。普段泣くことのない又、自分の非を認めない夫が涙ながらに許しを願いました。これは私にとり大変な驚きでした！

夫の回心と夫婦の和解の恵みをいただいたのです。夫は回心によって今までの全てのことを神様に許して頂いたことを感じたそうです。身も心もすっかり軽くなったと言っていました。また和解の恵みも大きいもので、私たちはやっと真の夫婦になれたようでした。大げさに言えば、あらためて結婚式を迎えたような晴れやかな気持ちになれました。夫婦としての力がどんどん湧いてきました。それは現在でも続いています。そして、私たち夫婦は『神において一致した夫婦』を目指して、力を合わせるようになりました。

99 年から 2002 年までマリッジ・エンカウンターのチームとして使って頂き、参加者の皆様とともに分かち合えたことが、何よりも幸せでした。恵みはさらに続き、2002 年 12 月 3 日、私たちの大好きな聖ザビエル様の帰天 450 周年のまさにその日に、待望の男の子が誕生しました。

夫も私もそれぞれが結婚前、神父様やシスターに『召し出しを感じませんか。聖職者の道を考えてみませんか？』と言われましたが二人ともそちらの道ではなくて、“結婚し家庭を持つ道だ”と言う事をはっきり感じていました。今、やはりマリッジ・エンカウンターを通して私たちは、結婚した夫婦が一致したら、どれほど素晴らしいかをお伝えするために神様に呼んで頂いたのだと思えて仕方ありません。キリスト者が１％しかいないというこの母国にあって、二人が出会いカトリックの夫婦として婚姻の秘跡を頂いたこと、またマリッジ・エンカウンターの精神を頂いたことはどんなに大きな神様からの愛と恵みでしょうか。私たちは、弱いながらも聖霊様に助けを頂きながら毎日の生活の中で真の一致を目指し、輝いていきたいと思っています。

ここまで父と子と聖霊によって導いて下さったダナン神父様、カルボ神父様、そして祈りと行ないによって支えて下さった皆様、家族に感謝の気持ちでいっぱいです。ありがとうございました。シャローム！

＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊

FIRES に出会って　　今井裕子

初めてマリッジ・エンカウンターに参加したのは今から 19 年前の 3 月、長女が 6 歳・長男が 4 歳・次男がもうすぐ 3 歳になる頃でした。結婚 8 年目だったと思います。主人は結婚して 10 ケ月で転職しましたので、中途採用のハンデを克服するために仕事にのめりこんでいった時期です。私はこのマリッジ・エンカウンターに出合う 2 年前に入園した娘が、入園してすぐに登園拒否をおこし、幼稚園から市の教育相談を紹介されて通っていました。娘に合うと思ったモンテッソーリの子供の家に転園させてもうすぐ卒園という頃に、また登園拒否。途方にくれていました。その頃、主人は自分の仕事のことで精一杯で、毎日の子育ての大変さを愚痴ると嫌な顔をしました。その顔を見たくないから話さないという悪循環の日々。2 人とも親元から遠く離れていましたので、気兼ねなく頼れる人がいません。社宅に住んでいましたが、娘は人見知りが激しくて預けられません。私はストレスをためていました。夜の 8 時を回ると－もう限界でした。ちょっとしたことにも過敏に反応して、一気に怒りはじめます。こんなことを言ってはいけないとわかっているのに止まりません。パウロの言葉そのものです。「望む善は行わず、望まない悪を行っている」（ローマ 7:19）。

心を大切に育てようと心がけていたつもりがまるで反対のことをしてしまいます。

そんなぎりぎりの状態の時に妹夫婦からマリッジ・エンカウンターを紹介されました。「参加したいのですが子どもを預かってくれる人がいませんか」とフランシスカン・チャペルセンターに電話をしました。ダナン神父様は「大丈夫！預かってくれる人を見つけるから心配ないよ」と初めて電話する私に優しくおっしゃいました。驚きました。そして当日、井出さんはご馳走まで用意して私たち家族を待っていてくださり、3人の小さい子ども達を預かってくださいました。4年後には大村さんにも2回預かっていただき、マリッジ・エンカウンターに参加しました。思い出すと感謝で一杯です。

その最初に参加したマリッジ・エンカウンターで主人は変わりました。和解のミサで「悪かった。今までのことを赦してください」と涙をぽろぽろこぼしました。それまで私がひとりでおこることはあっても、けんかをすることもなく、けんかになりそうになるといなくなってしまう人が、面と向き合って涙を流しあやまっているのですから驚きでした。私の心に温かいものがながれました。

主人はそれから、話を聞く努力をしてくれました。もともと子煩悩な人でしたので休日は子どもたちを連れ出してくれました。でもこれでめでたしめでたしとはいきませんでした。娘は小・中学校ほとんど学校に行きませんでした。にもかかわらず9年間私はずっと学校に行かせたいと思っていました。口では「行かなくていいよ」と言いながら心は違いますから、度々言い争いになりました。その度にお互いの本心がわかりましたので無駄ではなかったと思いますが、ものすごくエネルギーを使いました。娘のことを神様にゆだねようと思う気持と、将来のことを考えると心配で学校に行って欲しいという二つの気持でゆれていたので、娘は休んでいる気がしなかったと言ったことがあります。神様にゆだねきれず、かえって遠回りをしてしまったかも知れません。

その間も、マリッジ・エンカウンター、R·E、マリッジ・レトルノ、ファミリー・エンカウンター、FIRES の全国大会に参加しました。婚約者のエンカウンターのチームもさせて頂きました。エンカウンターに参加しながら私の問題が見えてきました。私は22歳でクリスチャンになり、24歳で結婚しました。振り返ると、自分を含め、主人と子ども達をありのままに受け入れるのではなく、理想にあてはめようとするのだけれど、理想にはほど遠い自分たちの姿に何か満たされない気持をもっていたように思います。自己との出合いがまるで出来ていませんでした。自分を受け入れることは言葉でいうほど簡単ではありませんでした。娘が小さい時に私の未熟さやストレスから娘を言葉や態度で傷つけてしまったことを認めてからは、自分を責める日々が続きました。なんてひどいことをしてしまったのだろう。あんなに小さくて天使のようだった娘がかわいそうでした。世の中でこれほどひどい人はいないと思いました。自分には何も良いところはなく、自分が考えてする事はろくなことがない。悔いているにもかかわらず、イライラして感情的になって怒るくり返し。子育てにも自信がなくみじめで仕方ありませんでした。

ある時、いつものように自分の誤りを悔いていると、十字架のイエス様がうかんできて「イエス様の十字架のお陰で私は赦されている」と心で感じることが出来ました。その時のありがたさを忘れることが出来ません。それからは過去を悔やむことではなく、娘のために何をしてあげたら良いだろうと前向きに考えられるようになりました。ファミリー・エンカウンターでも同じようなことを学びました。理想の家族があるとしても、まず今の自分たち家族をそのまま受け入れて、そこから理想とする方向に向かうことです。毎日の小さな積み重ねあるのみです！

全国大会に妹夫婦に誘われて参加したのは10年程前でしょうか。その時に出会った鶴原さんに声をかけて頂いて、婚約者のエンカウンターのチームを8年程させて頂きました。年2回の講話作りによって夫婦の最終目標である「一致」の大切さを再認識することが出来ました。ダナン神父様の情熱にふれるたびに感動しました。またチームの皆さん、食事作りのスタッフの皆さんとの年2回の再会、そして参加される婚約者の皆さんの素直で真摯な姿に力を頂きました。エンカウンターで誓約をしても長続きしない弱くて貧しい私たち夫婦が、今まで希望を失わずに歩み続けてこられたのはFIRESとの出会いなくして考えられません。そしてFIRESに誘ってくれた妹夫婦の存在はかけがえのないものです。

20年近く前に出会わせて頂いたダナン神父様はその当時と変わらず、イエス様の優しさと温かさと美しさを与えてくださいます。岡先生には神様にすべてをゆだねて、感謝して喜んで生きる幸せを教えて頂いています。尊敬する先輩ご夫婦には夫婦が一致に向かう素晴らしさを、FIRES を通して知り合えた皆さんには弱さを分かち合うオープンさと信仰を教えて頂いています。

結婚28年目、子ども達は社会人になりました。時間を見つけて5人そろって食事をしたり出かけたりすることが何より楽しみです。まだまだいろいろなことがあると思いますが、み言葉に耳を傾け、祈りながら、神様に全てをゆだねて感謝して生きていきたいと思います。主人と分かち合い、ぶつかり合い、和解しながら一致を目指して歩んでいきたいと思います。そして、身近な家族から出会う人たちにFIRESで学んだコンフィアンザを与えることができたら素晴らしいと思います。感謝を込めて。

＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊

金沢祥子・恵子・父

恵子へ
今どんな気持ちでいるのでしょう？
もしかしたら、何か心の中に詰まっているものがあるのではないかしら。心をオープンにして、みんなの前で分かち合うことは、とても苦しくていやなことです。誰もがそうです。私もチームをしたとき、どれほど泣きたくてたまらなくなったことか。講和の最中でさえ、自分の話がいやでいやで、たまらなくなり、悔しさと惨めさでいっぱいでした。もう逃げ出してしまいたい！！とさえ思いました。

でもそれは、浅はかな考えであることに気づきました。気づいたのはもう12のすべての講和が終わった後でしたが･･･でもそのことに気づけてよかったと思っています。私は、この講和は自分の力に任せっきりで、うまくいかないことを悔やんでいましたが、そうではないでしょう。本当は･･･本当は、自分の準備されたものを自分なりに一生懸命、心をオープンにして話そうと努めればよいのです。後は神にゆだねるという気持ちで神を信頼して思った通りやることです。結果的にうまくいったの、だめだったのというのはおかしいのではないかしら･･･そう思います。これはみんな一人一人の心の中の問題です。成功も失敗もありません。自分に自信を持ってがんばってください。

恵子はこの夏、多くの恵みを受けたことでしょう。私にはそう思えます。だからそれを日常生活に生かせるのが当然だ、という人が多いのです。

でも、それは難しいことだと思います。心の中が急に変わることはないですよね。お父さんも、お母さんも心のやさしい人だと私は思っています。だから、日ごろの行動にも思いやりから来るやさしさがあります。私はそんな両親にいつも甘え、すき放題にやってきたと思います。中学生のエンカウンターのとき、「お父さんとお母さんのためにも祈ってく

ださい」と手紙をもらったとき、今まで自分のことばかりで親のことを考えることがなかった私に、恥ずかしさを覚えたと同時に、それ以上にお父さん、お母さんに悪かったという気持ちで胸がいっぱいになりました。その後すぐに聖堂に行って祈りました。自分の今までの行いの許しも願いました。SADE は、いつも私に何か大きな今までに自分になかったものを与えてくれます。だから、自分の力だけに頼らず、神様を信じて、自信を持ってがんばってください。お祈りしています。体を壊さないように気をつけて･･･　祥子（姉）

恵子は後でシスターになりました。

キリストに賛美！

今年の夏休みは本当にご苦労様。しかし、あなたが、3 つの SADE のチームを引き受けたことが、私にはうれしいのです。なぜなら、そこに、あなたが自分をより充実させ、神様に近づこうとしているけなげな姿を見ることができるからです。しかもあなたが、喜んで引き受けたのではないだけにいっそう私にはすばらしいものに思われます。神様の恵みは、それを受けるとき、はじめから快いものとして感じられることは本当に少ないというより、ほとんどないといってもいいように思うのです。むしろ、それはひとつの苦しみとして不安として与えられたかのように感じられるものなのです。そして、それが、不安であり、苦しみであるにもかかわらず、受け入れて、神様への愛の証をすることができたとき、初めてそれが、神様からのすばらしい恵みであったことに気づくことができるのです。今年の夏のあなたは、本当に神様の恵みのうちにあるように思われて、私のうちには、父としての喜びがあふれています。私は今「父として」と書いたけれど、正直に言って、この言葉を使うのは勇気のいることです。なぜなら、私は本当にあなたの父といえるかどうか、「父」という言葉は、私にはふさわしくない、私は本当に「父」であることができるかということにいつも苦しんでいるからです。おそらく、このような私であることが、神様からいただいた最も大きな恵みなのでしょう。今、あなたがそうであるように、私もまた、私たちの家族のチームとしての恵みのうちにいるのでしょう。そして、チームの役目を無事果たすためには、たくさんの祈りがどうしてお必要なのですから、お互いに深い祈りをたくさん捧げ合いましょう。祈ってください。できれば聖堂で･･･。　父

恵子へ

1981 年 7 月 29 日

おとうさんへ

お手紙をありがとう、とってもうれしかったです。チームを 3 回もしなければならないことが、なぜかうれしく思えるようになりました。神様がその役目をこんな私に与えてくださったのだと思うと、神様への感謝でいっぱいの気持ちです。今、どうにか、一つ目のチームをやり終えることができました。成功したとか、失敗したとかはありません。私の、少なくとも半分は出して、精一杯にこの役を努めたつもりです。でもまだ、2 つのエンカウンターが残っています。協力してください。今度こそ、私のすべてを出せるようにしたいのです。

見栄っ張りで消極的な私だけれど、今度のエンカウンターには、積極的に参加したいのです。でも、そのために勉強がおろそかになるときには私に注意してください。ここで受けた恵みをきっと勉強にも生かすことができるだろうとは思っていますけれど。エンカウンターに出るごとに感謝、感謝ですけれど、今回は特に感謝したいのです。私は本当に幸せ者です。そして、勇気のなかった私をここまで引っ張り出してくれてありがとう、私はそういうお父さんを持ったことを本当にうれしく思います。ありがとう！　恵子

＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊

聖霊奉侍布教修道女会の経営する聖霊病院付属看護専門学校で、16 年連続で 1 年生には

SADE を、3 年生にはセルフ・エンカウンターを導く機会に恵まれました。閉校がなければ両プログラムは今でも続いていたでしょう。最初の SADE が行われるまでは、学生たちは高原で一泊し、キャンプファイアーを囲んで歌い踊り、楽しく過ごしていました。しかし、一人のシスターが、娯楽やゲームもいいけれど具体的な成果が何も生まれない、学生たちの日常生活と将来に向けてより影響を与える体験ができないものか、と案じていました。折も折り、このシスターは SADE を体験し、これこそ答だと感じました。一泊旅行の代わりに 3 日間どこにも出かけないで講話を聞くプログラムに参加する、と聞かされた学生たちからは、もちろん歓迎されませんでした。初日に会場に現れた学生たちの顔にはその不満がありありと見てとれました。でも、最終日には？第二の聖霊降臨体験でした！

学校に戻った 1 年生たちのあまりに興奮ぶりに、キャンプファイアーしか体験していない上級の 2 年生と 3 年生たちは、自分たちも SADE を体験したいと言い出しました。そして、彼女たちのためにも SADE が開かれました。それ以降、一泊旅行が廃止されても誰も不平を言う者はいませんでした。さらに、学生たちは続けてセルフ・エンカウンターも体験し、以後 3 年生の年間予定に組み込まれることになったのです。この体験をきっかけに多くの学生が洗礼を受けました。毎年卒業時には、学生生活で最高の思い出として多くの学生が SADE とセルフ・エンカウンターを挙げるようになりました。この看護学校が閉校になったのは本当に残念です。

＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊

横浜・中村さんについて
マリッジ・エンカウンターを体験した男性の多くが、月に一度集まってキリスト教についての講話を聞き、互いに分かち合いができないだろうかと私に尋ねてきました。最終的には彼らの大多数は洗礼を受けました。そのうちの一人は世界記録保持者かもしれません。彼は妻と一緒に、マリッジ・エンカウンター、マリッジ・リ・エンカウンター、マリッジ・レトルノ、ファミリー・エンカウンターをそれぞれ 2 回ずつ体験し、私たちが開催した一日黙想会にも一つ残らず参加したのですから。この夫婦がマリッジ・エンカウンターに参加するきっかけとなったのは、娘が不登校となり、不登校児を支援している女性がマリッジ・エンカウンターについて話したことでした。娘は SADE に参加し、問題を乗り越え、今は結婚して子供もいます。父親である男性は、率先してこの男性グループの責任者となり、月に一度の日程を決めたり、皆が参加できるように励ましたりしました。しかし、これほど様々なエンカウンターのプログラムに従事しながら、自分はあくまでも仏教徒であり、妻と同じようにカトリック信者にはならない、とたびたび強調していました。彼は一人のカトリック司祭と懇意にしていました。この司祭は、仏教の祈り方である座禅の原理を活用してカトリック信者の霊性を深める黙想会を指導し、講話を行っている著名な司祭でした。

この司祭の黙想会にこの男性はすべて参加していました。ある日突然、集まりの後、司祭は男性に洗礼を受けるように勧めました。男性が同意すると、司祭は言いました。「じゃあ、今すぐしましょう！」帰宅した彼は妻に黙っていました。しばらくたってから、この司祭が男性の自宅を訪れることになりました。男性は運転できなかったので、妻が司祭を車で迎えにいきました。自宅に向かう途中、妻は何気なしに、「主人が祝福を受けたらどんなにすばらしいことでしょう」と司祭に言いました。すると司祭は言いました。「もう受けていますよ！」説明を求められた司祭は、彼が洗礼を受けたいきさつを妻に話しました。妻は夫の洗礼を熱望し、長い間祈ってきたのに、夫がすぐに教えてくれなかったことに腹を立てました。それはともかく、この男性は、まだ仏教徒だった頃、エンカウンターの体験は夫婦だけに限定されるべきではない、このエンカウンターのメッセージから恩恵を受けるのはあらゆる立場の人々だ、とたびたび私に言っていました。私の返事はいつも同じで、「確

かにそのとおり、でも今以上のことをするには忙しすぎて時間がない」でした。しかし、その後も彼がしつこく願うので、私はとうとう折れて、彼が人を集めるのを手伝ってくれるなら何かやってみよう、と言いました。

その集まりは本当に実り多い体験となったので、私はカルボ神父に進言しました。様々な立場の人々、すなわち、クリスチャン、クリスチャンではない人々、既婚者、独身者、離婚経験者、男性、女性、青年、老人、司祭、修道者など、が体験できたらどんなにすばらしいだろう、と。カルボ神父の同意によって、セルフ・エンカウンターが誕生しました。現在、このプログラムは米国、日本、フィリピン、イタリア、ハンガリー、スロバキア、ドイツ、香港、スリランカで実施されています。カルボ神父はいつでも主張しています、彼が始めたプログラムの真の推進力はすべて人びと自身から来ており、彼らが自分たちの成長に役立つ何かを求めていると表明したおかげだ、と。セルフ・エンカウンターの場合は、最初にこれを希望したのは当時、仏教徒だった男性でした。そんなことを誰が予想したでしょうか？

＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊

私が主任司祭をしていた小教区のカトリック幼稚園の関係で、ある女性がカトリック信者になりました。彼女の夫は、大多数の日本人男性がそうであるように、宗教には無関心でした。マリッジ・エンカウンターについて何度も耳にするようになった彼女は、参加を希望するようになりました。が、この話題を持ち出すたびに、夫はそっけなく拒否しました。二人の間には女の子が生まれたのは、彼女が参加したかったマリッジ・エンカウンターの数週間前のことでした。もちろん、これのせいもあって夫は参加に反対していたのですが、彼女が泣いて参加したいと訴えるので、とうとう彼も折れました。しかし、参加前夜、赤ちゃんが熱を出してしまいます。夫は父親としてもちろん赤ちゃんのことが心配でしたが、一方ではこれでマリッジ・エンカウンターに行かなくてすむと内心ほっとしました。

妻は、小教区で働いているシスターたちの中でとりわけ彼女が信頼している一人に電話をかけました。するとそのシスターは、「必ずマリッジ・エンカウンターに参加できるようになるから大丈夫」と彼女に伝えました。それからシスターは私の所にやってきて、「さあ、神父様、これから彼らの家に行って、赤ちゃんのために祈りましょう」といいました。それで、その夜私は赤ちゃんに病者の塗油の秘跡を授けたのです。翌朝、赤ちゃんの熱はすっかり下がり、元気そのものでした。それで、約束は約束、夫婦は参加しました。しかし、その前に、二人は2時間運転して赤ちゃんを妻の姉夫婦に預けなければなりませんでした。姉夫婦は二人ともカトリック信者でしたが、義理の兄は、病み上がりの新生児を 2 時間も車に乗せてきて 3 日間も預けっぱなしにするとは、と二人を非難しました。若い父親は全く同感でした。しかし、マリッジ・エンカウンターが終わって赤ちゃんを迎えにいった父親は、赤ちゃんの面倒を見てくれたこの姉夫婦もマリッジ・エンカウンターに参加すべきだと勧めました。

姉夫婦は参加し、チーム・カップルとして奉仕してくれることになりました。しかし、開催日の前に夫は東京近郊の町から北海道に転勤になりました。転勤先の小教区では、一組の夫婦がマリッジ・エンカウンターを体験しており、この祝福を他の夫婦にも伝えたいと望んでいましたが一緒に手伝ってくれる仲間がいませんでした。ある日曜日の朝、教会の駐車場で、この夫婦はある車に貼ってあるマリッジ・エンカウンターのステッカーに気づきました。それで、車の持ち主を見つけ、マリッジ・エンカウンターの体験を分かち合い、その地区でマリッジ・エンカウンターを始める具体的な計画を立てたのです。

＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊

Sr.武井について

聖心会の経営する高校の校長を務めていたあるシスターは、もう一人のシスターとマリッジ・エンカウンターに参加しました。それは、上記の夫婦がお世話をしていたマリッジ・エンカウンターでした。このマリッジ・エンカウンターを通して彼女は SADE について知り、先ほどの夫婦が所属する小教区の青年向けに計画された SADE に参加することにしました。彼女は長年教育に携わっており、生きる意味と人生における神の役割の意義を学生が理解できるような体験はないかと絶えず模索していました。SADE を発見した彼女は、これこそ自分が捜していたものだと確信しました。学校のシスターも教員も大多数が懸念する中、彼女は SADE を 1 年生の年間行事の一環として実施することにしました。そして、少しずつ、生徒と一緒にシスターや教員が体験できるように計画を立てました。次第に、皆が全面的に協力してくれるようになりました。SADE はその高校でもう 20 年間年間行事として実施され、毎年 80 人の生徒が参加しています。ですから、現在に至るまでその高校だけで 1600 人の生徒が SADE を体験し、広範囲に及ぶすばらしい成果を挙げています。

先ほど述べた若い父親に戻りましょう。彼は洗礼の準備を始め、夫婦はチーム・カップルになり、多くのマリッジ・エンカウンターで奉仕してきました。二人は夫婦で毎日祈り、聖書が彼らの祈りの中心でした。み言葉を通して神は重要な決断をする二人を導いてくれると信じていたからです。彼の会社が中国にある工場の社長に単身赴任で就任してほしいと打診してきたとき、これはとくに意味深いものとなりました。昇給も約束されていましたが、二人が問題としていたのは、これが主のお望みかどうか、でした。彼らは祈り、導きを求め、何よりもまず聖書の言葉から主の助言を求めました。彼らが識別の上受けた答は、「行くな！」でした。それで、彼は中国行きを断りました。

次に、彼はフィリピンの工場の社長に就任するように打診されました。今度は家族も同行してよいという条件でした。二人はまた祈りによって識別し、聖書の言葉を通して主の助言を求め、主が再び「行くな！」と言っておられると判断しました。夫はまた断りましたが、これは日本では前代見聞の話でした。まず失職するかもしれないし、出世と昇給の好機をあきらめる人はほとんどいないからです。その後、彼には特別な職務が与えられ、すばらしい業績を挙げたので、彼の上司はこう言ったそうです。「いやはや、君をフィリピンに行かせなくて本当によかったよ！」会社は彼の功労を称えて記念額まで贈呈したほどです。またしばらくして、今度はメキシコの工場の社長に就任しないかと打診されました。米国カリフォルニア州のサンディエゴに住居を構えて通勤するということでした。今度、彼に与えられたみ言葉は、「行って、わたしの証人になりなさい」でした。妻が私に語ったところによると、彼は工場長になるためよりも、主の証人になるためにその仕事を引き受けたようなものだそうです。それでも、彼の指導下で、その工場は前例を見ないほど生産力と効率を上げたようです。それで、あらかじめ約束していた年数を過ぎても留まってほしいと頼まれましたが、家族と共に過ごすために帰国することにしました。しかし、カリフォルニアにいる間に私たちは近隣に住む日本人のために集まりを持つことができたし、国際結婚の夫婦のために英語でマリッジ・エンカウンターを開催することができました。マリッジ・エンカウンター以外の多くの機会を通して、この夫婦は周囲の人びとに手を差し伸べ、とくに近隣で多くの問題を抱えて途方にくれている日本人たちを助けました。今述べたことはすべて、あの赤ちゃんが一夜でいやされた出来事にさかのぼります。その赤ちゃんも成長し、今は二児の母親です。

＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊

ダナン神父様(スペイン・Pich)

イエスは、「あなたがたはその実で彼らを見分ける」（マタイ 7:20）と言われました。確かにそのとおりです。一組の夫婦が福音に一致して生きようと忠実に努めると、彼らの生き方に現れる実りによってそれは明らかです。そして、そのような実を結ぶ生き方に献身するきっかけは何だったのかと周囲の人に思わせます。バルセロナのある夫婦は、主に従う生き方を深める「何か」を探していた最初の夫婦の一組でした。結婚して 4 年目に入っていたこの二人は、1956 年に MFC、あるいは CFM（クリスチャン家族運動）を通してカルボ神父に出会い、結婚の霊性について紹介されました。これこそ二人や他の夫婦が探していたものだと彼らは気づきました。これらの夫婦たちは長い間毎週祈りと分かち合いを続け、聖霊に導かれて今はマリッジ・エンカウンターとして知られる奉仕を発展させてきました。

1961 年に最初のマリッジ・エンカウンターが行われました。この夫婦は世界で 2 番目に行われたマリッジ・エンカウンターに参加し、すぐにチーム・カップルとして奉仕するようになりました。彼らが最初にカルボ神父に出会ってから 4、5 年の間に経験したことを彼らはかいつまんで分かち合ってくれました。彼らが感じているのは、チームとして始めて奉仕したとき、それまで体験していたことが統合され、夫婦として成長しようと決意する助けとなったことです。この体験によって、二人は互いに心を開くことができ、自分たちの結婚生活において神の愛が必要だと全面的に意識するようになりました。

マリッジ・エンカウンターの精神はそれ自体は運動ではなく、夫婦や家族や教会や社会への奉仕だと信じている二人は、現在に至るまで、結婚 50 周年を過ぎた今でも、スペインのみならず海外でも MFC に深く携わっています。彼らは国内外で他の職務においても国際幹部夫婦として理事会で奉仕しています。加えて、この何十年、感謝に満ちた真の友として、彼らは財政上の支援はもちろんのこと、多くの点でカルボ神父を支えてきました。「あなたがたはその実で彼らを見分ける。」この夫婦の実りをざっと見ただけでも二人の真の姿が明らかになります。しかし、彼らの人生において霊的な実りがあるとしたら、少なからず昔のマリッジ・エンカウンター体験が力強く長きにわたる影響を与えたと言っていいでしょう。そして、マリッジ・エンカウンターが彼らに与えた深い霊的な影響を知っているがゆえに、マリッジ・エンカウンターという名のもとにまったく違う点を強調しているプログラムが実施されていることに彼らは心を痛めています。そのようなマリッジ・エンカウンターは、本来強調されるべき結婚の霊性の本質やそれに伴う神のみ言葉、神の計画、婚姻の秘跡などに関する要素を軽視し、心理学の側面を強調して感情を基盤とする夫婦の対話に譲れない重要性を置いているからです。彼らはこの不幸な理解不足に落胆を隠せません。

＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊

私は、「マリッジ・エンカウンターはあくまで夫婦のためのもので、司祭が参加しても何の益もない」と考えている司祭に数多く会いました。しかし、理由は何であれマリッジ・エンカウンター（や他の FIRES プログラム）に参加した司祭は誰でも、自分の司祭としての召命とその活動に直結する多くのことを発見せずにはいられません。マリッジ・エンカウンターを直接体験しなければ得られない発見なのです。ある司祭による以下の分かち合いは、このことを実証しているようです。

奈良・Paddy O'Hare 神父様

京都教区は最近小グループによる「信仰の分かち合い」を信仰の実践と成長のために欠かせない統合的な要素として重視しています。信仰の分かち合いに関するセミナーや分科会は、信仰成長を推進する教区プログラムの一部となっています。

私が最初に信仰の分かち合いの価値と力を学んだのは、マリッジ・エンカウンターの体験

からでした。最も深く感動し、婚姻の秘跡の理解を完全に変えた分かち合いを今でも鮮明に覚えています。それは、約30年前、とある週末に桐生で行われたマリッジ・エンカウンターでした。そこで、あるチーム・カップルが、日常生活のごく普通の務めにおいて互いに婚姻の秘跡を行使する、という意識が二人の関係に新しい理解と活力をもたらしてくれたことを話してくれました。それまで、私は「何もかも知っている」と思っていました。神学も教えていたし、CFMで働き、結婚準備講座の講話も担当していたからです。その分かち合いは、私がいまだかつて想像も教わりもしなかった形で婚姻の秘跡の深みと美しさを見せてくれました。また、心を尽くして愛し合っているクリスチャンの夫婦による分かち合いの力にも感銘を受けました。もう一つ気づいたのは、司祭一人だけではどんなに尽くしても、この驚くべき秘跡の表面に触れるだけで終わってしまいはずで、ゆえに夫婦との協力がもっと必要なのだということでした。

私はマリッジ・エンカウンターでチーム・カップルと一緒に働き始め、数多くの（たぶん40か50の）週末を過ごし、他のFIRESプログラムにも参加しましたが、いつでも夫婦がこの秘跡を生きる体験をしてくれるのを聞くのがとても楽しみでした。それ以来、私はいつでも結婚した夫婦が結婚準備講座の鍵となる役割を担っていると確信するようになりました。そのようなコースは、マリッジ・エンカウンターを体験した後に奉仕したいと望む夫婦をチームにして、20年間にわたって成功をおさめています。

個人的には実は私は分かち合いが苦手であることを認めざるを得ないのですが、カルボ神父の主張、すなわち「Vivencia」と、それがいつも「何が」「どこで」「いつ」「どのように今でも私に影響しているか」によって試さなければならない、との試金石は、今でも最も実用的な助けと基準値として私の心に新鮮に響きます。これまでマリッジ・エンカウンターの奉仕で学んできた教訓は、私の個人的な信仰の成長と主との関わりにおいて重要な一部となっています。神が造られたものはすべて、とくに「普通の」物事が聖なるものであること、そしてすべては受けるべき祝福であり分かち合うべき祝福であることを、私はより深く理解できるようになりました。

＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊

海外

夫は宗教に全く関心のない大学教授、妻はカトリック信者でマリッジ・エンカウンターに参加することを強く望んでいました。妻がどんなに誘っても、必要性を感じていない夫に参加するよう説得することはできませんでした。ただし離婚という言葉を、妻が口にするまでは。おそらく本気で言ったわけではなかったものの、その言葉は夫を驚かせました。妻は、せめて教会に行ってダナン神父と話してほしいと頼みました。夫は承知しました（妻が離婚について本気なのかどうかわからなかったのかもしれません）が、相変わらずエンカウンターに参加するつもりはないと、妻に言いました。彼との話の終わりごろ、もしあなたがエンカウンターに参加して、最後に何も得られなかったと感じたら、10万円に相当する額を支払ってもいい、と私は言いました。彼は本気なのかと尋ね、私は本気だと言いました。それで彼は、参加することにしました。日曜日の朝に彼は500円だけでいいと言いました。エンカウンターの終わりには、逆に私に10万円払ってもいいくらいだと言いました。彼はすぐに聖書を買い、毎日読みはじめ、半年のうちに洗礼を受けました。それ以来、私は同じ作戦を何度も使ってきました。どれほど大きな金額を支払っても、この体験を通して頂く賜物を手に入れることは決してできないということを強調するためです。

＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊

シンガポールで開かれたキリスト者家庭運動Christian Family Movementのアジア会議で、あ

るすばらしいスリランカ人夫婦に出会い、マリッジ・エンカウンター、セルフ・エンカウンター、司祭のためのエンカウンター、SADE をスリランカに紹介することができました。スリランカで行われた最初の SADE には、70 人以上の若者が参加しました。CFM のメンバーで 3 人の子どものいるある父親は、2 人の娘を SADE に誘いましたが、息子には直接声をかけませんでした。息子は学校の勉強で忙しかったからです。ところが誘った娘たちは 2 人とも参加を断りましたが、父親が 2 人を誘っているのを耳にした息子は、自分が行くと言いました。結局、3 人とも参加しました。

プログラムのある時点で、この姉妹の一人が、グループの皆に自分の兄弟を許す、と涙ながらに打ち明けました。するともう一人の娘が立ち上がり、自分も兄弟を許す、と言いました。このことがきっかけとなり、ほかの若者たちが自分も誰かを許す、と次々と分かち合いがあふれ出ました。後になって知ったのですが、この 3 人兄弟は同じ屋根の下で暮らしながら、何かの事情で、女の子たちと男の子との間に、まる一年間、全く会話がなかったのです。

次の年、私は彼らの家に招かれ、姉妹たちが準備したすばらしいご馳走を頂きました。家族の中の和解が一時的なものに終わらなかったことは一目瞭然でした。数年後、インドで開かれたまた別のキリスト者家庭運動のアジア会議で、参加者全員に FIRES のプログラムについて話す機会がありました。私をスリランカに招いた夫婦の二人の子どもが、両親と共に会場にいました。そこで私は、私の横に来て SADE の体験を分かち合ってほしいと二人にお願いしました。そのころには、この二人はリーダーとなって国内の各地で SADE を紹介する活動をしていたからです。二人の分かち合いには、彼らの親しい友達であるあの三人兄弟の和解の出来事も含まれていました。その出来事は彼らの心にも深く刻まれていたのです。この分かち合いの結果、SADE をインドに紹介するための招待を受けることになりました。神は不思議な方法で働かれるという言い方がありますが、神は明らかな方法でも働かれます。

＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊

ある青年には 6 年間つき合っている女の子がいました。彼女は彼がカトリック信者だったのをしって自分も信者になることにしました。彼はプロポーズをし、教会で挙式の日を予約し、招待状も発送しました。それから二人は婚約者のエンカウンターに参加しました。その週末、それまで二人の間で話題にしたことのなかった事柄について対話をしながら、青年は、お互いの価値観があまりにも隔たっていることに気づき、そのために彼女とは結婚できないとわかりました。そこで彼は、両家や周りの人たち皆が大変驚くなか、結婚を取りやめにしました。そして、SADE に参加し、そこで同じ価値観をもつすばらしいカトリックの女性に出会いました。二人は結婚し、二人のかわいい子どもがいます。結婚当初から、チームに加わって婚約者のエンカウンターを紹介する活動にたずさわっています。彼が婚約者のエンカウンターで分かち合う感動的なあかしは、余命三か月と診断された白血病に似た進行性の癌から癒されたことです。主に、エンカウンターで知り合った多くの仲間の祈りに支えられて癒された、と言われています。

＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊

結婚生活に行き詰まった夫婦がいました。彼らはクリスチャンではなく、妻は孤独のなかでどこに助けを求めたらよいのかわかりませんでした。ある日彼女は、教会に行く途中の知り合いと偶然出会い、一緒に行かないかと誘われました。教会では、マリッジ・エンカウンターと FIRES のプログラムに関わっている夫婦と知り合いになり、二人は彼女に、離

婚という極端な一歩を踏み出す前に、一度マリッジ・エンカウンターに参加してみてはと提案しました。彼らはエンカウンターに参加し、それによって二人の生き方は深い影響を受けました。二人は離婚するのをやめただけでなく、定期的にミサにあずかるようになり、公共要理の勉強を始めました。

その後セルフ・エンカウンターにも参加し、それぞれ個人的に実りを体験しましたが、それはさらに二人の結婚生活にも影響を及ぼしました。二人は洗礼を受けましたが、それ以来、いくつかのマリッジ・エンカウンターやセルフ・エンカウンターのチームに加わっています。今では、かつて二人に絶望の離婚状態の時期にあったことが信じられません。

＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊

これからお話しする女性は二人の子どもを残し夫に先立たれました。子どもたちは、「登校拒否」という日本独特の現象に苦しんでいました。

何万人もの子どもが、あるとき突然学校に行くことを拒み、次第に社会から落ちこぼれていく。親や兄弟をふくめ誰とも話したがらず、昼間は寝て、夜になると出歩く。あるいはただ、一日中、独りで時間をすごす。どうしてこのようなことが起こるのか、誰もその主な原因を特定できませんが、この子たちが、仲間と話し合ってこうしようと決めるようなことでもないのです。子どもが自分一人で始めることで、小学校低学年の子どもから大学生にいたるまで、誰にでも起こりうるのですが、多くは中学生の頃に始まります。いじめが原因となる場合もありますが、家庭での何らかのトラウマが主な原因であることが多いようです。この女性の夫は癌でした。娘は比較的早くこの問題を乗り越えました。しかし、息子の方は深刻なものとなり、未遂に終わったものの、一家の住むアパートのストーブのガス栓を開け、火をつけようとしたことさえありました。この事件をきっかけに、アパートの住民は一家の退去を求める署名を集めました。この女性は息子や息子のような状況にある子どもを、特に登校拒否児の家族の会を通して助けるためにカウンセリングの勉強を始めました。

勉強を修了した彼女は、自分にできることなら何でも支援します、という広告を新聞に出しました。一週間のうちに、全国から300以上の要請がありました。彼女は25年以上にわたり、助けを求める数え切れないほどの人々に手を差し伸べています。その方法は独特で、効果的なものです。それは助言というより、祈りに重点を置いていました。このことから、女性がこの使徒職を始めてから一年もたたないころから、私たちは知り合いになりました。彼女が関わっていた家庭の多くはキリスト者ではありませんでしたが、どこか静かに内省のできる所に行ってみないか、と提案したのです。中の一人が、たった一週間前に私が赴任したばかりの黙想の家に皆を連れて行こう、と申し出ました。彼らが到着すると、霊的助言をすることになっていたブラザーは、彼らには、共通の問題を抱えている家族であること以外、なんのつながりもないことを知りました。ブラザーは彼女に、ちょうど家族のための仕事をしている神父がいるので彼に頼んでみたらどうか、と提案しました。初めての体験でした。「登校拒否」について、私はそれまで聞いたこともありませんでした。何をしたらいいのかわからないまま、彼らのために一泊二日のプログラムを作りました。聖霊降臨の体験がまたもやよみがえりました！

エンカウンターと彼女の特別な使徒職の協力関係は、こうして始まりました。彼女の信念は、親が変わらなければ子どもは変わらない、というものでした。そして、親がこの変化を体験するための方法の一つはマリッジ・エンカウンターに参加する、ことでした。彼女に勧められて、何百組もの夫婦がマリッジ・エンカウンターやそのほかのFIRESのプログ

ラムを体験し、何百人もが洗礼を受け、多くの子どもたちが問題を克服し、学校ですばらしい成績を上げ、実にたくさんの癒しをいただきました。彼女の息子も SADE に参加し、今は結婚もして生き生きと働いています。

切実に必要とされている奉仕にたずさわるようになったこの女性は、方々で講演をするようになりました。ある講演で、現在地方にすんでいる高校の同級生に会いました。結婚して互いに名前も変わり、連絡を取り合うこともなく卒業後 40 年以上がたっていました。講演を聞きながら、このかつての同級生は何か懐かしさを覚え、旧姓はこの名前ではなかったかと彼女に尋ねました。全く思いもよらぬ再会でした。そこで二人は、それまで連絡のあった別の同級生に連絡を取りました。3 人は再会を喜び、昔話を楽しみました。話の中で、女性は二人の同級生にマリッジ・エンカウンターを勧めてみました。二人ともが参加し、信仰の恵みを頂き、一年後、私は東京のフランシスコ会のフランシスカン・チャペルセンターで、その二組の夫婦に洗礼を授けました。

また、この女性の両親はマリッジ・エンカウンターに参加した最高齢の夫婦かもしれません。夫は 86 歳、妻は 84 歳でした。その体験によって、二人ともが洗礼を受けました。こうして、すばらしい、予期しない恵みをもたらすため、主が負の体験（息子の登校拒否）をどのように用いられたかという例を、また一つ見ることができました。

＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊

十シャローム　　竹上仁司・裕子

1974 年（昭 49）12 月、私の仕事の最も多忙な時期でしたが、背中を押される様にして、初めてマリッジ・エンカウンターに参加したのが、39 才の時でした（34 年前）。その時の驚きと喜びの感動が今も容易に思い出されます。その翌年、チーム・カップルに指名していただき、2001 年のマリッジ・レトルノ迄 27 年間、毎年（連続）の参加が出来、この間、何と多くのそして大きな「恵み」をいただいたことか計り知れません。お手紙を戴いてから、溜まっていた資料やノートを読み返している内に、私達の生きて来た半生が次々に浮かび上って来てしまいました。感謝と喜びが込み上げて来て、深い感動に浸ってしまい、読み返す程にこの沢山ある恵みを取捨選択など出来ず、とても文章に纏められなく成って来てしまいました。

従いまして、毎回参加した時にいただいたり、体験して来た数々の恵みを想起する形ではなく、「現在もわが家に生きている円 RES を通していただいた恵み」として記してみました。　現在私達の周りに起こる何を取り上げても、FIRES という大樹につながる枝の一つなのだと気付かされます。

霊的一致が全ての日々を平和に

マリッジ・エンカウンターの誓約にも何回も取り上げて来ましたが、毎日「共に祈る」と「共に読む（聖書）」が習慣（47 年間）となり、二人の霊性はみがかれて来ているのかなと思います。

起床時には各々に祈って行動を始めますが、朝食前には祭壇で灯したロウソクと聖書を食卓に持って来て、二人揃って、立って声高らかに祈ります。向き合って挨拶に軽くキスし、食卓に座って、その日の聖書を読みます。妻は卓上のサービスをしながら聴いていますが、食事をしながらその聖書の箇所について、また教会共同体のこと等を分かち合ったりします。朝はパン食に決めていますが、デザートに毎回欠かさず、りんごとバナナを二人で半分ずつ頂くことになってます。雰囲気もぴったり当てはまるこんな句があります。

「つつましく　儀式のごとく　朝なさに　ひとつのりんご　つま（夫）と分かつ」

夕食後は、互いの都合と呼吸の合ったところで祈りの時間を持ちます。今は「教会の祈り」を使って、二人で交互に声を出して祈ります。

～この朝晩二人で祈る毎日の習慣によって、私達は霊的にどんなに養われているか計り知れません。～　ふたりの一致の為に、謙遜・柔和・寛容等、人間的に努力し心掛けてはいても、この習慣に助けられることの方が遥かに多いことに気付かされます。

集会祭儀・聖体奉仕者
第二バチカン公会議（1965）から10年が経って、群馬県下の全教会が一つに集まって「群馬使徒職協議会」が発足しましたが、それから10年後（1985）には、早々と第1回の集会祭儀が行われる様に成りました。高崎教会の主任司祭の留守を預かっていたアンドレ神父が沖縄のカテドラルの建堂式に出席のため主日のミサが出来なくなり、急に集会祭儀の司式をするように云われました。共同体がそこにあるから、そして何よりも神のご計画が一致だから、マリッジ・エンカウンターで実践的に学んでいる貴方がやってみなさいとのことだったようです。その後も集会祭儀や聖体奉仕者をしばしば続けて来られたのも、愛と一致と喜びを伝えようと一生懸命にFIERSに携わって来たお蔭だと思います。

高崎教会では、女性も祭壇奉仕をしますが、裕子も任命され現在担当しております。

結婚講座担当
家庭と家族の事を日夜学んでいるのだから適任者だよとの事で、マリッジ・エンカウンターのチーム力ップルを仰せつかって以来、ずっと結婚諦座信徒の部を担当して来ました。主の愛が伝わって行く時の喜びは喩え様もない喜びです。

入門講座クラス
毎週火曜日夜7時クラスを担当して16年目になります。理論理くつでは無く、マリッジ・エンカウンターから学んだ「信仰の喜び」や「愛しあう事の素晴しさ」が伝わってくれればと励んでいます。洗礼を受けたく成るか否かは、その人と神様の問題で、私は例え浅白な知識でも一生懸命に自分の生きている信仰体験を伝えられたら良いと思っています。

外国人村バザー支援
赤城山麓に「あかつきの村」という外国人移住者の居住地があり、週に三回程バザーが開かれます。高崎教会の担当が第2・3土曜日ですので、月に2回早朝に出掛けます。奉仕してくれる信者の家に車で廻って乗せて行きますが、約1時間の道程です。何時も「事故なく運転出来ますように、そして売上に貢献出来ますように」祈って出掛けます。勿論、朝早く忙しくても、その日の聖書朗読は欠かしません。お客さんで来てくれる人達との交流も深まり、移住者からも家族的雰囲気で喜ばれています。二人で弁当持って出掛けますが、私達の愛の溢れがその日出合う人々や外国人居住者にも伝わればいいなと思っています。

司祭館清掃と教会の留守番
毎週月曜日、裕子はもう1人の信者と司祭館掃除に出掛けます。主任司祭も高齢ですし出来るだけ家庭的な暖かさを保ち、お元気で司牧に専念出来ますようにと心を込めてピカピカに磨いています。この二人だけが専任ですから週に一度の清掃に成ります。

その後、教会にいて事務その他をし乍ら留守番をやっています。毎月曜日に、この二人が一日つめて居る事で、いろいろの信者が各々の話題を持って出掛けて来ます。食事の時やお茶の時間に合わせて来る人も居ります。これも共同体と云う大きな家族のコミュニケーションの場として大切にしております。三時のお茶の時間には神父様も司祭館から出て来

られ、楽しい分かち合いの時間がもたれる事も少なくありません。

主日ミサ当番と前日（土）の掃除当番
地区別に当番が決っていて、第一土曜日の午後に誘い合わせて出掛けます。手分けしてお聖堂やトイレその他の担当に別れてお掃除をやります。翌日のごミサのための祭壇準備とお花を生けて終わります。この後しばらくお茶の時間を持ち、地区内の分かち合をします。こうして地区内信者の連帯感が強まり、共助関係が生まれます。これは教会共同体全体の一致の為にも大変役立ちます。

以上、私達夫婦が「ただ仲が良いというだけで無く、何かがあるんだ」と云われる事がありますが、「いただいた恵みに生されているのかな」と思い、感謝せずにはおられません。末筆にて恐縮ですが、ダナン神父様のご健康とご清栄をお祈りしております。　感謝。

＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊

今林正子

私たちがマリッジ・エンカウンターに参加したとき長男が大学を中退したりして困っていました。特に長男が「お父さんが恐い」と言ったのには愕然としました。私も立派な母親ではありませんが夫に対しては少々不満があり参加しました。というのも、夫は父親が軍人であった為、生まれたときには父親は戦死しており、以来、母親と姉と親類に囲まれて育ったのです。とても教育には熱心な家系でしたので、姑にとっては孫は東大に入るのが当たり前(夫は経済のため、高卒ですが、親類は東大が当たり前としていました)で、普通に接しても子供に対しては要求度が高いということになります。また、生まれてから一度も父親を見たこともないので、夫はどうして子供に接していいかわからないようでした。そんな状況でマリッジ・エンカウンターに参加しました。

夫としてはマリッジ・エンカウンターの結果、教会生活はよいものらしいから、わたしのクリスチャン生活に協力して子供を育てようと思ったそうです。昭和一ケタ生まれの男としては当たり前の「家族や子供を考えるのは軟弱だ、男は国家のために生きるのだ」という考えを少し転換してくれました。

長男も SADE に出た結果、受洗しました。次男は結婚が早かった(23 歳)ので、気になり、マリッジ・エンカウンターに参加させました。その結果、嫁もとても感激したようでした。嫁も教師夫妻の次女でしたが、家庭は勉強一色で会話もないという少女時代だったので「夫婦というものは」「結婚というものは」という講話に感動したようです。以来 10 年、小岩教会に通い、3 年前に夫婦で受洗し昨年、孫娘 2 人(高 3 と中 2)が受洗しました。

今長女が子供を育てるについて教会の日曜学校を取り入れようとしています。私は子供が 5 人いましたが、末の子(今 28 歳)が中一のころ、世の中の余りの悪さに無理やりに SADE に出しました。現在、何かがあると祈るということを学んだようです。この冬に子供が産まれパパになりますが、神様のことは教えるといっています。

私は正直に申しますと、当時、時計を取り上げたり、ロウソクを多用したりがムードで、洗脳するように感じ少々違和感がありましたが、神父様の「夫婦のあり方」のお話はすばらしいと思いました。第一級のレベルと思いました。日本では、あういうお話を聞く機会が少なく、ほとんどの人が何も教えていません。あのお話を高校生に聞かせたいと切に思いました。学校で講演はなさらないのですか。

マリッジ・エンカウンターのやり方は歌や踊りはすごく好きなので違和感はありませんでした。ただ、日本人はあんなにオープンには急になれないので、皆さん、戸惑った方もいるかと感じました。時代が代わって今はどこでもああしたやり方をしますので、今は少々時代が先走っていただけで普通だと思っています。総合して我が家ではとてもよい方に作用しています。私も息子たちが結婚しましたが息子夫婦とはお互いに自治を認め合って生活しています。　以上です。

現在の日本の家族状況の悪さには悲しくなります。若い人は安心して子供を育てられず「不安」というストレスを抱えています。やはり、神様を中心に置かないで子育ては難しいと感じます。

＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊

マリッジ・エンカウンターとキリストとの出会い

宮本和美・陽子

妻

夫の転勤に伴い 1975 年、沖縄県から群馬県にまいりました。初めて訪れた太田の教会で、挨拶に出られたダナン神父様が、「ちょっと待っていてください」と言ってマリッジ・エンカウンターの申込書を取りに行かれ、短い説明とともに私たちに渡してくれました。それは、2 泊 3 日のものだということがわかりましたが、初めての所で何もかもが新しく、誰か赤の他人の私たちの子供を預かってくれる人がいるのだろうか、という不安がありました。しかし、そうした心配は無用で、さっそく、ボランティアの人が出てきてくれました。そのご夫婦にどれほど感謝しているかわかりません。

夫

太田に転勤したとき、妻はもともとカトリックの信者で毎日曜日にごミサに預かっていましたが、私は未信者であるゆえに、妻のタクシーの運転手役でした。ですからマリッジ・エンカウンターに参加するように勧められたとき、私には少し抵抗がありました。そして、その最初の体験のとき、一番印象深かったことは、それ以前一切面識のない男性がわたしのところへ来て「愛しているよ」といわれたことです。確かに聖書の中には、“神が愛”であるとか“隣人を愛しなさい”という表現があることは知っていましたが、生まれて始めて面と向かって「愛しているよ」といわれました。それは驚きであり、ショックでした。しかし、受け入れられているのだということを強く感じました。それに加え、私たちと同じ普通の夫婦がオープンで、自分たちの実生活を分かち合ってくださったことも初めての体験でした。そうした思いをもって、このマリッジ・エンカウンターがわたしの生活をまったく変えてくれたのではないかと思っています。

妻

そのときのマリッジ・エンカウンターで、携わっていたご夫婦の努力や準備、おいしい食事などを思い出し、30 年たった今でも大きな喜びを感じます。と同時に、私たち夫婦にとって深く通じ合うということが、どれほど困難だったかということも思い出されます。また、もうひとつびっくりさせられた思い出は、マリッジ・エンカウンターの最後のミサを一緒に祝うためにその近辺の多くの夫婦が集まってくださったこと、そして喜びをもって「シャローム！」とさけびながら、平和の挨拶のときに抱き合っていたことです。私にとって、それはまったく新しい体験でした。ダナン神父や子供たちをみてくださったご夫婦や、一緒に参加した仲間たちや、特に夫に、そのマリッジ・エンカウンターを私たちの生活を変えてくれるものとしてくれたことに対して、心から感謝しています。これこそ、何にも代えがたい恵みでした。

夫
マリッジ・エンカウンターでの最後のミサは、非常に喜ばしいものでした。平和の挨拶のときに自然と何の恥もなく、抱き合ってイエズス様が約束なさった平和「シャローム！」を分かち合う挨拶を交わしました。このマリッジ・エンカウンターを体験したおかげで、先ほどお話した男性が、「あなたを愛している」と心から言ってくれた意味がわかりました。その愛は、夫婦がお互いに対するものですし、そして、神の現存を表している愛だという事がわかりました。これらのことについて考えることができたこと、それ自身がこの上ない恵みでした。さっそく私は、中年の男性による聖書研究のグループに入って、1 年後、私たちはそろって全員洗礼を受けました。洗礼の前に、ダナン神父に言われた、「心から洗礼を望まなければならないよ」という言葉が忘れられません。まるで、私の心を読まれていたようです。

妻
私にとって、そのマリッジ・エンカウンターに参加した一番すばらしい、また思いがけない恵みは夫の洗礼でした。受洗は同じ影響を受けた 8 人の男性と一緒でしたが、実際には、夫が参加したのはグループがかなり進んでからですから、まだ洗礼を望むのは早すぎるだろうと思っていました。それでも結婚してからずっと一緒にごミサに参加してくれていましたから、いつか洗礼を受けてくれることは長年の夢でした。ごミサの時にもそれを思うと、しばしば、涙があふれてきました。シスター・グァダルーペやほかの友達も祈ってくれましたし、また私にも祈るようにと励ましてくれました。男性グループの 8 人はすでに洗礼を受ける決心をしておられましたが、しばらくして、ついに夫も決心してくれました。

ところが、その時点で決心していない人がまだ一人いました。残っていた一人は、たまたまマリッジ・エンカウンターで夫婦のある集いのときに、奥さんがこらえずにひとりで私たちの小グループに参加していました。そして、夫の迷っていたという分かち合いを聞いて安心し、慰めを感じられたようすで、やっとご自分も洗礼を受ける決心をされました。そして、次の復活祭には、その 10 人全員が洗礼を受けました。それ以来、全員、その当時若かった方も、少し歳を取っておられた方もこの 30 年の間、固く信仰の恵みを大切にしています。その洗礼の日のダナン神父の笑顔は、生涯忘れることができません。そして当時 4 年生だった息子までが「やった！」と叫んで自分の喜びを表現してくれました。私も同感でした。夫は、俺は家族の中に平和をもたらすために洗礼を受けたんだよ、と言っていました。なが年、私たちが、夫婦としての信仰の旅ができたのは大勢の司祭・シスター・ご夫婦・個人の方の祈りや、励ましのおかげだと感謝しています。そして何よりも、婚姻の秘跡を受けるようになって、同じ価値観、同じゴールをもたらした、あのマリッジ・エンカウンターに参加できた恵みには、言い尽くせない感謝をささげています。

夫
5 年くらいたって、その熱狂的な喜びの教会からタイのバンコクへ転勤することになりましたが、定期的に自分たちの信仰を分かち合うために集まっていた日本人のカトリックの信者に何人も出会うことができました。時々日本からいらした司祭と司教様も私たちのためにごミサを捧げてくださいました。公務員である私は 17 回もの転勤をしました。そしてどこへ行っても、教会の友達が妻を囲んで分かち合ってくれました。同じ信仰や理想を持った大勢の友達がいてくれたおかげで、これだけ数の転勤があったにもかかわらず、妻は耐えることができたのだと思います。そのためにも私は感謝しています。

妻
夫が分かち合いましたように洗礼を受けて 5 年後バンコクに転勤させられました。太田の教会のシスターやグループが毎週日曜日の説教を大きな絵に描いてくださったバンナを、

ダナン神父の許可の元、一枚バンコクまで持ってきてくれました。それは太田教会の上にマリア様がご自分の腕を伸ばして教会全体を包んでいるような絵でした。それはバンコクの家の居間の壁にかけられていました。そして、その太田教会を建てたルシアン神父様もバンコクへ来られる度にごミサを捧げてくださいました。今、そのバンナは茨城県のつくばの「森の家」にあります。

年月がたてばたつほど、私たちが夫婦として、家族として受けた恵みは衰えるどころかますます強くなってきている気がします。そのすべての発端は、あのマリッジ・エンカウンターがもたらしてくれた計り知れない恵みにあると、私たちは二人とも、そう確信しています。

夫
マリッジ・エンカウンターに参加して、そのために洗礼を授けられたことによって頂いた特別な恵みのひとつは、ローマへ行ってダミアノ神父様の列福に参加する機会を得られたことでした。そのヨーロッパへの旅では、ブリュッセル、パリ、ルルドへ行きました。ルルドへ行って最初の晩に夢を見ました。それが、イエズス様であるかマリア様であるかはっきりしないのですが、まぶしい光の中に包まれている幻がありました。そこで、はっきりしていたのは、かつてのあの日曜日の朝のタクシー運転手が信者になり、まして、イエズス様であるかマリア様であるか気にすることなく、たとえ単なる夢であってもその超自然的な体験を認めている、という自分の姿に、私の心がかなり大きな心に変化をしたということを物語っているということです。まさに、はじめのマリッジ・エンカウンターを体験した時にいただいた恵みが、ずっと私たちの結婚と家族の生活の中で、生き続けているように感じています。

* * * * * * * * *

ハンガリーのZita

私たちの結婚は1978年、19歳のときでした。Zitaはカルビン派に属していましたが、熱心な教徒ではありませんでした。私はカトリックの洗礼を受けていましたが14歳以降、教会へ行くのはクリスマスとイースターくらいでした。知り合ってまもなく、Zita は妊娠しました。数家族が集まって中絶をするように勧めましたが私たちは結婚することに決めました。残念なことに妻は結婚後まもなく流産してしまいました。Zita は赤ちゃんを待ち望んでいましたので立ち直れないほどの痛手を受けました。

当時、私たちは自分たちだけのアパートを借りるお金もなく、Zita のお母さんのところに同居させてもらっていました。私は徴兵となり2年家を離れました。その間に、家族の理由で私の母も私たちの家族と一緒に住まざるを得なくなっていました。2年の兵役を終えふるさとへ戻り、自分たちだけの家を建てたいと思いました。それ用の土地があるにもかかわらず、建築許可を取るのに6年もかかりました。

私たちの状況はうまくなく、けんかもたくさんしました。子供がほしかったのに運の悪いことにZItaは7回も流産を繰り返しましたし、互いの家族が原因でのいさかいもしばしばでした。それでも、家を建て始めることになりましたが、それが余計に神経をぴりぴりさせることとなりました。ほとんど蓄えもなく、とぼしい経験だけで家族全員が同居するのは、体力的にも経済的にもそして精神的にもとても難しいことでした。

私たち家族は誰もクリスマスの時にしか教会に行くこともなく、祈ることもありませんでした。母は祈っていてくれたようでしたが、私は教会へ行くということすら考えたこともありませんでした。私たちのこのいさかいを眺めていることは母にとって苦痛だったに違いありません。私と妻の間のわだかまりはますますひどくなり、家が立ち上がるまでの8

ヶ月間は、ほぼ別居状態でした。

私たちは互いに自分の非は認めず、ひたすら相手を攻めていました。Zita はカトリックの信仰に興味を持っていませんでした。彼女は私の母が教会へ行ったり、ミサから帰ってくるのをあざけって面白がっているように見えました。母は 1990 年に亡くなりました。母の最期の言葉は、「気をつけて」、母は最後まで言い終えぬまま亡くなりました。私は、母の死に打ちのめされ、立ち直るのに 1 年以上もかかりました。

そのとき、私たちの友人が Silva's Mind Control と呼ばれる New Age グループを教えてくれました。彼らはそのグループが如何に興味深いものかを教えてくれました。そこで、もともと Zita はカトリックには興味のないことを知っていましたので、わたしたちの生活に何かプラスになる考え方が必要だと考え、その入門コースに入りました。私たち二人の前に新しい世界が開けたような気がしました。そこで、次のコースにも行くことにしました。

しばらくすると Zita はもう興味を示さなくなり、私たちの関係はますます緊迫したものとなりました。Zita は彼女の両親が Zita の 5 歳のときに離婚したように自分たちにも、もう離婚しか残されていないと考え出していました。私としても、父を 6 歳のときになくしており、互いに父親のいない不完全な家庭で育ってきたことになります。それでも Zita は子供をほしがり、私のほうが、すでにあきらめていたのに、その望みを捨てることはありませんでした。それで、Silva's Mind Control で教わったように、Zita に子供ができますように、そしてそのために数年にわたって受けているホルモン療法によって何も副作用がないようにと、前よりいっそう内観するようになりました。そしてそのあとで、祈りを唱えました。そのためだと思います、18 年の結婚生活の末に、そして大変な難産でしたが私たちに娘が授けられました。本当に、これは私がしていた内観のおかげだと思いました。でも、私は息子が生まれると思っていたのですが・・・

今なら、その時、私たちが助けられたのは神への祈りによるものだったのだと確信を持って言えます。その当時、すでに私たちは新築の家に住んでいました。娘ができたことはとても喜ばしいことでしたが、二人の間はまだ張り詰めたものでした。同時に、New Age の本をたくさん読みました。私たちはいくつかのコースにも出ました。次はヨガで、これは私だけが興味を持ち Zita はまるで受け付けませんでした。このヨガの体操とベジタリアン的食事と黙想をすることでとても元気になったように思いましたが、結婚生活は最悪でした。最も被害を受けていたのは娘です。Zita は離婚を望んでいましたが私は何としてもそれは避けたいと思いました。ついに私はある知り合いの若いお母さんに不満を打ち明けました。この人について知っていることといえば、教会へ行っているということ、そして、Zita がこの人の意見には耳を傾けるということだけでした。彼女に助言を頼むと、彼女はオリジナル・マリッジ・エンカウンターを勧めてくれました。

オリジナル・マリッジ・エンカウンターについては何も知りませんでしたが、これに託すべきだと感じました。奇跡を信じて参加しました。たくさんの夫婦に出会い、そのすべての夫婦もまた- 仕事や受けてきた教育は違っても同じような問題に日々悩んでいることを知って驚きました。そこで、神様が私たちにも働きかけてくださっていることを知りました。神が私たちに一人一人としてだけでなく、夫婦としての私たちに特別な方法で話しかけてくださったので、私たちは途端に結婚の秘跡のうちに置かれました。私たちがそのことに気づき、神の助けを求めさえすれば、神はよりよくしてくださろう、としておられます。非常に勇気付けられました。また、ショックでもありました、なぜなら、自分たちのおかしてきた間違えに気づき始めたからです。20 年間、くさい物にひたすらふたをしてきた問題が突然すべて飛び出し、それに埋もれてしまいそうでした。

この 3 日の間、私たちはこれまで直面していたすべての困難に改めて向かい愕然としました。二人とも和解を願ってきたはずなのに実際には、Zita は離婚をのぞみ、わたしも絶望的になっていたのです。

しかし、ありがたいことに、家に帰ると娘はちゃんとそこにいてくれました。娘を見て、二人とも、娘を手放すことは絶対に出来ないとおもいました。娘は二人の手をにぎってくれ、私たちは、このチェーンをはずすことはできないと感じました。これまでの様々の過ちにもかかわらず、神様が私たちに子供を授けてくださったのだとしたら、この子を手放したり、親のいない子にして娘の生涯を台無しにしてしまうことは許されざる罪だ、と感じました。私たちは二人とも、父親のない家庭がどんなものであるか知っていましたから。

私たちは私たち自身の家族にも、私たちを頼りにしてくれている人々にも責任があるのだと気づきました。個人として、そして家族として自分たちが誰かにとって大切な存在なのだと気づけたことが驚きでした。ダナン神父様が私たちの目を開けてくださったのです。神父様を通して、今まで味わったことのない穏やかな父親の愛を体験できました。その体験がなかったから、その愛をほかの人にも自分の娘にさえにも与えることもできなかったのです。ダナン神父様に結婚による一致のために日々祈ることの大切さ、そして、閉じられた聖書からは聖霊の働きは現れてこられない事から聖書を読むことの大切さを教えられました。また、神父様はふたりの一致に、また家族にとって妨げとなるものは何でも、たとえそれがすばらしく、聖なるものが含まれているにせよ、神が認められたものではないと教えてくれました。これに関しては長いこと納得がいきませんでしたが、後になってやっとこれが真実であると認められるようになりました。

そこで私たちはそろって祈り、聖書を読みはじめました。とはいっても、はじめは New Age で聞いたりヨガで学んだ真理に似ている箇所を探しているだけでしたが。しかし、私は聖書の中にもっともっと大きな愛、正義そして真実の重みがあることに気づきました。そこで、New Age の全巻を焼き捨てました。おかげで、私たちの信仰は強められました。お互いに分かち合うことも学びました。もちろん、それ以後も言い合いはありました、今でもあります。しかし、何日もの間、互いにののしったり怒りをぶつけあったりすることなく許しあえるようになりました。教会にも毎週行くようになり、Zita は信仰について学び始めついにカトリックに改宗しました。そして、娘のために祈り続けていた結果、医学ではもう難しいといわれていたにもかかわらず 2003 年には男の子も授かりました。

私たちの町にはいくつかの CFM グループがありますが、そのひとつにほかの 5 組の夫婦とともに加わることになりました。毎月集まってエンカウンターでの項目に似た話題、もちろん、自分たちの喜びや難しさなど、で分かち合いました。万が一、仲間の一人が難しい問題に直面するとみんなしてそれにむかって祈りました。そして、こうした祈りは常に助けとなりました。霊的に乾いていたり、問題の出口が見えないとき、ほかの人が祈ってくれていると知ることは不思議に勇気付けられるものです。

それ以来、数回オリジナル・マリッジ・エンカウンターを開きました。私たちの CFM 同様、このプログラムによって私たちの信仰は保たれ、強められています。そして、そうされることが日々の生活の中で次第に神から遠ざかる傾向に歯止めをかけるためにぜひとも必要なものでした。これらに参加するおかげで、新たなる希望をいただき、神の変わることのない揺るがぬ愛を繰り返し繰り返し体験するのを助けられています。わたしたちが神にたちかえる道を見つける助けをしてくれた兄弟たちに、感謝と祝福を祈りと証を通して送ります。

この証を読まれた方が、その方の周りにある同じ目的を持った団体を通して真実、希望そ

して喜びを求める神の愛を見つけ、そのなかに生きていかれることを願い、祈ります。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

神様は常に、困難に立ち向かってがんばっている若者を懸命に励まし続けておられます。まずは，読んでみて下さい。

Juan Pablo Mendoza（ヴェネズエラ）

親愛なるカルボ神父様
神が神父様を祝福してくださいますように。そして、聖霊を神父様の上に注ぎ続け、神父様がいつも示してくださる一致の精神を持ち続けていかれるようにしてくださいますように。

案内を送ってくださいましたありがとうございました。スペインでエンカウンターやSADEの集まりがスムーズに行われるよう引き続きお手伝いをさせていただくにあたり、出来るだけ早くそのご夫婦と連絡を取ります。でも、スペインではじきに大学に戻らなくてはなりません。SADE を手伝うことはすでに過去 6 年間のわたしの生活の一部で、本当に心からなる喜びでした。ヴェネズエラでは、もう出来なくなるのだと思うと何度も涙があふれてきました。でも今は、私の行くところでその仕事が続けられると知り、うれしく思っています。

神父様、いま、私たちのために祈ってくださいませんか。というのは、ヴェネズエラの私のいるところで SADE の準備をしているところだからです。神様が私をそのウィークエンドの責任者に選んでくださったのですが、そのためには神父様の祈りによる支えが是非必要です。このエンカウンターは、特別の歴史があり、それを神父様と一緒に分かち合いたいと思います。4 年前チームとして参加したエンカウンターがあります。参加者はほとんどが El Vigia という Merida から 1 時間くらい離れた町からでした。どのエンカウンターでも見られるように、神は奇跡を起こされ、El Vigia の人たちにこれをもっと続けて行きたいという強い意欲に燃え立たせられ、結果、ここ El Vigia で開催することになったのです。私はこの土地出身の Alvaro という名の青年と特に親しい友人となり、彼のおかげで不可能に近かった El Vigia でのエンカウンター実現がかなえられたのです。彼が事実上の創始者といえます。El Vigia での 2 度目の SADE を彼と一緒に出来て、とてもうれしく思っています。また、El Vigia にも Merida にとっても喜ばしい経験となりました。El Vigia でのエンカウンターは Merida に支えられ、われわれはいつも Alvaro を支えてきました。

去年の 8 月までに 7 つのエンカウンターを開きましたが、その月の 28 日に Alvaro が理由不明のまま誘拐されてしまいました。誘拐事件の理由はいまだに不明です。そして悲しいことに 2007 年(今年)1 月に殺されているのが発見されました。Merida にとって大きな痛手でしたが、ElVigia ではもっと大きな打撃を受けていました。時がたつにつれ、Alvaro の事件のために手伝ってくれていた人が何人も去っていってしまいました。それなのに、今年の 8 月半ば、Alvaro がやりたいと思っていた活動をまた続けたいと El Vigia の人たちがまた集まってきたのです。みんなして力をあわせ、El Vigia からは 8 人のチームが、Merida からも 4 名がでて El Vigia で 2 つの地域を合わせた第 8 回目のエンカウンターを開くことが出来ました。私は 9 月 13 日から 15 日にもう一回、開きたいと思っています。

ご想像いただけるでしょうが Alvaro がいない今回のエンカウンターは特に大変でした。でも今では、神様の助けを頂けば、すべてはうまくいくということを知っています。お邪魔するのは申し訳ないのですが、でも、神父様に祈っていただくことが私にとってとっても重要なのです。よろしくお願いいたします。

スペインでの関係者に会えるようにしてくださったこと、改めて深く感謝いたします。神

父様の健康を、ご多幸をいつも神様に願っています。

心より、Juan Pablo Mendoza

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

二文字屋　剛・志帆

剛

私たち夫婦は今から1年前の2006年10月、家族や友人たちの祝福の中で入籍しました。学生時代から6年間の付き合いの末での結婚でしたので、結婚生活への心配もほとんどしていませんでした。しかし、入籍から1週間後、私たち夫婦の間に自分たちではもう解決のしようもない大きな問題が起こり、新婚の甘い生活から一転、2人の仲は最悪な状態になりました。

家の中は、怒り、悲しみ、悩み、後悔、苦痛、あらゆるマイナスなものだけになり、私たちは家に帰る事、朝起きる事、2人が顔を合わせる事、全てが苦痛でした。「この苦痛は、運が良ければ1人死んで終わり、運が悪ければ2人とも死んで終わるのだろう」そう思い込んでしまう程、家の中、私たちの生活はまさに闇でした。

「家族に心配はかけられない」と、この暗闇の様な日々を1ヶ月、2人だけで過ごしたものの、状況は良くなるどころか、かえって悪くなる一方でした。私たちは、いよいよお互いが自分たちの家族に、自分たち夫婦の状況を伝えました。「出来る事なら、またやり直したいが、もうそれも無理な状況だ。せめて、お互いの傷が浅いうちに離婚するのが一番良いのだろう。」家族とも話し合い、その上で、私たちは「離婚」と結論を出しました。

妻は中学、高校とカトリック系の学校へ通っていました。その学校では、年に一度、修養会というものを開いており、妻が中学2年生の時にいらっしゃったのが、ダナン神父様で、2日間、「中高生のためのエンカウンター(SADE)」を開いて下さったのだそうです。その SADE が、妻にとってとても印象深かった事、また、同じ年に、偶然にも妻の従姉が六本木のフランシスカン・チャペルセンターで結婚式を挙げ、その際にダナン神父様の「婚約者のエンカウンター」に参加し、それが「とても素晴らしかった」と聞いていた事。様々な縁があり、妻は子供心に「自分も将来結婚する時には婚約者のエンカウンターに参加しよう」と考えていたようです。

「離婚する」と決めた後、妻はその事を思い出し、「離婚する前に、婚約者のエンカウンターに参加したい」と言い出しました。そして、偶然にも「離婚するとしても、お互いが、これからの人生をより良く生きていくために、離婚前にダナン神父様のところへ相談に行ってみてはどうだろうか」と妻の母も、勧めてくれました。義母は、妻が通っていた学校で教師をしておりました。やはり、ダナン神父様の事はとても印象深かったようです。

妻と義母がダナン神父様の事を思い出した事。これがきっかけで、私たちはダナン神父様に電話をしました。しかし、次の婚約者のエンカウンターは2月。その時はまだ11月で、エンカウンターまでは3ヶ月以上ありました。「2月までには、ほぼ間違いなく、私たちは離婚していると思います」電話口で私がそういうと、「それでは、週末にでも、一度お話に来てはどうでしょう」とダナン神父様が言って下さいました。

12月上旬の土曜日、私たちはダナン神父様のもとを訪ねました。ですが、私たちはあまりうまく話ができず、当然、何も解決する訳がありません。すると、ダナン神父様が、「クリスマスの後、12月26日から28日の3日間、SADE という中高生のためのエンカウンターがあります。今年は人数があまり集まらなくて中止になってしまうかも知れません。それに参加してみてはどうでしょう？」と誘って下さいました。「大勢の中学生と心からの分かち合いなど、できるのだろうか？」と、内心、私はとても不安でしたが、SADE に最後の

望みをかけて参加を決めました。

SADE までの 3 週間、私たちは、またお互いに傷つけ合い、心身共に疲弊し切っていました。ですが、そんな中でも、少しずつ、互いに赦しあい、家族、友人の支えの末に、何とか「また 2 人で結婚生活をやり直そう」と話し合いました。まだ、かなりの緊張感を残してはいましたが、それでも、2 人で結婚生活をやり直す事を決めたのです SADE の 3 日前の事でした。「家族や友人たちの支え、自分たちの努力で、何とか和解する事ができた」そう思った私は、正直、「SADE に参加するのをキャンセルしても良いのではないか？」「自分たちにはもう必要ないものだ」とも考えました。ですが、直前でのキャンセルではご迷惑だろうと、予定通り、私たちは夫婦で SADE に参加しました。

その年の参加者は私たち夫婦を含めて 10 名。とても、小さな会でした。中学生が 3 名、高校生が 1 名、大学生が 1 名、あとの 5 名は皆、社会人。5 名のグループを 2 グループ作り、私と妻は別々のグループになりました。たまたま座ったイスの順番で決められたグループ。ですが、このグループが素晴らしかった。私に必要な 4 名が私と同じグループに、妻に必要な 4 名が妻と同じグループに“偶然にも” 分かれていました。最初は緊張していた私たちでしたが、ダナン神父様のご指導、チームの 2 人の講話、グループの中での分かち合いの中で、少しずつ心を開いていく事ができ、私たちは年齢を超えて、心からの分かち合いをし、私も妻も、それぞれに新しい発見がありました。

私は「自分が両親にどれだけ大切に育てられてきたのか」「同じように妻もまたどれだけ大切に育てられてきたのか」そして、「大切な人の愛し方」に気づく事ができました。妻もまた、お父様を交通事故で亡くした青年の「加害者に対する赦し」に関する分かち合い、また、別の青年の「自分を苛めた相手を赦せますように」という祈りから、赦しの力を知る事ができました。SADE の 3 日間が終わった後、私たち夫婦は完全に和解していました。何の緊張感も残らない、かえって、私たち夫婦の間に問題が起きる前よりもっと強い絆が生まれていました。私たちが、両親、兄弟姉妹、友人らを巻き込んで 2 ヶ月間かけ、それこそ「死ぬ思い」の努力した末にできた「和解のようなもの」を遥かに上回る「完全な和解」が、SADE のたったの 3 日間で、私たちに与えられました。

夫婦の間に何か大きな問題が起きた時、それを人間の力だけで乗り切ろう、ましてや、夫婦 2 人だけで乗り切ろうとしても、乗り切る事はできない。せいぜい「壊れたものをなるべく元の形に近いところまで直す」事しかできません。しかし、もっと大きな力、ダナン神父様が「神様」「イエズス様」とおっしゃる方、に助けて頂く事で、「壊れる前より、もっと良い状態にまでなる」そういった奇跡の様な恵みを頂けるのだと知りました。その恵みこそ、エンカウンターの真髄なのではないのかと私は思います。

その後、半年間で、婚約者のエンカウンター、マリッジ・エンカウンター、セルフ・エンカウンターと立て続けにエンカウンターに参加させて頂き、私たちは夫婦の絆を更に深める事ができました。そして、先月、2007 年 9 月 15 日、フランシスカン・チャペルセンターにおいて、ダナン神父様の司式により、私たちは結婚式を挙げました。まさか、あの暗闇の日々から 1 年も経たないうちに、私たちが和解し、私たちも、家族も、友人たちも、皆が笑顔の結婚式を挙げられるとは考えてもみませんでした。

エンカウンターで出会った皆さん、エンカウンターを支えて下さる皆さん、ダナン神父様、そして、神様に感謝。

志帆

夫からの分かち合いが私たちのすべてを語りつくしていますが、私からもエンカウンターを通していただいたお恵みを分かち合わせていただきたいと思います。重複が多々あるかと思いますがご容赦ください。

2006年12月26日、不安と期待の入り混じる複雑な気持ちでSADEの日を迎えました。今振り返ると夫婦でSADEに参加するという自分たちの大胆な行動に驚きますが、あのときはもう迷っている余裕もなく、何も考えずにフランシスカン・チャペルセンターに向かったような気がします。

SADEの2日目の夜、チームの青年が父親を交通事故で亡くし、加害者を家族が赦したこと分かち合ってくれました。初めは本当にそんなことができるのだろうかと半信半疑でしたが、その青年が精神的に解放されている姿を見て、赦しがもたらす恵みを感じました。また、同じグループの青年が「自分を責めた職場の人を赦せるように祈ってください」という祈りを捧げていました。彼の祈りは私が今まで考えたこともないことでした。

私は2ヶ月間、「絶対許さない」という思いをずっと抱いていました。夫とやり直す方向で歩みだそうとしたあとも、ふと気づくと、私の心には夫への恨みや憎しみが込み上げてくるのでした。もう思い出したくもないし、忘れたいと思っても、決して消えることはありませんでした。とても苦しく、暗い日々でした。

赦しのミサの最後に、「赦します」とみんなで挨拶を交わすことになり、夫にも「赦します」と言ったあと、ずっと何かに縛られていた自分の心が解放されて、ふっと明るくなったような気がしました。ずっと夫に言いたかった言葉はこれだった！とそのとき思いました。やっと心からこの言葉が言えた！と、じっとしていられないほど嬉しい気持ちになったことを覚えています。

今でも不思議に思うのですが、SADEに参加するまでの2ヶ月間、夫への怒り、恨み、憎しみなどが知らないうちに次々と湧き上がってきて自分ではどうしても抑えられなかったのですが、SADEに参加している間、一度もそんな気持ちが湧き上がってくることがなかったのです。まるで奇跡のようでした。あれからまだ1年しか経っていませんが、今では夫への愛と感謝の気持ちに変わっています。

この苦難に出会ったとき、「夫と出会わなければこんなに苦しむことはなかった」と思いましたが、今では「夫と出会わなければこんなに素晴らしい体験はできなかった」と感謝しています。カナの婚礼でイエズス様が水をぶどう酒に変える奇跡を起こされたように、私たちの結婚生活もダナン神父様を通して出会ったイエズス様がより素晴らしいものにしてくださいました。しかし、実はこの手紙を書くことが少し怖いと思いしばらく躊躇していました。ちょうど1年前の出来事を思い出すことで、辛い思いをしたり、嫌なことを思い出したりするのが怖かったのです。でも、自分たちの分かち合いが同じ苦しみの中にいる誰かの助けになるかもしれないと思い、書くことを決めました。このことを二人でやり遂げられたことで、また私たち夫婦は絆を深めることができました。このお恵みは、これまでにエンカウンターで出会ったみなさん、いつも大きな腕で迎えてくださるダナン神父様、そして、神様から頂いたものだと信じています。心から感謝しております。

これからもエンカウンターが世界中で行われ、より多くの方にお恵みが与えられますようにお祈りしております。また、ダナン神父様の健康と、ますますのご活躍を心からお祈りしております。　　†シャローム！！

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

カルボ神父様が夫婦と家族のエネルギーを太陽の核エネルギーと比較したことがあります。太陽エネルギーは核分裂ではなくて、むしろ核融合によって放出されるものです。世の中のほかの国と同じように、スロバキアの中でもこういった反応が起こりました。つまり、一組の夫婦の共同の努力によって、FIRESのプログラムがその全国に広がりました。以下は、マリッジ・レトルノに参加したことのある何人かの夫婦の証しです。しかし英語に翻訳していないほかのFIRESプログラムに参加したことのある、そのほかのたくさんの証しもあります。

互いの会話の好機
オリジナル・マリッジ・レトルノにお誘いいただき心から感謝いたします。これは私たちが精神的に成長する機会となり、夫婦の間での会話のための好機を提供してくれました。さらに、私たちを鼓舞するご夫婦の真剣なまなざしに感謝いたします。彼らは、私たちが一見したところ、解決不可能のように思われる課題、それは信仰の光のみが解決できるような問題ですが、そのような課題に向き合う手助けをしてくださいました。そして、私たちの精神的な父や、ジュリコヴィチご家族の温かく、真剣なご協力を忘れることはないでしょう。この催しに手を差し伸べたすべての人々に、彼らの今後の生活とわれわれの家族が作る信徒団に対して神の祝福が下されるように願っております。

（スタニスラフとミラダ・ボドビエル）

主からの贈り物でした。
このオリジナル・マリッジ・レトルノは私たちにとっては主からの贈り物でした。私たちは、私たちを導き、指導しそして、わたしたちの夫婦生活に祝福を与えてくださる親愛深い神への信頼をより強くしました。

（ヨゼフとアンナ・ドルニー・クビン）

互いの間の障壁を乗り越える助けになりました。
現在のようにあわただしく技術のみが進んだ時代、そしてお互いの間のコミュニケーションのための時間が少なくなってしまった時代にあって、オリジナル・マリッジ・レトルノに参加するように温かく勧められました。私たちにとって、それぞれの怠惰さや恥ずかしさ、あるいは知らない人の間に座ることからの恐れを乗り越え、ある週末をお互いと神に捧げることだけが必要でした。オリジナル・マリッジ・レトルノは互いの間にある障壁を乗り越える助けとなり、夫婦の間での正しいコミュニケーションを私たちに教えてくれました。そして、私たちもまた精神が豊かになって会場を後にすることができました。

（マレク・ブチェク・ニトラ、エヴカ・ブチェコヴァ夫妻）

また新たに愛の力を見出しました。
FIRES が夫婦に提供している数多くのプログラムの中のひとつがオリジナル・マリッジ・レトルノでした。私たちはセレチ(Scred)で開催されたオリジナル・マリッジ・レトルノに参加しました。私たちは、オリジナル・マリッジ・レトルノに参加するかどうか長い間議論しました。他人の前で夫婦の内情を明らかにして、お互いの間の問題を明らかにしなければならないことに対して恐れを感じて、足踏みをしていたのでした。私たちの恐怖は無意味でした。いま、私たちはオリジナル・マリッジ・レトルノに参加したことをうれしく感じています。オリジナル・マリッジ・レトルノのおかげで、夫婦間の問題を解決する方法は、何よりもまず互いの間の開かれた会話、そして、繰り返される会話にあることを知ったのです。

（マルティントメルカ）

長い道のりの一段階です
わが主よ、私は誰を信じているかを知っています。あなたが私にお触れになったときより、私は常にあなたの姿をさがしています。この探索は、しかし非常に個人的なものでした。それはあたかも幼い子供が父親をさがしているかのようでした。父親の姿を見出すまでの間、そして、平静が得られるそのときまでさがし続けます。その感覚を得たときには、彼は父親のことを忘れ、親だけでなくすべてのことに興味を向けるのです。

私の探索は「さがし人」を見出す前にしばしば中断されます。わが神から気持ちが逸(そ)らされる瞬間がよく訪れます。しかし、ひとつのこと、つまり神をさがすことはやめない、ということを、私は確信しています。私は神とよき人々の助けを得て、セテチで参加いたしましたオリジナル・マリッジ・レトルノの席上でヤーン牧師が述べられましたように、「私は常に道の途上にある」のです。

このような好機を得ましたときに、私は愛する妻マリアとともにためらうことはありませんでした。私たちは天にまします主に、そして互いに近づく機会だと歓迎しました。
私たちのこの予想は完全に満たされたと述べなくてはなりません。私にとって、われわれを鼓舞するご夫妻や開かれた関係、そして神がわれわれの間にいるという感覚は最も強く印象に残りました。そして当然ですが、このような心地よい雰囲気の中では、あたかもビタミン注射を受けたかのように夫婦のコミュニケーションもより開かれたものになりました。

神よ、私が常にあなたをさがしていたのではないことをお許しください。私はあなたを信じていますが、あなたはこの世界に生きる存在ではありません。しかし、あなたは、私があなたのことを知るための方法と人々を教えてくださいました。このことこそが天からの贈り物であり、このような身にあまる贈り物を無駄に消費することは出来ません。すべての方々に、そして彼らを通じて、私の家族と私に触れてくださいました神に感謝の言葉を述べたいと思います。「オリジナル・マリッジ・レトルノ」は私たちの道のりの一段階です。この道の目的地は、常に遠くにあるとはいえ、完全にはっきりとしたものです。

神よ、私の愛する妻と歩むこの道で互いの気持ちを強くし、互いを支えあえるようにしてくださいましたことを感謝いたします。私は、次に参加できる好機を得た人々すべてに、心よりオリジナル・マリッジ・レトルノを勧めたいと思います。そして夫婦の出会いの機会を喜びます。私は、自分とすべての人に開かれています。ぜひ参加してください。私たちはあなたのためにものこの場にいるのです。　　(マロシュトマリア)

記憶の「塗料」
私はある歌の言葉を覚えています。「……愛が傷(いた)んだところでは、何も言葉が出てこない。ただ感じるだけだ……」おそらくは20年間の結婚という共同生活を経たあとの私たちの関係も同じようなものでした。私はオリジナル・マリッジ・レトルノに参加する気乗りはせず、そしてこのような場では、普段家庭で私たちの間に存在しているコミュニケーションがどのようになるかも想像がつきませんでした。そして、結果は……聖なる精神の影響下にあって、そして私たちを鼓舞するご夫婦の影響力の下で、わたしたちは二人の間の傷ついた愛に「塗料」をぬり、活性化することが出来ました。私たちは祝福を得ることが出来、私たちの間の危機は取り除かれ、前へと歩みを踏み出すことが出来ました。そして、あらゆる夫婦は様々な危機を抱えているものです(たとえ、そのことを口に出さなくとも、あるいは別の呼び名で呼んでいようとも)。

さらにもう一言、この新しい塗料はまたゆっくりとはがれていきます。ですから、「塗料」

をまた新たに塗りなおす必要があるのです。　　（スザナとヨゼフ）

自己を知るための第一歩
結婚して15年間になります。私たちには、13歳と8歳になる2人の娘とそろそろ3歳の誕生日を迎える息子がいます。結婚生活の最初の期間をすばらしい愛の力を感じながら過ごしました。婚姻の秘跡を受けていたおかげで、日々の生活で出会う様々な困難を克服する助けとなりました。上の娘が生まれたあと、夫は忙しく、仕事に没頭していたので、彼の両親と一緒に住んでいました。また、二人目の娘が生まれた忙しさも加わり、日々の忙しさに追われて、このような愛の贈り物を失いつつあるということに気づきませんでした。

そして時がたった今、私たちは神から与えられたこの贈り物を深める努力をしてこなかったことに気づきました。自分たちが抱える考えや感情、希望、そして恐れを分かち合おうとはしなかったのです。ただただ、受身的に日々の生活を送っていました。何かが起こっているようだということを突き止めようともしませんでした。彼の両親と8年間暮らし、その後、ようやく私たちだけの生活をはじめることが出来ました。ところが夫が仕事を変えてチェコ共和国のほうで働くようになったので、その後2年間ほどは、家族として過ごすことの出来るのは週末だけでとなりました。こうした別々の生活を送る間、二人と神との関係を高めるのは困難でした。しかし神様は寛大で、私たちの一緒の祈りに応えてくださって、夫はスロバキアに戻ることが出来ました。

人間は弱いものですが、私たちも例外ではありません。2年間の別居生活のために二人の会話は減り、心も離れていきました。それでも根本から変えて、家族の中の関係を取り戻そうとする勇気がありませんでした。神のインスピレーション（霊感）に対して、私たちは目を閉じ、耳をふさいでいました。この目によって、私たちは意思を持たないロボットのようになりました。

しかし、神様はこの状態の中の私たちを見捨られることはなくOME加する機会を与えてくださいました。それは教会の掲示板にお知らせとして現れました。こうした使徒職に関して主が司祭と夫婦に呼びかけてくださることに感謝します。そういう方こそ、主の声に応える意思があって、結婚の中の関係を作り直すように応える心を持っているのです。そのOMEは私たちの家から数キロのセレッドという町に行われていたので、行くことはたやすいことでした。子どもたちの面倒を見てくれる人を見つけるのは心配でしたが、神はそういう方も与えてくださいました。私たちの家族の生活を改善する方法を学ぶことが出来る有意義な2日間を与えられました。そのときの感情や印象を描写するのは困難です。私たちと同じ問題を持つ夫婦に会って、あきらめずに自分たちの生活や家族の中の神のみ旨を探し続けている方々に出会うのはすばらしい恵みでした。その方々の中の神の力によって、私達が以前、気がつかなかったとても重要なことを認めさせてもらえました。OME以来、私たちは自分たちをよりよく知る強い望み ー許し合い、対話し、ありのままの自分たちを受け入れ、理解する強い望みーをもちました。今は絶えず互いの愛を現していきたいと思っています。共に祈って、共に自分たちの結婚生活の質についていろいろ分かち合います。こうした望みが私たちの一番大事なことで、いまでは自分たちの家に反映されています。

決して簡単なことではないし、時間がかかることだともとわかっています。しかし主に頼って信頼し、神のみ旨を謙遜にたずねれば、主が私たちを見捨てられることはなく、家族にご自分のみ旨を実現するに必要な恵みを与えて下さるに違いありません。神に感謝！
（インクリッドとジャンコ）

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

スロバキアにはFIRESのすべてのプログラムがあります。それぞれに関するこのほかの証も様々いただいているのですが、残念なことに、翻訳が今回の編集までに間に合わず、載せることができながったことをご了承ください。